

ウツケ畠遺跡

三ツ溝遺跡・長田遺跡
大池添遺跡・竹ノ下遺跡

福岡県築上郡新吉富村所在遺跡の調査

1997

福岡県教育委員会

ウツケ畑遺跡

三ツ溝遺跡・長田遺跡
大池添遺跡・竹ノ下遺跡

福岡県築上郡新吉富村所在遺跡の調査



豊前バイパス遠景（平成7年度新吉富村圃場整備後、西から）

序

福岡県教育委員会は、建設省九州地方建設局北九州国道工事事務所の委託を受けて、一般国道10号豊前バイパス建設予定地に所在する埋蔵文化財の発掘調査を昭和62年度から平成6年度の間に実施いたしました。

本書はこのうち、平成2年度から6年度にかけて実施した築上郡新吉富村大字垂水に所在する三ツ溝・長田・大池添・ウツケ畠・竹ノ下遺跡、ならびに同郡大平村大字下唐原に所在する上の熊・小松原・柔野遺跡の発掘調査についての記録であります。

発掘調査の報告としては満足のいくものではありませんが、本書が埋蔵文化財に対する認識と理解、文化財愛護思想の普及、また学術研究における活用の一助になれば幸いです。なお、発掘調査に際しまして数々のご協力をいただいた建設省北九州国道事務所、新吉富村ならびに大平村教育委員会、地元の方々をはじめ関係者各位に対して、心から感謝申し上げます。

平成9年3月31日

福岡県教育委員会

教育長 光安常喜

例　　言

1. 本書は、福岡県教育委員会が建設省九州地方建設局北九州国道工事事務所から委託を受け、平成2年度から6年度に調査を行った築上郡新吉富村と同郡大平村に所在する遺跡群についての調査成果を「一般国道10号豊前バイパス関係埋蔵文化財調査報告」の第6集として取りまとめたものである。
2. 本書に収録した遺跡は、築上郡新吉富村に所在する三ツ溝・長山・大池添・ウツケ畠・竹ノド遺跡、ならびに同郡大平村に所在する上の熊・小松原・桑野遺跡である。これらを、二分間に分けてそれぞれ上巻、下巻とした。
3. 出土遺物の整理については、県教育庁文化課太宰府事務所と九州歴史資料館で行ったが、実施にあたり九州歴史資料館の横山義章と岩瀬正信・豊福弥生・平田春美の協力を得た。
4. 掘団のうち遺構実測図は池辺元明・飛野博文・小川泰樹・秦憲二・杉原敏之・吉田東明・笠原勝彦・末永浩一・犬塚カヲル・木下秀子・植山千保子・友田鈴香・是石美知子・原田和代・川野礼子・岡山喜代美・椋田幸子・中井美代子・横山康子が実測し、遺物実測は池辺・飛野・小川・秦・杉原・平田・櫻町陽子・岡田美子・久富美智子・田中典子・坂田順子・堀江圭子・藤原さとみ・江口幸子・脇之内久子・山木千鶴美・栗焼憲児・小田和利が実測した。また、図面の作成については豊福・原カヨ子の助力を得た。
5. 摂載写真的うち、遺構写真は池辺・飛野・小川・秦・杉原が撮影し、遺物写真的撮影については九州歴史資料館の石丸洋と北岡伸一が行つた。なお、空中写真についてはフォト・オオツカと（有）空中写真企画に依頼した。
6. 本書の執筆は、I を杉原と秦が、II を飛野が行い、III 以下については遺跡調査担当者が執筆・編集を行つた。その内訳は、本文目次に記してある。また編集については、上巻の編集を杉原が、下巻の編集を小川がそれぞれ行い、全体の編集を杉原が行つた。

本文目次

〔上巻〕

Iはじめに	1
-------	---

II位置と環境	9
---------	---

III三ツ溝遺跡	杉原
----------	----

1.はじめに	17
2.遺構と遺物	17
1)土坑	18
2)溝状遺構	18
3.おわりに	21

IV長田遺跡	1次：杉原、2次：秦
--------	------------

1.はじめに	23
2.遺構と遺物	23
1)竪穴住居跡	24
2)掘立柱建物跡	28
3)土坑	32
4)溝状遺構	40
5)その他の遺物	47
3.おわりに	51

2次調査

1.はじめに	53
2.遺構と遺物	53
1)溝状遺構	53
3.おわりに	55

V大池添・ウツケ畠遺跡	秦
-------------	---

1.はじめに	57
2.遺構と遺物	57
1)竪穴住居跡	57

2) 据立柱建物跡	70
3) 檻跡	88
4) 土坑	89
5) 溝状造構	90
6) ピット	91
7) 包含層・擾乱出土の遺物	95
3. おわりに	97
IV 竹ノ下遺跡	1次：小川・2次：秦
1. はじめに	103
2. 遺構と遺物	103
1) 据立柱建物跡	103
2) 檻状造構	112
3) 壴穴住居跡	113
4) 土坑	115
5) 壴穴状造構	117
6) 溝状造構	117
3. おわりに	119
2次調査	120
1. はじめに	120
2. 遺物	120
(下巻)	
VII 上の熊遺跡	121
VIII 小松原遺跡	137
IX 桑野遺跡	151

図版目次

巻頭図版 航空写真：豊前バイパス遠景（新吉富村平成7年度開場整備後、西から）

三ツ溝遺跡

図版1 1; 三ツ溝遺跡調査区全景（西から） 2; 三ツ溝遺跡調査区全景（東から）

長田遺跡

図版1 1; 長田遺跡調査区全景（南から）

2; 長田遺跡調査区全景（北から）

図版2 1; 調査区北他半全景（東から）

2; A地区北部（南から）

図版3 1; 1・2号住居跡、5号土坑、1号大溝（南東から）

2; 1号竪穴住居跡（南東から）

図版4 1; 1号竪穴住居跡カマド（南東から）

2; 同カマド袖部断面（北東から）

図版5 1; 2号竪穴住居跡（南東から）

2; 同カマド（南東から）

図版6 1; 1号堀立柱建物跡（南東から）

2; 2号堀立柱建物跡（北東から）

図版7 1; 調査区北半全景（東から）

2; 3号堀立柱建物跡（北西から）

図版8 1; 4・5号堀立柱建物跡（南西から）

2; 5号土坑（東から）

図版9 1; 1号大溝（東から）

2; 同上層断面（西から）

図版10 1; 2号大溝周辺

2; 2号大溝（東から）

図版11 1; 2号大溝特殊遺構（西から）

2; 3号大溝調査風景（東から）

図版12 1; 2次調査区全景（南東から）

2; 2次調査区全景（北西から）

図版13 1; 2次調査区全景（上空から）

- 図版13 2; 2次調査区東端落ち込み（上空から）
図版14 1; 1~4号溝全景（東から）
2; 1・2・3号溝土層断面1（北から）
図版15 1; 1・2号溝土層断面2（北から）
2; 2次調査区作業風景
図版16 1・2号竪穴住居跡、2・5号坑出土土器
図版17 1号大溝出土土器(上)、出土瓦(左)、出土叩文瓦(右上)、出土文字瓦(右下)
図版18 1. 出土・採集青磁・白磁他 2. 出土採集石器 3. 鉄器 4. 石棒
図版19 1; 1~3号溝出土瓦質土器
2; 2号溝出土馬の歯
- 大池添・ウツケ畑遺跡
- 図版1 1; 大池添・ウツケ畑遺跡から北西を見る（南東上空から）
2; 大池添・ウツケ畑遺跡1次調査区全景（南東上空から）
図版2 1; 大池添遺跡北区全景（南から）
2; 大池添遺跡南区全景（北から）
図版3 1; ウツケ畑遺跡1次調査区南側（上空から）
2; ウツケ畑遺跡2次調査区全景（北西から）
図版4 1; 1号竪穴住居跡全景（東から）
2; 2号竪穴住居跡全景（南から）
図版5 1; 3号竪穴住居跡全景（東から）
2; 3号竪穴住居跡カマド（南から）
図版6 1; 3号竪穴住居跡カマド土層断面（南から）
2; 4号竪穴住居跡全景（東から）
図版7 1; 6号竪穴住居跡全景（南東から）
2; 7号竪穴住居跡全景（東から）
図版8 1; 7号竪穴住居跡カマド（南東から）
2; 7号竪穴住居跡カマド土層断面（南東から）
図版9 1; 8号竪穴住居跡全景（北東から）
2; 9号竪穴住居跡・18号掘立柱建物跡全景（南東から）
図版10 1; 9号竪穴住居跡カマド土層断面（南東から）
2; 10号竪穴住居跡全景（南東から）
図版11 1; 10号竪穴住居跡カマド土層断面（南東から）
2; 11~15号竪穴住居跡全景（西から）

- 図版12 1; 9・10号竪穴住居跡・17~20号掘立柱建物跡全景（上空から）
2; 12~19号竪穴住居跡・22号掘立柱建物跡全景（上空から）
- 図版13 1; 1・2号掘立柱建物跡全景（北西から）
2; 4・5A・B号掘立柱建物跡全景（北東から）
- 図版14 1; 2号竪穴住居跡・6号掘立柱建物跡全景（北西から）
2; 6号掘立柱建物跡柱7縄袖陶器出土状態（北西から）
- 図版15 1; 7号掘立柱建物跡全景（北西から）
2; 9号掘立柱建物跡全景（南東から）
- 図版16 1; 3号竪穴住居跡・10号掘立柱建物跡全景（東から）
2; 11号掘立柱建物跡全景（東から）
- 図版17 1; 11号掘立柱建物跡柱1（南東から）
2; 11号掘立柱建物跡柱6（南東から）
3; 11号掘立柱建物跡柱4（南東から）
4; 11号掘立柱建物跡柱7（南東から）
- 図版18 1; 12号掘立柱建物跡全景（北東から）
2; 3・4・6・7号竪穴住居跡・13・14号掘立柱建物跡全景（上空から）
- 図版19 1; 15号掘立柱建物跡全景（南西から）
2; 16号掘立柱建物跡全景（北西から）
- 図版20 1; 17号掘立柱建物跡全景（南東から）
2; 19・20号掘立柱建物跡全景（南東から）
- 図版21 1; 19号掘立柱建物跡柱2（南東から）
2; 20号竪穴住居跡・21号掘立柱建物跡全景（北東から）
- 図版22 1; 22号掘立柱建物跡全景（南西から）
2; 23号掘立柱建物跡全景（南西から）
- 図版23 1; 23~26号掘立柱建物跡全景（北東から）
2; 23・24号掘立柱建物跡全景（南西から）
- 図版24 1; 瓦質火鉢出土状態（南西から）
2; 1号土坑土層断面（北西から）
- 図版25 1; 1号溝土層断面・1（北西から）
2; 1号溝土層断面・2（北西から）
- 図版26 1; 1号溝瓦片出土状態（南から）
2; ピットII遺物出土状態（北西から）
- 図版27 1; ウツケ烟道跡2次調査区南壁土層断面（北東から）

- 図版27 2; ウツケ烟遺跡2次調査作業風景
- 図版28 ウツケ烟遺跡出土土器1
- 図版29 ウツケ烟遺跡出土土器2
- 図版30 1; 1号溝出土瓦質土器
2; 1号溝出土軒平瓦
- 図版31 1; ウツケ烟遺跡出土製塩土器・土製品
2; ウツケ烟遺跡出土鉄製品・石製品
- 竹ノ下遺跡
- 図版1 1; 竹ノ下遺跡と豊前バイパス路線（北西から 空中写真）
2; 竹ノ下遺跡全景（南西から 空中写真）
- 図版2 1; 1~5号掘立柱建物跡（北西から 空中写真）
2; 1号掘立柱建物跡（南東から）
- 図版3 1; 2号掘立柱建物跡（南東から）
2; 3号掘立柱建物跡（南東から）
- 図版4 1; 4・5号掘立柱建物跡（発掘前 北東から）
2; 4・5号掘立柱建物跡（北東から）
- 図版5 1; 6号掘立柱建物跡（北東から）
2; 7号掘立柱建物跡（南東から）
- 図版6 1号掘立柱建物跡柱掘形
- 図版7 1・2号掘立柱建物跡柱掘形
- 図版8 2号掘立柱建物跡柱掘形
- 図版9 3・4号掘立柱建物跡柱掘形
- 図版10 4号掘立柱建物跡柱掘形
- 図版11 4・5号掘立柱建物跡柱掘形
- 図版12 5・6号掘立柱建物跡柱掘形
- 図版13 6号掘立柱建物跡柱掘形
- 図版14 1; 1号竪穴住居跡（南東から）
2; 1号竪穴住居跡カマド（南東から）
- 図版15 1; 1号土坑（南東から）
2; 2号土坑（南西から）
- 図版16 出土遺物
- 図版17 1; 竹ノ下遺跡2次調査区北側全景（南から）
2; 竹ノ下遺跡2次調査区南側全景（北から）

挿図目次

I.

第1図 豊前バイパス路線図 (1:500000) 1

II.

第2図 周辺の遺跡分布図 (1/50000) 10

第3図 新吉富村周辺の地形と豊前バイパス路線内の遺跡 (1/20000) 16

III. 三ツ溝遺跡

第1図 三ツ溝遺跡周辺地形図 (1/2000) 17

第2図 三ツ溝遺跡遺構配置略図 (1/1000) 17

第3図 1号土坑実測図 (1/40) 19

第4図 2号土坑実測図 (1/40) 19

第5図 1号大溝断面図 (1/40) 20

第6図 1号大溝・1~3号溝土層図 (1/40) 20

第7図 1号大溝出土土器実測図 (1/4) 21

IV. 長田遺跡

第1図 長田遺跡周辺地形図 (1/2000) 23

第2図 長田遺跡遺構配置略図 (1/1000) 24

第3図 1号竪穴住居跡実測図 (1/60) 25

第4図 1号竪穴住居跡カマド尖測図 (1/30) 25

第5図 2号竪穴住居跡実測図 (1/60) 26

第6図 1・2号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/60) 27

第7図 1~3号掘立柱建物跡実測図 (1/60) 29

第8図 4号掘立柱建物跡実測図 (1/80) 30

第9図 5号掘立柱建物跡実測図 (1/80) 31

第10図 6号掘立柱建物跡実測図 (1/60) 32

第11図 1~4号土坑実測図 (1/40) 33

第12図 5号土坑尖測図 (1/60) 34

第13図 2・5号土坑出土土器実測図 (1/3) 36

第14図 6~13号土坑実測図 (1/60) 38

第15図 14号土坑、1・2号小土坑実測図 (1/40) 39

第16図 溝土層図 (1/60) 41

第17図	2号大溝特殊造構実測図 (1/60)	42
第18図	大溝出土土器①実測図 (1/3)	44
第19図	大溝出土土器②実測図 (1/3)	45
第20図	1・4号溝出土土器実測図 (1/3)	47
第21図	瓦実測図 (1/4)	48
第22図	遺構検出他出土土器陶磁器実測図 (1/3)	50
第23図	鉄器・石器実測図 (1/2・2/3)	51
第24図	1~3号溝土層断面図 (1/40)	53
第25図	1~3号溝出土土器実測図 (1/3)	54
V. 大池添・ウツケ畑遺跡		
第1図	大池添・ウツケ畑遺跡周辺地形図 (1/2000)	58
第2図	1・2号竪穴住居跡実測図 (1/60)	59
第3図	3号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30)	60
第4図	3・4号竪穴住居跡実測図 (1/60)	61
第5図	6・7号竪穴住居跡・7号竪穴住居跡・カマド実測図 (1/60・1/30)	63
第6図	竪穴住居跡出土土器実測図1 (1/3、6・11は1/6)	64
第7図	8・9号竪穴住居跡実測図 (1/60)	65
第8図	10・11・14号竪穴住居跡・10号竪穴住居跡カマド実測図 (1/60・1/30)	67
第9図	12・13・15号竪穴住居跡実測図 (1/60)	69
第10図	16~20号竪穴住居跡実測図① (1/60)	71
第11図	竪穴住居跡出土土器実測図② (1/3、2・3は1/6)	72
第12図	1~3号掘立柱建物跡実測図 (1/80)	73
第13図	4・5A・B号掘立柱建物跡実測図 (1/80)	75
第14図	6~8号掘立柱建物跡実測図 (1/80)	77
第15図	9・10号掘立柱建物跡実測図 (1/80)	79
第16図	11~13号掘立柱建物跡実測図 (1/80)	80
第17図	14~17号掘立柱建物跡実測図 (1/80)	82
第18図	18~20号掘立柱建物跡実測図 (1/80)	83
第19図	21・22号掘立柱建物跡実測図 (1/80)	85
第20図	23・25・26号掘立柱建物跡実測図 (1/80)	87
第21図	24号掘立柱建物跡実測図 (1/80)	88
第22図	1号槽跡実測図 (1/80)	89
第23図	掘立柱建物跡出土土器実測図 (1/3)	89

第24図	1号土坑実測図 (1/60)	90
第25図	1号溝土層実測図 (1/60)	90
第26図	1号土坑出土土器実測図 (1は1/4、2・3は1/3)	90
第27図	ピット11実測図 (1/30)	91
第28図	1号溝出土土器実測図 (1/3、4・5・6は1/6)	92
第29図	ピット出土土器実測図 (1/3、5は1/4)	93
第30図	包含層・搅乱出土土器実測図 (1/3)	95
第31図	包含層・搅乱出土近世遺物実測図 (1・2は1/3、3~5は1/6)	96
第32図	土器品・製塙土器実測図 (1・2は1/2、3は1/4、4・5は1/3)	97
第33図	鉄製品・石製品実測図 (1/3、1/2)	97
第34図	時期別遺構配置図 (1/800)	99
第35図	広幡城跡出土土器実測図 (1/6)	101
第36図	黒水遺跡5号火葬墓実測図 (1/20)	102
第37図	黒水遺跡5号火葬骨蔵器実測図 (1/6)	102

VII. 竹ノ下遺跡

第1図	竹ノ下遺跡周辺地形図 (1/2000)	104
第2図	竹ノ下遺跡遺構配置図 (1/400)	折込
第3図	1~5号掘立柱建物跡配置図 (1/120)	105
第4図	1号掘立柱建物跡実測図 (1/60)	106
第5図	2号掘立柱建物跡実測図 (1/60)	107
第6図	3号掘立柱建物跡実測図 (1/60)	108
第7図	4・5号掘立柱建物跡実測図 (1/60)	109
第8図	6号掘立柱建物跡実測図 (1/60)	110
第9図	7号掘立柱建物跡実測図 (1/60)	111
第10図	1号竪穴住居跡実測図 (1/40)	112
第11図	1号土坑実測図 (1/40)	113
第12図	2号土坑実測図 (1/40)	114
第13図	出土土器実測図① (1/3)	115
第14図	出土土器実測図② (1/4)	116
第15図	1・2号竪穴状遺構実測図 (1/80)	折込
第16図	出土瓦実測図 (1/3)	118
第17図	2次調査出土遺物 (1/2・1/4)	120

表 目 次

表1 一般国道10号豊前バイパス関係遺跡一覧表 2

付 図

付図1 三ツ溝遺跡遺構配置図 (1/400)

付図2 長田遺跡遺構配置図 (1/400)

付図3 大池添・ウツケ畠遺構配置図 (1/400)

Fig 目次

1 官道線・路面設置設計図 7

2 解説板設計図と池ノ口遺跡解説板 8

スナップ

1 開通した豊前バイパス (三ツ溝・長田遺跡付近)

2 豊前バイパス開通式：岩戸神楽の舞い

3 完成した解説板

4 山国川と中津平野遺景 (大平村付近)



スナップ1 開通した豊前バイパス (三ツ溝・長田遺跡付近)

I. はじめに

1 調査の経過

平成6年3月27日に豊前バイパスは全線開通した。工事関係者、来賓の開通式の後に行われた一般の開通式には多くの人々のが参加があつたが、特に地元民の多さは目をひいた。そのとき、



第1図 豊前バイパス路線図 (1 : 500000・道路施設協会「九州自動車道」1993.10改変)

表1 一般国道10号 豊前バイパス関係遺跡一覧表

地点	遺跡名	所在地	内 容	分布面積(m ²)						調査面積(m ²)			報告書
				62年度	63	平成元	2	3	4	5	6		
1-A	新吉富村垂水	新吉富村垂水	弥生～古墳 集落							3,500	2,000		
1-B	池ノ口遺跡	新吉富村垂水	弥生～古墳 集落						4,000	1,800		3	
1-C	新吉富村垂水	新吉富村垂水	弥生～古墳 集落					3,200					
1-D	三ツ溝遺跡	新吉富村垂水	古墳～平安 集落～ 古墳～	40,000				3,500					6
1-E	長田遺跡	新吉富村垂水	新吉富村垂水							5,000	1,900		
1-F	大池原ツヅク 遺跡	新吉富村垂水	古墳～ 集落							4,000	500	6	
1-G	竹ノ下遺跡	新吉富村垂水	古墳～ 集落							3,000	500	6	
1-H	宇野代遺跡	新吉富村垂水	縄文～平安 集落～ 古墳							2,000	5,000	1	
2-A	上桑野遺跡	新吉富村垂水	弥生～古墳 集落～高地	4,000						700	9,000		
2-B		新吉富村垂水	近世	1,600						1,600			
3	桑野遺跡	大平村下唐原	弥生 集落	4,800						4,800			6
4	大塚本遺跡	大平村下唐原	縄文～江戸 集落・墓地他	16,000						18,000			
5	小松原遺跡	大平村下唐原	縄文～近世	11,200						10,000			6
6	上の熊遺跡	大平村下唐原	旧石器 集落他	4,500						4,500			6
7	金眉塚遺跡 (田カホツキ)	大平村下唐原	縄文～江戸 集落	14,000						13,000			4・7
8-A	上折原遺跡	大平村下唐原	縄文・弥生～奈良 集落	18,000	10,000	20,000							2・5
8-B	郷ヶ原遺跡	大平村下唐原	弥生～古墳 集落	6,500				6,500					
計				120,600	10,000	20,000	6,500	13,000	39,600	21,700	14,300	4,900	

あらためて地元民のこの道路に対する関心の高さを痛感したことを覚えている。

豊前バイパス建設事業を含む「北大道路」整備計画とは、北九州市中心部から大分市中心部までを結ぶ約136kmの道のりについて、その走行距離と所用時間の短縮を目的とするものである。その計画の背景にはさまざまな要因が上げられるが、大都市への人口集中と交通量の激増、それに伴う周辺地域のベットタウン化などが有機的に結び付いた結果であることはいまさら説明するまでもないであろう。その状況下で幹線道路が国道10号線に限られる豊前地域にとって、バイパス建設によってもたらされる効果と影響は地元民にとって最大の関心事であった。

この計画とその後の文化財調査の経緯については『豊前バイパス関係埋蔵文化財調査報告第1集 宇野代遺跡』に詳しいのでそちらを参照されたい。

ところで、このバイパス調査では、1,200年前の「古代の国道」＝「官道」が検出されている。その当時も人の往来や物資の輸送のために「道路は整備」されたのである。この成果については第3集の「池ノ口遺跡」で報告している。また、平成7年、現地の官道検出場所の路面上にはその路面幅の復元と標識の説明版が設置されたが、この件については後述する。

「歴史はくりかえす」この言葉通りである。かつて宇佐から都へと続く官道を切り開いたいにしへの人々は、今日のこのような状況を想像したであろうか。

以下に第6集に収録した、各遺跡の調査期間を記しておく。

〔新吉富村：上巻〕

三ツ溝遺跡：平成4年6月23日～8月28日

長田遺跡：（1次）平成5年8月23～平成6年2月24日　（2次）平成6年4月15日～5月27日

大池添遺跡：平成6年2月14日～3月29日（ウツケ畠と平行調査）

ウツケ畠遺跡：（1次）平成6年2月14日～3月29日　（2次）平成6年5月9日～5月19日

竹ノ下遺跡：（1次）平成5年2月1日～3月26日　（2次）平成6年6月27日～7月8日

〔大平村：下巻〕

上の熊遺跡：平成3年4月18日～6月7日

小松原遺跡：平成3年1月14日～3月30日

桑野遺跡：平成3年6月11日～9月7日

2 調査の組織と関係者

平成2・3・4・5・6年度の調査関係者は下記のとおりである。

建設省九州地方建設局北九州国造工事事務所

	2年度	3年度	4年度	5年度	6年度
所長	森 久	竹中 幸生	竹中 幸生	岩田 秀人	大内英吉郎

副所長	久谷秀明	中山高虎	中山高虎	中山高虎	平川輝義
建設専門官	田中陸憲	田中陸憲	田中陸憲	安部純弘	安部純弘
建設監督官	田中常美	百田国広	古賀義隆	古賀義隆	古賀義隆
工務課長	溝上義毅	溝上義毅	中山藏太	中川博勝	中川博勝
同係長	浅田敏光	平田政生	徳重英紀	徳重英紀	
調査課長	松崎安則	松崎安則	山田茂利	山田茂利	田中光助
同係長	田中敏則	荒瀬美和	柴田智	柴田智	柴田智
建設技官	井上敏彦	沓掛幸	沓掛孝	田邊稔	田邊稔
用地課長	窓口登				

福岡県教育委員会

教育長	御手洗康	御手洗康	光安常喜	光安常喜	光安常喜
教育次長	浜地甫伯	光安常喜	月森清三郎	横口修資	松枝功
指導第二部長	月森清三郎	月森清三郎	松枝功	丸林茂夫	丸林茂夫
文化課長	六本木聖久	森山良一	森山良一	森山良一	松尾正俊
参考事	森本精造	森本精造	松尾正俊	松尾正俊	柳田康雄
	石松好雄	柳田康雄	柳田康雄		
課長補佐	安野義勝	国武康友	石川元	清水圭輔	清水圭輔
	石松好雄	松尾正俊			
文化財保護室長	石松好雄	柳山康雄	柳田康雄	柳田康雄	
室長補佐	井上裕弘	井上裕弘	井上裕弘		
管理係長	池原信	岸本実	毛屋信	毛屋信	杉光誠
事務主査	東勇治	東勇治	安丸重喜		
主任主事	安丸重喜	安丸重喜			
調査班総括	柳田康雄	井上裕弘	副島邦弘	横口達也	横口達也
参考事補佐	井上裕弘	副島邦弘	佐々木應彦	高橋翠	池辺元明
技術主査	池辺元明	池辺元明	池辺元明	池辺元明	小池史哲
主任技師	飛野博文	飛野博文			
技師	小川泰樹	小川泰樹	小川泰樹	杉原敏之	秦憲二
調査補助員	笠原勝彦(現川崎町教育委員会)				
調査補助	末永浩一(現大平村教育委員会)、宮崎亮一(現太宰府市教育委員会)				
発掘調査には、新吉富村、大平村在住を中心とした多くの方々に参加していただいた。また、調査期間中には、渡部正氣(福岡県文化財保護審議委員会)、濱崎三司・宮本工一					

川淳江・川本義雄（福岡県文化財保護指導委員）、小川国男（垂水区長）、宮秋伸一（新吉富村教育委員会）、峯連見（大平村教育長）、尾座本康子（京築教育事務所）、中原三重子（文化課椎田事務所）、丹羽博・栗焼憲児・棚田明仁（豊前市教育委員会）、高尾栄市（築城町教育委員会）、山本健太郎（椎田町教育委員会）、末永浩一（大平村教育委員会）、植田由美（三光村教育委員会）などの方々のご援助ご指導を得た。

3 報告書の作成と関係者

出土遺物の整理については、発掘調査の終了した遺跡より順次九州歴史資料館へ搬入して水洗い、復元作業を実施した。そして、平成8年度には遺物実測作業、報告書作成作業を行った。現在は、飯塚バイパス、観山中継所出土資料の整理を進めている。

報告書作成にかかわる、平成8年度の関係者は次のとおりである。

建設省九州地方建設局北九州国道工事事務所

所 長	徳永 和幸
副 所 長	高崎 寿男
建設専門官	入部 秀信
工務課長	田中 常美
同 係 長	徳永 英紀
調査課長	大塚 法晴
同 係 長	竹下 卓宏
係 主 任	田邊 稔
用 地 課 長	加藤 彌彌
電気通信課長	行式 一成

福岡県教育委員会

総括 教育長	光安 常喜
教育次長	松枝 功
指導第二部長	竹若 幸二
文化課課長	石松 好雄 松尾 正俊（前任）
文化財保護室長	柳田 康雄
課長補佐	元永 浩士
課長技術補佐	井上 裕弘（兼文化財保護室長補佐）
調査班総括	樋口 達也
庶務 文化課管理係長	黒田 一治

同事務主査 久保 正志
 整理 福岡教育事務所生涯学習課参事補佐 池辺 元明（整理・執筆担当）
 京築教育事務所生涯学習課技術主査 飛野 博文（整理・執筆担当）
 九州歴史資料館調査課主任技師 小川 泰樹（整理・執筆担当）
 文化課技師 奈 慶二（整理・執筆担当）
 九州歴史資料館調査課技師 杉原 敏之（整理・執筆担当）
 整理指導員 岩瀬 正信（接合復元） 平田 春美（土器実測）
 同 北岡 伸一（写真撮影） 豊福 弥生（製 写）
 整理補助 原 カヨ子 関 久江 土山真弓美 岡 由美子 山中 典子 堀江 千子
 櫛町 陽子 久富美智子 板田 順子 藤原さとみ 江口 幸子 堀之内久美子
 山本千鶴美 古田 千穂 山田 智子 辻 清子 穴見 裕子 小国みどり
 高島 紗子 坂本恵津子 安永 啓子 近藤 京子 森 紀子 安武 道子
 古賀 陽子 竹山まち子 磯上トシ子

報告書作成にあつては、この他にも福岡県教育庁文化課橋口達也・中間研志・小池史哲・重藤輝行、北九州教育事務所高橋章、北筑後教育事務所赤司善彦、筑豊教育事務所水ノ江和同、九州歴史資料館栗原和彦、横田賢次郎・小山和利、豊前市教育委員会栗焼憲児、新古富村教育委員会矢野和昭、大平村教育委員会末永浩一諸氏の協力を得た。
 （杉山敏之）



スナップ2 豊前バイパス開通式：岩戸神楽の舞い

4 案内板の作成

豊前バイパス1-A地点である池ノ口遺跡の調査成果は、すでに報告済みであるが、その後完成を見た案内板について、触れておきたい。

平成4年9月から平成6年6月まで調査が実施された池ノ口遺跡では、古代官道と推定される道路状遺構が検出された。道路状遺構は幅6mで、側溝を持ち、残りのよい所では20mにわたって礫石混じりの硬面が検出された。道路状遺構の検出例としてだけでなく、遺跡周辺に推定されている条理区画の復原や東に位置する古代寺院の垂水庵寺の寺域推定の基準になる重要な資料である。

工事主体である建設省北九州国道事務所との協議の中でこの成果を報告したところ、事前調査の成果を公表する目的を兼ねて、遺跡の案内板を作成し、道路状遺構の位置を示すことになった。

案内板は豊前バイパスの歩道の広い部分に取り付け、歩行者のみならずバイバス利用車内からも位置がわかるようにし、さらに、実際に道路状遺構の所在していた位置を示すため、バイパスの歩道と高架下の側道上に陶板を貼り、座標杭を打った。

案内板の本体は、地上部分で縦2.4m、横1.45m、奥行き0.2mで表面は小タタキ仕上げである。説明部分には写真やイラストができるだけ鮮明に表現でき、色あせることのない陶板を用い、タイトルは磁器陶板200角を6枚使用し、文章・図面・写真部分は400角6枚を使用した。道路に敷設する陶板は長さ30.8cm、幅14.2cm、1mスパンで両側で23枚使用した。

案内板の文章・図面・写真原稿は福岡県教育委員会で作成し、文章表現は中学生以上を対象年齢とする平易なものとし、図面・写真を多くしている。陶板製作と本体工事を合わせて、岩尾對山窯に発注し、平成8年2月13日に完成した。
(秦 慶二)

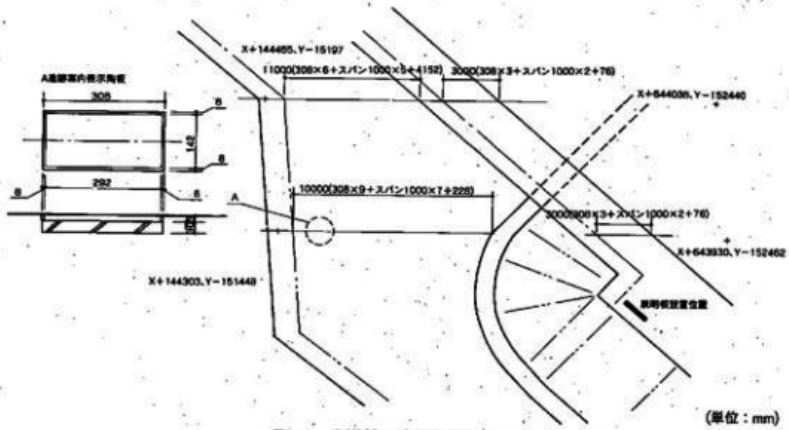
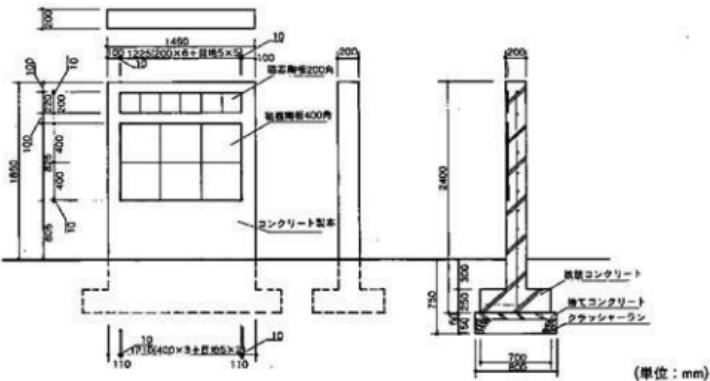


Fig 1 官道線・路面設置設計図



(単位: mm)

古代官道の池ノ口遺跡

Fig 2
解説板設計図(左)と
池ノ口遺跡解説板(右)

池の口遺跡の概要 (説明文・遺跡配置図)	池の口遺跡より 東南を見る (写真)	古代の交通網 (九州の官道推定図)
古代の官道について (説明文)	道路の建設方法 (説明文・写真・図面)	官道で運ばれたもの (説明文・木籠写真・イラスト)



スナップ3
完成した解説板

II. 位置と環境

1 地理的環境

ここに報告する各遺跡は、福岡県東部、大分県と接する地域に所在する遺跡群で、行政的には筑上郡新吉富村、同大平村に属する。

両村ともに人口4,000人強ほどの農村で、南部は英彦山（標高1,200m）から派生した雁股山・大平山などの山岳で大分県下毛郡と接し、特に大平村西部（西友枝地区）などには深い谷が入り込む。東は一級河川山国川を挟んで、大分県中津市・下毛郡と接し、経済圏はほぼ中津市に吸収される。

周辺の地形は、先の山国川水系に大きく影響される。すなわち、大平村百留から下唐原地区にかけては山国川の自然堤防・沖積地が発達し、その背面（西側）に比高20mほどの低位段丘（中津面）が発達する。その西側の低丘陵を友枝川が開析し、左岸に小規模な冲積地と低位段丘（垂水面）を形成しつつ、山国川に合流する。この垂水面が発達する地域（新吉富村大字垂水・宇野など）には条理構造が良好に遺存しているといわれていたが、ここ数年の大規模圃場整備事業によってすべて一変した。垂水面の西側にやはり山国川に流入する黒川という小河川があり、それでも左岸に比高5~10mの段丘を形成（安雲面）し、その西北側は現在豊前市と新吉富村を隔てて二級河川佐井川まで続く。これらの低位段丘は中津面が75万年以前、下末吉期（6~13万年前）に形成され、以後、安雲面、垂水面の順に形成されたと考えられている。

2 歴史的環境

先に記したような地形の上に多くの遺跡が刻まれてきた。県下でもこの地域は開発が遅れていたために資料が乏しく、取り上げられることもありなかつたが、ここ数年の国道10号バイパス新設・大規模圃場整備事業や各種公共事業に伴う発掘調査の急増によって新たな知見が続いている。

さて、大平村は昭和30年に唐原村・友枝村が合併して発足したもので、村名は両村の南になだらかな山容を見せる標高611mの大平山に由来する。同じく新吉富村は西吉富村・南吉富村が合併して誕生した。また、筑上郡は明治29年に築城・上毛両郡が合併したものである。ここに報告する各遺跡は旧唐原村・南吉富村に所在し、旧上毛郡に所属する。以下で、旧上毛郡を中心に考古学的な知見を記す。

縄文時代以降

この周辺では旧石器時代の遺跡と呼べるものはまだ未確認であるが、遺物は散見する。量的



第2図 周辺の遺跡分布図(1/50000)

- 1.三毛門故生田遺跡
- 2.鶴生山古墳
- 3.小石原泉遺跡
- 4.巨石塚古墳
- 5.大／源下大坪遺跡
- 6.垂水原寺
- 7.垂水場文遺跡
- 8.牛頭天王(中岳野遺跡)
- 9.尻高畠田遺跡
- 10.黒日・山田烹跡群
- 11.土佐井須跡
- 12.土佐井シソンド遺跡
- 13.今瀬遺跡
- 14.穴ヶ葉山古墳・穴ヶ葉山遺跡
- 15.能満寺古墳群
- 16.西方古墳
- 17.百留櫛穴墓群
- 18.原井三ツ江遺跡
- 19.相原寺
- 20.永源遺跡
- 21.上ノ原横穴墓群・塔跡野遺跡・草部古墳群
- 22.佐知遺跡
- 23.長者原散遺跡
- 24.古代官道推定線
- A.垂水地区遺跡群
- B.手野代遺跡
- C.上森野遺跡
- D.鷹野遺跡
- E.大塚本遺跡
- F.小松原遺跡
- G.上ノ原遺跡
- H.堀跡遺跡
- I.源ノ原遺跡
- J.上唐原遺跡

にかなりまとまった遺跡として豊前市青烟向原遺跡¹⁷がある。廣場整備事業に伴う事前調査で調査され、黒曜石製・水晶・製ナイフ形石器、安山岩製剝片尖頭器などが出土した。他にはこの豊前バイパスにかかる大平村桑野遺跡、上の熊遺跡などの調査で、遺構に伴わない状態でナイフ形石器、剝片尖頭器が採集されている（本編参照）。

縄文時代の遺跡は特に後期に属する集落跡の発見が相次いでいる。山国川左岸の大平村原井¹⁸三ツ江遺跡、同上唐原遺跡、右岸の大分県三光村佐知遠跡、友枝川左岸の大平村土佐井遺跡、同新吉富村垂水遺跡、佐井川左岸の豊前市狭間宮ノ下遺跡、小石原泉遺跡、中川左岸の河内楠木遺跡、角田川左岸の中村石丸遺跡¹⁹が旧上毛郡域に属する。いずれも大小の河川に接する段丘上に営まれた集落跡で、同様な立地を見る遺跡は築上郡椎田町山崎・石町遺跡、同郡篠城町松丸遺跡、京都郡豊津町節丸西遺跡など、周防灘沿岸に広く共通する様相である。以上は最も資料が充実する後期の遺跡であるが、早期に遡る遺跡・遺物も発見されている。

豊前市吉木遺跡は、標高12mほどの微高地の東側斜面に位置する。ここでは明確な遺構を確認できなかつたが、押型文土器などがかなりまとまって出土しており、生活の場であったことが想定されている。また、周辺の調査でも同じ頃の土器・石器が出土しており、遺跡の広がりが確認されている。椎田町小原岩陰遺跡は当地で調査されたはじめての洞窟遺跡である。トレーニング調査で、前期と考えられる埋葬人骨や、早期、前期、後・晩期などの数枚の文化層が確認されている。この岩陰遺跡は現在では小河川である真如寺川に浸食されたとされ、開口82m、高さ18m、奥行き6mの大規模なものである。後期以前のまとまった遺跡は以上であるが、遺物は各地で採集されている。

晩期の遺跡も調査例が乏しいが、大平村下唐原川下遺跡²⁰で採集された資料が紹介されている。山国川左岸の自然堤防上にあり、晩期中頃ないし若干下降する時期とされる鉢あるいは深鉢や打製石斧がある。

弥生時代

山国川流域の弥生時代の遺跡は、弥生時代前期後半でも末葉に近い時期の遺跡が中流域の段丘上・自然堤防上などで確認されている。代表的な遺跡は段丘上の新吉富村牛頭天王（中桑野）遺跡²¹で、ここでは中期前半までに巨大な掘立柱建物跡を営み、中期後半頃には環濠を備えるなど、拠点的な集落とみて間違いない。豊前バイパス路線内で発見した大型方形周溝墓（墳丘墓）を含む墓地である大塚本遺跡²²や、ここで報告する桑野遺跡、次年度報告予定の上桑野遺跡なども牛頭天王遺跡を中心に形成された遺跡と考えられる。その他には、大平村上唐原の山国川左岸の自然堤防上、新吉富村垂水の友枝川左岸段丘上で前期後半から中期にかけての遺物が出土しているが、調査面積が狭小で、遺跡の広がりや性格を把握するにいたっていない。

旧上毛郡域で最も古式の弥生土器は、豊前市赤熊の昭和町遺跡から出土したという壺棺であ

るが、これは偶然の発見であつて遺跡の内容ははつきりしない。しかし、位置的には海岸に近い砂丘にあることから伝播ルートが推測できる。

中期後半の遺跡はまだ数が少ない。佐井川左岸で平成8年度に実施された豊前市河原田塔田遺跡では、箱式石棺・土壙墓群から各種の玉類や細型銅戈片が出土し、中期前半の有力集団の墓所と推定された。同地区では破壊・集積された中期後半の丹塗土器や当地域で初出の大型器台片も出土し、長期にわたる集落の存在が推測されている。また、周辺地域では該期の集落も調査された。

後期でも後半の遺跡は、大平村唐原地区の上唐原遺跡・郷ヶ原遺跡・大分県三光村佐知遺跡などが自然堤防・微高地で発見された。友枝川左岸から黒川にかけての新吉富村宇野・垂水地区では圃場整備事業等に伴って100軒以上の該期の住居跡が確認されていて、ここにもいくつかの集落が並立していたようである。佐井川左岸の段丘上的小石原泉遺跡などにも濃密に分布していた。そのうち、道路幅という限られた調査範囲であったが、郷ヶ原遺跡は環濠を有する点で特記される。

弥生時代の墓地としては先の大塚本遺跡が中期に遡る特定集団墓として重要である。開墾のために残存状況はよくないが、周辺で列状配置をとる土壙墓群も検出された。後期の墓地は調査されたものとして大平村穴ヶ葉山遺跡、そして金居塚遺跡があるが、他にも各所で石蓋土壙墓が発見されている。穴ヶ葉山遺跡では、二次にわたる調査で密集する80余基の石蓋土壙墓、2基の土壙墓が検出され、船載内行花文鏡片1点、素環頭を含む刀子や鉄鏃、鉗等39点の鉄製品などの豊富な副葬遺物を有していた。構造的にも、大部分が削出しの枕を付設し、ベンガラを多用するなど、優位にある集団を想定できた。

青銅器としては、古く大平村東下で出土したという中広銅矛1点の他は、先の穴ヶ葉山遺跡の鏡片、金居塚遺跡・佐知遺跡出土の細型銅劍片、河原田塔田遺跡の細型銅戈片が知られる。

古墳時代

従来、広く築上郡内で前・中期の古墳あるいは前方後円墳は全く知られていなかつたが、平成2年に西方古墳（前方後円墳）、次いで同5年にはその北500mの段丘肩で偶然に能満寺古墳群が発見・調査された。能満寺古墳群は1号墳（円墳、木棺）、2号墳（方墳、石蓋土壙墓）、3号墳（前方後円墳、竪穴式石室？）が調査され、2号墳から完形のいわゆる弥生時代小型仿製鏡・鉄劍・玉が、3号墳から船載鏡鏡片・同四獸鏡が出土するなど内容的にも特筆されるものである。これらに次ぐ5世紀を前後する遺跡として山国川右岸の段丘縁に勘助野地遺跡や幣旗部古墳群などの方墳があり、5世紀中葉頃には永添遺跡の造出しを有する円墳が続く。山国川左岸では5世紀代の有力な古墳は中葉前後の前方後円墳と推定される櫛生山古墳以外にまだ未発見であるが、後期には再びこの段丘肩付近に大型古墳が占地する。金居塚古墳群や穴ヶ葉

山古墳などである。穴ヶ葉山古墳は葉・鳥などの線刻を有する国指定史跡の円墳であり、近年環境整備に先立つ調査が実施され、多量の土器が出土し、大規模な墳丘の様子が明らかとなつた。これ以外にも旧上毛郡西端の豊前市黒部古墳群^{新吉富村}、新吉富村山田古墳^{新吉富村}などの線刻壇面古墳が知られる。また、横穴としては豊前市平原横穴墓群や大平村百留横穴墓群が砾灰岩に彫り込まれた精美な姿を有して知られる。また、学史的にも重要な遺跡となった大分県三光村上ノ原横穴墓群は山国川を挟んで金刀比羅遺跡とちょうど対峙する位置にあり、段丘の法面に掘り込むという同様なやり方をしている。

古墳時代の集落は、前期に属するものは弥生後期以来の集落と連続性がある。中期に属するものはまだ例が乏しく、新吉富村宇野・垂水地区で発見されるのみである。後期の集落は、上磨原遺跡^{新吉富村}・佐知遺跡^{新吉富村}・小石原泉遺跡等前代以来の場所に占地する例や、豊前市荒堀中ノ原遺跡^{新吉富村}のように内陸部の低丘陵上に位置するものなどがある。豊前市域の低丘陵は開墾が進んで遺跡の遺存が悪いため、特異な状況を示すものか、まだ今後の資料の蓄積が必要である。また、新吉富村大ノ瀬大坪遺跡では6世紀代の大集落が発見されている。調査が都心推定地の確認調査であるために該期集落の発掘を行っていないが、近くに独立して所在する吉岡巨石塚古墳^{新吉富村}の存在とも併せ、後代の繁栄の先駆けとなるものであろう。

生産遺跡としては新吉富村山田・照日窯跡群が16世紀中葉頃から須恵器生産を開始し、やがて瓦生産へと移行する。

歴史時代

『和名抄』ではこの地域を「上毛（加牟津美介）郡」と記した。また、「釋日本紀」卷十三には筑紫君磐井の最後について「筑後國風土記」をひき、「豊前國上善縣」と記す。同時代の記録としては、文武天皇2（698）年に铸造された筑前觀世音寺梵鐘の口縁下端に「上三毛」の線刻が、また、大宝2（702）年戸籍断簡に「豊前國上三毛郡塔里」、同「加自久也里」とあり、上勝から上三毛、そして上毛へと転訛したことが窺える。先の戸籍などから秦氏が広く豊前地方に進出していったことが指摘されているが、考古学的にそれを傍証する資料は乏しい。中で注目されているのは古代寺院に使用された瓦である。豊前では旧田河・京都・仲津・上毛・下毛・宇佐の各郡で古代寺院の存在が確認されているが、屋瓦は大宰府系と呼ばれるもの他に高句麗系・新羅系・百濟系といった多様なものが出土し、渡来系工人の活躍を想定できる。

上毛郡では新吉富村垂水廃寺^{新吉富村}が古くから知られ、確認調査もなされたが、伽藍配置や規模などはまだ判然としていない。推定寺域の南に隣接する小学校講堂改築に際して行った垂水高木遺跡の発掘調査では真北に近い方位をとる据立柱建物跡や、垂水廃寺に使用された軒瓦を利用した小規模な竪穴式住居などが、次いで同寺域内の果樹移植に先立つて行った調査では方位を異なる溝・据立柱建物跡が瓦を伴って発見された。少なくとも方位に近い遺構と、条里方向

(官道に規定されたようである)にのる遺構とが発見されており、今後の調査が期待される。

瓦を供給した窯跡は、大平村に所在する国指定史跡友枝瓦窯跡^{註1}・新吉富村桑野窯跡^{註2}・同山田窯跡^{註3}などが知られ、一部は調査を実施している。また、牛頭天王遺跡で礎石列が存在したといい、須恵器と同様な製作手法などを有する特異な瓦が採集されており、古代の重要な遺跡が存在した可能性が高い。この瓦は、中津市伊藤田窯跡群から供給されたといい、6世紀末から7世紀初頭を下らない時期に比定される。

また、平成6年には從来から推定されていた付近で古代官道と思われる遺構が確認され、7・8年には新吉富村大字大ノ瀬の段丘上で、官道推定線に隣接して郡衙と思われる遺跡が発見された。中央付近に一辺60m前後の柵列で囲まれた政庁域、その四周一辺150~160mの範囲を柵・溝で囲み、多くの建物跡が配置されている。郡衙政府の調査としては遅期的なものとなつた。ちなみに、この上毛郡衙の郡倉は未発見であるが、大分県中津市長者屋敷遺跡では下毛郡衙の郡倉が発見された。いずれにしても、郡衙・魔寺の存在からして、この新吉富村北部が旧上毛郡の政治・文化の中心的役割をになっていたことは間違いない。

古代末期以来、豊前一円に宇佐八幡宮の莊園が成立する。また、鎌倉時代には関東下り衆宇都宮氏が仲津郡木井郷（現京都府木戸川町木井馬場）に入り、やがて豊前一帯に一族を配することとなる。それと前後する中世居館跡の発見・調査も近年相次いでいる。中でも、大平村府舎改築工事で発見された「林崎城」と伝承される遺跡は、從来宇都宮氏との関係で語られることが多かった地域にあって、平安後期に遡ることが判明した点でより重要である。

- 註1 千田 昇他「山国川・流域の地形」(『山国川一自然・社会・教育』大分大学教育学部、1989)
註2 小池 史哲「旧石器時代」(『豊前市史 考古資料』、1993)
註3 大平村教育委員会「原井三ツ江遺跡」(『大平村文化財調査報告書』第5集、1989)
註4 福岡県教育委員会「上原唐遺跡Ⅱ」(『一般国道10号豊前バイパス関係埋蔵文化財調査報告』第5集、1996)
註5 大分県教育委員会「佐知遺跡」(『大分県文化財調査報告書』第81集、1989)
註6 大平村教育委員会「土佐井地区遺跡」(『大平村文化財調査報告書』第6集、1990)
註7 渡辺正正「福岡県筑上郡新吉富村重水遺跡調査報告」(『古文化談叢』第11集、1983)
註8 園場整備事業に先立ち、1994~95年にかけて豊前市教育委員会が調査。
註9 小池 史哲「小石原泉遺跡」(『豊前市史 考古資料』、1993)
註10 平成8年度、県営園場整備事業の工事中に水路を掘削して検出。「豊豊」Vol.7に掲載予定。
註11 福岡県教育委員会「中村石丸遺跡」(『一般国道10号線椎田道路関係埋蔵文化財調査報告』第8集、1996)
註12 福岡県教育委員会「山崎遺跡」(『一般国道10号線椎田道路関係埋蔵文化財調査報告』第7集、1992)
註13 椎田町教育委員会「石町遺跡」(『椎田町文化財調査報告書』第1集、1988)
註14 梁城町教育委員会「城井谷」(『梁城町文化財調査報告書』第2集、1992)
註15 鹿津町教育委員会「豊前國府および第丸西遺跡」(『鹿津町文化財調査報告書』第9集、1992)
註16 福岡県教育委員会「吉木遺跡」(『福岡県文化財調査報告書』第83集、1989)
註17 小池 史哲「吉木常松遺跡」(『豊前市史 考古資料』、1993)
註18 椎田町教育委員会「小原谷」(『椎田町文化財調査報告書』第4集、1992)
註19 宮本 工・村上 久和・城戸 誠「山国川流域における編文時代後・晩期の遺跡」(『九州考古学』59、1984)
註20 新吉富村教育委員会「中桑野遺跡」(『新吉富村文化財調査報告書』第3集、1978)
註21 新吉富村教育委員会「牛頭天王遺跡・垂水高木遺跡」(『新吉富村文化財調査報告書』第8集、

- 1994)
- 註20 平成3年度に、豊前バイパス建設に伴い福岡県教育委員会が発掘調査。次年度報告予定。
- 註21 平成3年度に、豊前バイパス建設に伴い福岡県教育委員会が発掘調査。次年度報告予定。
- 註22 武末 純一「昭和町遺跡」(『豊前市史 考古資料』、1993)
- 註23 福岡県教育委員会「上唐原遺跡Ⅰ」(『一般国道10号線豊前バイパス関係埋蔵文化財調査報告』第2集、1995)
- 註24 平成元年度、豊前バイパス建設に伴い福岡県教委が発掘調査。次年度報告予定。
- 註25 平成6年度から開始された宇野地区県営圃場整備事業に伴って新吉富村教委が調査。
- 註26 平成7年度にかけて、豊前東部工業用地造成に伴い、市教委が発掘調査。
- 註27 大平村教育委員会「穴ヶ葉山遺跡」(『大平村文化財調査報告書』第8集、1993)
- 註28 福岡県教育委員会「金居塚遺跡Ⅱ」(『一般国道10号線豊前バイパス関係埋蔵文化財調査報告』第7集、1997)
- 註29 福岡県教育委員会「金居塚遺跡Ⅰ」(『一般国道10号線豊前バイパス関係埋蔵文化財調査報告』第4集、1996)
- 註30 大平村教育委員会「能溝寺古墳群」(『大平村文化財調査報告書』第9集、1994)
- 註31 大分県教育委員会「勘助野地遺跡」(『一般国道10号線中津バイパス埋蔵文化財調査報告』(I)、1988)
- 註32 中津市教育委員会「幣旗部古墳」(『中津市文化財調査報告書』第4集、1984)
- 註33 中津市教育委員会「水添遺跡 中津城跡 (御用屋敷跡) ホヤ池窓跡」(『中津市文化財調査報告書』第13集、1993)
- 註34 吉富町教育委員会「檜生山古墳」(『吉富町文化財調査報告書』第3集、1991)
- 註35 福岡県教育委員会「金居塚遺跡Ⅰ」(『一般国道10号線豊前バイパス関係埋蔵文化財調査報告』第4集、1996)
- 註36 大平村教育委員会「穴ヶ葉山古墳群」(『大平村文化財調査報告書』第3集、1985)
- 註37 実洋開発株式会社「黒郡古墳群」、1979
- 註38 北代 茂ほか「山田古墳」(『新吉富村誌』、1990)
- 註39 丹羽 博「平原横穴墓群」(『豊前市史 考古資料』、1993)
- 註40 宮本 工「先史・原始時代」(『大平村誌』、1986)
- 註41 大分県教育委員会「上ノ原横穴墓群Ⅰ～Ⅲ」(『一般国道10号線中津バイパス埋蔵文化財調査報告』(II)、1989～91)
- 註42 福岡県教育委員会「池ノ口遺跡」(『一般国道10号線豊前バイパス関係埋蔵文化財調査報告』第3集、1996)
- 註43 はかに、平成6年度から開始された宇野地区県営圃場整備事業に伴って調査。
- 註44 23文献に同じ。
- 註45 豊前市教育委員会「県営圃場整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告一Ⅲ一」(『豊前市文化財調査報告書』第7集、1991)
- 註46 平成7年度から、団体営圃場整備事業に伴つて村教委が調査。
- 註47 38文献に同じ。
- 註48 新吉富村教育委員会「垂水施寺」(『新吉富村文化財調査報告書』第2集、1976)
- 註49 新吉富村教育委員会「日照遺跡群」(『新吉富村文化財調査報告書』第9集、1995)
- 註50 47文献に同じ。
- 註51 新吉富村教育委員会「牛頭天王遺跡 垂水高木遺跡」(『新吉富村文化財調査報告書』第8集、1994)
- 註52 大平村教育委員会「友枝瓦窯跡」、1976
- 註53 森田 雄「垂水施寺・友枝瓦窯跡・山田窯跡」(『九州古瓦図録』九州歴史資料館編、1981)
- 註54 計47・48・52文献などと同じ。
- 註55 村上 久和・吉田 寛・宮本 工「豊前に於ける初期瓦の一様相一大分県中津市伊藤田窯跡群で生産された初期瓦」(『古文化談叢』第18集、1987)
- 註56 福岡県教育委員会「池ノ口遺跡」(『一般国道10号線豊前バイパス関係埋蔵文化財調査報告』第3集、1996)
- 註57 平成7年度から、団体営圃場整備事業に伴つて村教委が調査。現地説明会資料など。
- 註58 平成7年度、市営住宅改築に伴い調査。現地説明会資料など。
- 註59 大平村今賀遺跡、豊前市小石原泉遺跡、同三毛門放生田遺跡、椎田町西八田堂の本造跡等がある。
- 註60 大平村教育委員会「恵良古墳群・今藏遺跡・綱手遺跡」(『大平村文化財調査報告書』第10集、近く刊行予定)
- 註61 福岡県教育委員会「三毛門放生田遺跡」(『福岡県文化財調査報告書』第121集、1995)



第3図 豊前バイパス・新吉富村周辺の地形と路線内の道路 (1/20000)

三ツ溝遺跡

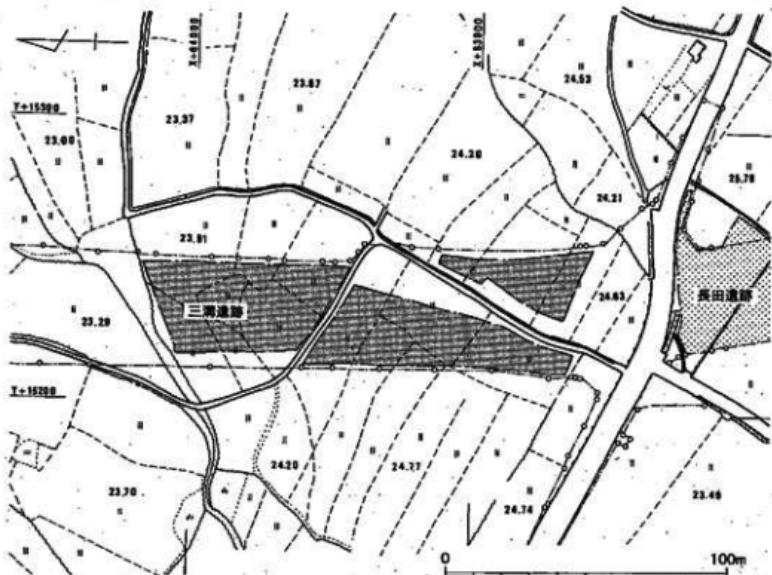
1. はじめに

遺跡の調査区は、築上郡新吉富村大字宇野字三ツ溝、正ノ坪に位置している。遺跡は、西方の黒川から派生してきた河岸段丘上の先のやや落ちた谷部に残されている。バイパス路線内では、北に池ノ口遺跡、南に長田遺跡がそれぞれ位置している。調査以前は水田であった。また、近年ではすぐ北側の水田も圃場整備により調査されている。

本遺跡の主な検出遺構は土坑2基、大溝1条、溝3条である。調査は平成4年6月23日～8月28日にかけて行われ、調査面積は約3,500m²である。

2. 遺構と遺物

1) 土坑



第1図 三ツ溝遺跡周辺地形図 (1/2000)

1号土坑（第3図）

A地区の1号大溝の南側で検出された。上縁長軸3.05m、短軸1.42mで最深54cmを測る。隅丸長方形で一部にテラスがある。主軸方位はN74°Eを測る。遺物は出土していない。

2号土坑（第4図）

A地区1号大溝南側で大溝に接する状態で検出された。上縁長軸1.84m、短軸1.10mで最深50cmを測る。主軸方位はN6°Wで出土遺物は無い。

2) 溝状遺構

1号大溝（第5・6図）

A調査の南側付近において、東西方向に約30mにわたって検出された。東側付近においては、1号溝が並走している。溝の幅は約2~3m位で深さは80cm、各エレベーションを見ても変化はなく、標高23.3m位である。また、西側付近においては溝の両肩が方形に大きく開く場所がある、取水口であろうか。流れる方向までは分からぬ。

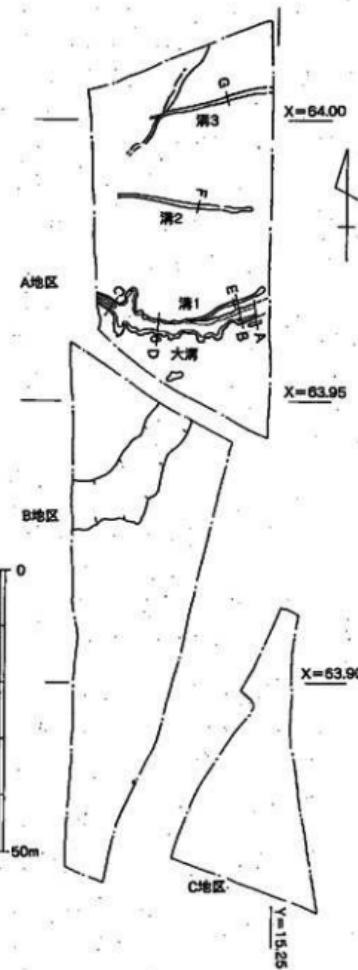
出土遺物

土器（第7図）

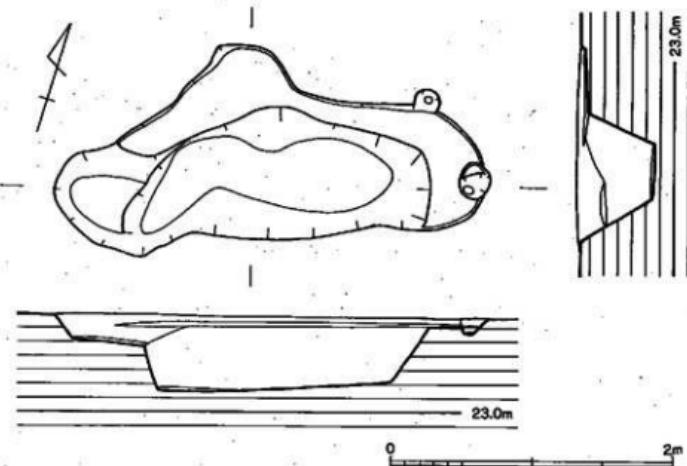
1は埋土中より出土した。須恵器甕の脇部片である。外面には斜め方向のハケ目、内面には同心円状の当て具痕が観察される。時期は不明。

1号溝（第6図）

A地区的南側で約15m分検出された。1号大溝と並走している。幅は約0.5m、深さは約10cmである。出土遺物はなく、時期は不明である。



第2図 三ツ溝遺跡遺構配置略図 (1/1000)



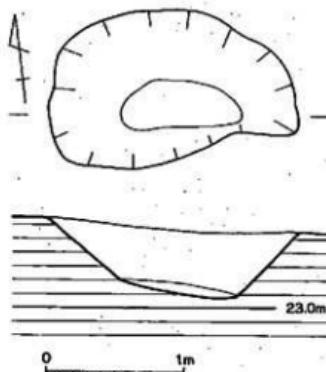
第3図 1号土坑実測図 (1/40)

2号溝（第6図）

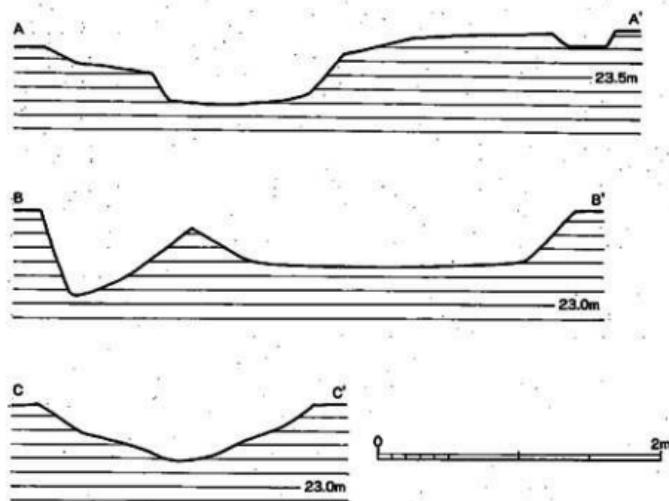
A地区中央部付近で約22m分検出された。東西方向に走っている。幅約0.8m、深さ約40cmを測る。1層に黒色土が堆積しているが、2層の状況は1号溝と同じである。西側で途切れている。

3号溝（第6図）

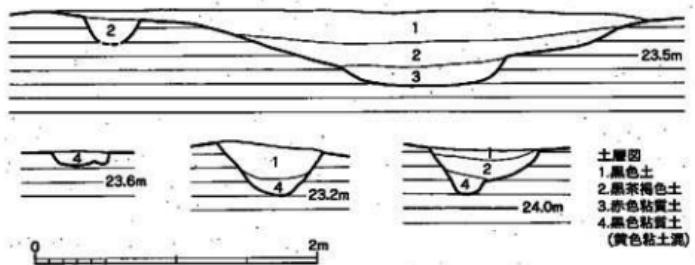
A地区北側で約26m分検出された。東西方向に走っているが、西に向かって細くなり途切れる。幅約0.8m、深さ30cmを測る。



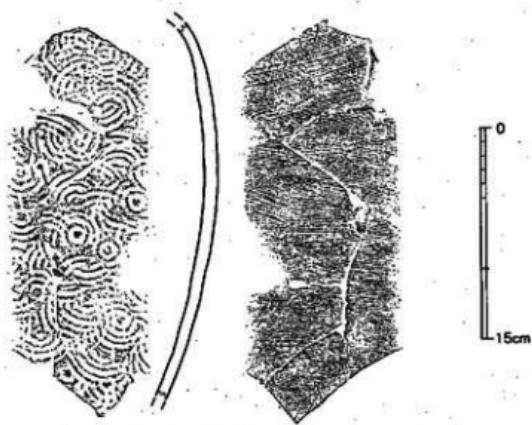
第4図 2号土坑実測図 (1/40)



第5圖 1号大溝断面図 (1/40)



第6圖 1号大溝・1~3号溝土層図 (1/40)



第7図 1号大溝出土土器実測図 (1/4)

3. おわりに

本遺跡では、日常生活に直接かかわる遺構の検出はできなかつた。北側に接している池ノ口遺跡のC地区南端では、溝があるだけではなく低湿地に起因すると考えられる黒色土があり、住居跡・掘立柱建物跡等はそれを避けた所に残されている。三ツ溝遺跡の場合も同じく遺跡内を縫うように黒色土があるが、これは黒川から派生してきた河岸段丘間の谷部に形成された湿地帯の自然流路ためと考えられる。このような水の影響を直接受けやすい場所であるため、住居跡のような日常生活にかかわる遺構は残されないのであろう。

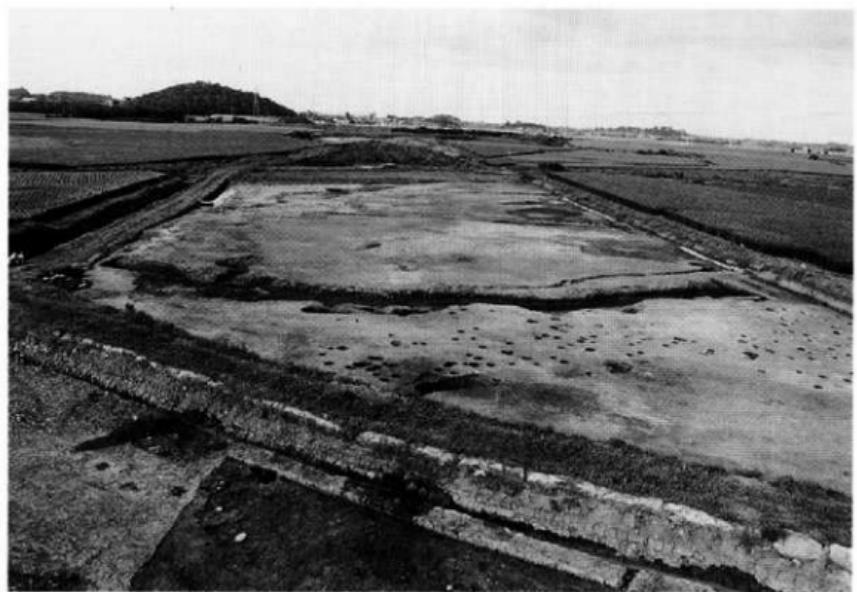
一方、検出された主要遺構には1号大溝ある。人為的に掘られた溝であることは間違いないく、用水機能を持つものと考えられる。そして、埋土中からは大甕の胴部片が出土しており、6世紀以降の年代が与えられることしか判らない。ただ、1号大溝がこのような場所に残された意味は今後も考えていく必要があろう。

また、近年の周辺遺跡の調査から、この三ツ溝遺跡の立地している中津平野西部地域は大規模集落が営まれた場所であることが判ってきた。その中で、各時期の集落の様相が徐々に明らかになりつつある。そして、それらの成果を取りまとめるとき、集落の展開における空間活用の問題がでてくるはずであり、そのなかで三ツ溝遺跡も有機的に評価されるだろう。



スナップ4 山国川と中津平野遠景（大平村付近）

図 版



1 三ツ溝道路調査区全景（西から）



2 三ツ溝道路調査区全景（東から）

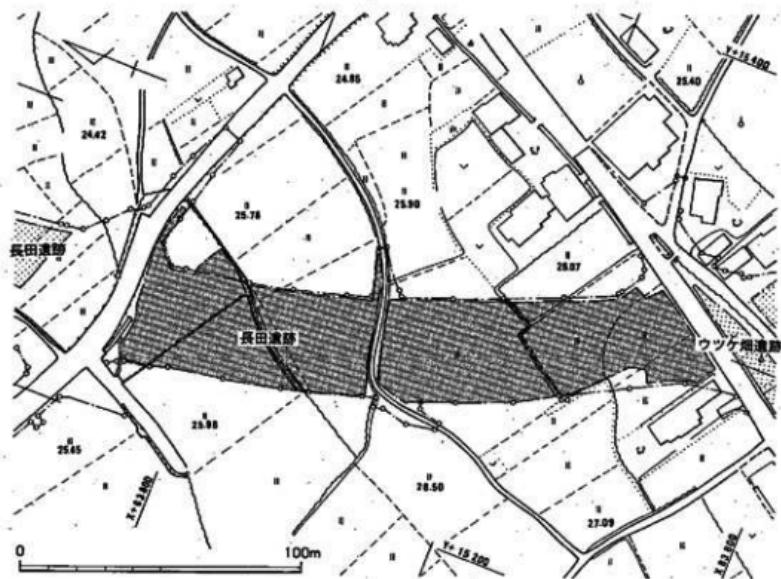
おさ
長田遺跡

1. はじめに

この遺跡の調査区は、築上郡新吉富村大字垂水字長田、一つ枝他に位置する。北に三ツ溝遺跡が、南に大池添遺跡がそれぞれ道路を挟んで位置している。地形的にみると、黒川の東に残されている舌状に細長く伸びる河岸段丘上に遺跡は立地している。北側の三ツ溝遺跡が道路を隔てた少し低い谷部にあり、調査区南側で黒色土の残る谷を挟んだ一段高い所に大池添遺跡が残されている。このような地形は、三ツ溝遺跡の北に位置する池ノ口遺跡でも観察される。しかし、ここ数年来の道路建設や開墾整備によりそれらは失われつつある。

発掘調査は、平成5年8月より開始したが、路線内の先行工事によって別地点の調査が入り幾度か中断した。このため平成5年8月23日～平成6年2月24日（この間も中断あり）にかけて行われた調査を1次調査とし、次年度の4月15日～5月27日に調査した部分を2次調査として報告する。調査面積は、1次調査（平成5年度）が5,000m²、2次調査（平成6年度）が1,900m²である。

2. 遺構と遺物



第1図 長田遺跡周辺地形図 (1/2000)

1) 窪穴住居跡

1号窓穴住居跡（図版3-2、第3図）

A地区の1号大溝の北で2号住居に並んで検出された。住居の主軸はN48°Eで一辺の長さは南北辺と東西辺がそれぞれ、4.00×4.00mを測り正方形を呈している。検出面から床面までの壁高は残りの良いところでおよそ18cmを測る。床面は貼床であるが、住居の掘形は残りは悪い。また、主柱穴は4本柱であり、最も残りの良いP2で直径30cm、深さ約50cmを測る。主柱穴以外のピットが北隅に2つあるかいずれも深いものではない。周溝は南から西にかけて巡っている。カマドは北中央部に設けられている。遺物は中央床面より、杯身が出土している。住居の廃棄年代を示す資料である。

カマド（図版4、第4図）

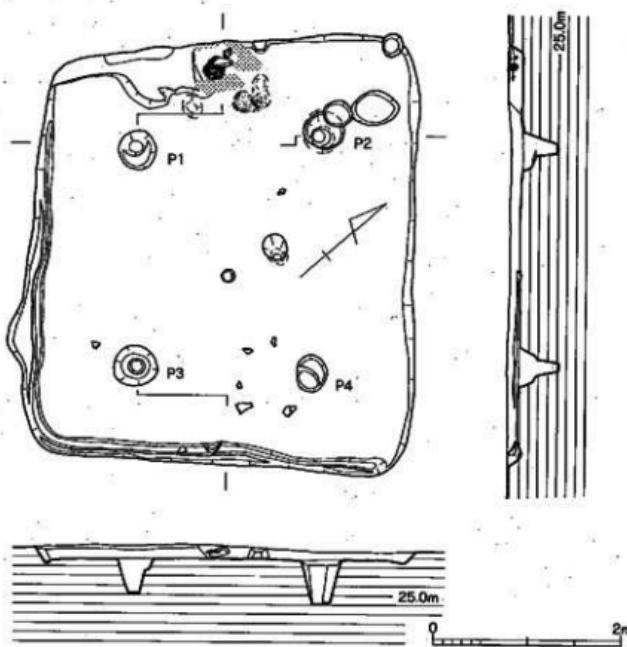
カマドは、住居跡北壁に付設されているがすでに破壊されており、両袖とも右に傾いている。また、煙道は粘土で厚く被覆されたまま西壁まで伸びている。基底部の幅は、左袖で約60cm、高さ約20cm位はあつたものと思われる。破壊された燃焼室からは河原砾を利用した支脚や土師器片が出土しており、復元すれば、約40×60cmを測ることができる。煙道は、左袖から伸びて西壁に接しており、最大幅は約60cmを測り厚い。断ち割って土層を観察したが焼土などの熱を受けた痕跡は確認されなかつた。

山土遺物

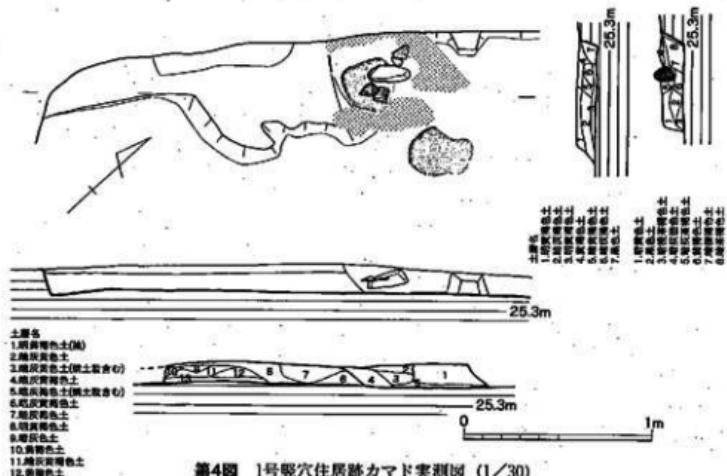
土器（図版16、第6図）



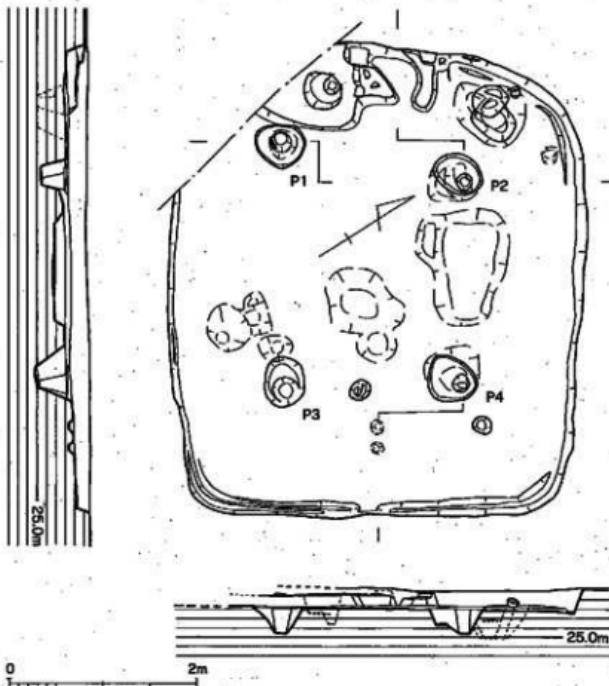
第2図 長田遺跡遺構配置図 (1/1000)



第3図 1号竪穴住居跡実測図 (1/60)



第4図 1号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30)



第5図 2号竖穴住居跡実測図 (1/60)

1はほぼ完形の須恵器杯身で口径11.6cm、器高3.65cmを測る。外底面の調整はヘラ削りの後ナデ調整されている。住居跡中央床面より出土。2の邊は口縁部付近を大きく欠き、胴部以下も欠損している。外底面は削りによる調整。3は復元口径20.6cmを測る土師器蓋で、頭部ヨコナナ調整。住居南側床面より出土。

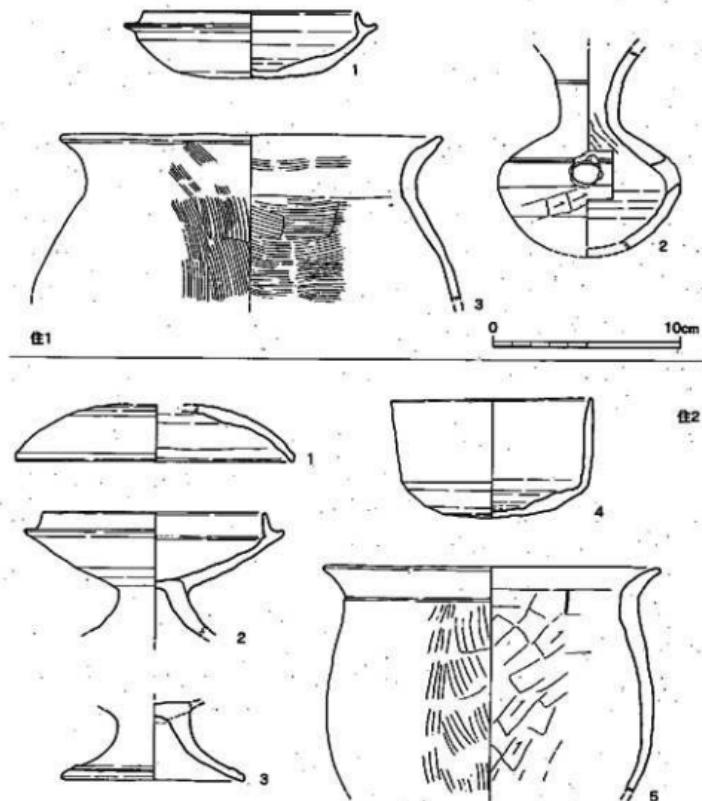
鉄器 (図版18、第23図)

2は小型の刀子でわずかに刃を観察できる。床面より出土。

これらの出土遺物より、造営の時期は6世紀後半代と考えられよう。

2号竖穴住居跡 (図版5-1、第5図)

A地区北側で1号住居跡に並んで検出された。一边の長さは南北辺と東西辺がそれぞれ440m×400mを測り隅丸長方形のプランを呈している。検出面から床面までの壁高は残りの良い場所



第6図 1・2号窓穴住居跡出土土器実測図 (1/3)

で20cmを測る。床面は貼床で、下層は中央部で多少深く掘りこまれている程度で深い掘形ではない。主柱穴は4本柱であり、最も残りの良いP4で直徑30cm、深さ約30cmを測る。その他のピットは北壁のカマドの両袖付近にそれぞれあり、右側のピットで深さ30cmを測る。遺物はカマド内より土器器片が、右袖そばのピット付近の床面からは須恵器楕が出土している。

カマド (図版5-2)

住居跡北壁中央部に付設されているが、左袖はすでに破壊されている。残る右袖は長さ55cm、基底部の幅25~30cmで、高さは残りの良い取り付け部で約20cmを測る。燃烧室は40×60cmを測る。左袖に被覆された粘土は住居の端に伸びるが、西側が調査区外のためコーナー部分の取りつきについては不明である。また、その一部を断ち割ったが、焼土は確認されなかった。

出土遺物

土器（図版16、第6図）

1の杯蓋は破損資料で天井部外面は回転ヘラ削り調整。器面の磨滅が著しい。2の高杯の杯外底面は回転ヘラ削りで、脚部との接合部分を丁寧にナデている。3も同様の資料であろう。器部に沈線が入る。4の楕は口径10.6cmで、器高6.9cmを測る。口縁から胴部外面を丁寧にナデしており、外底面は回転ヘラ削り。カマド右袖横の床面より出土。5は復元口径約18cmを測る。カマド左袖付近より出土。

遺構の時期は6世紀後半代であろう。

2) 掘立柱建物跡

1号掘立柱建物跡（図版6、第7図）

A地区の北側で検出された1間×2間の建物であり、主軸方位はN47°Eである。梁行2.60m、桁行2.34mを測る。柱穴は径28~30cmで、深さは16cm位である。柱痕ははつきりと確認できなかった。柱穴からの出土遺物はない。

2号掘立柱建物跡（図版6、第7図）

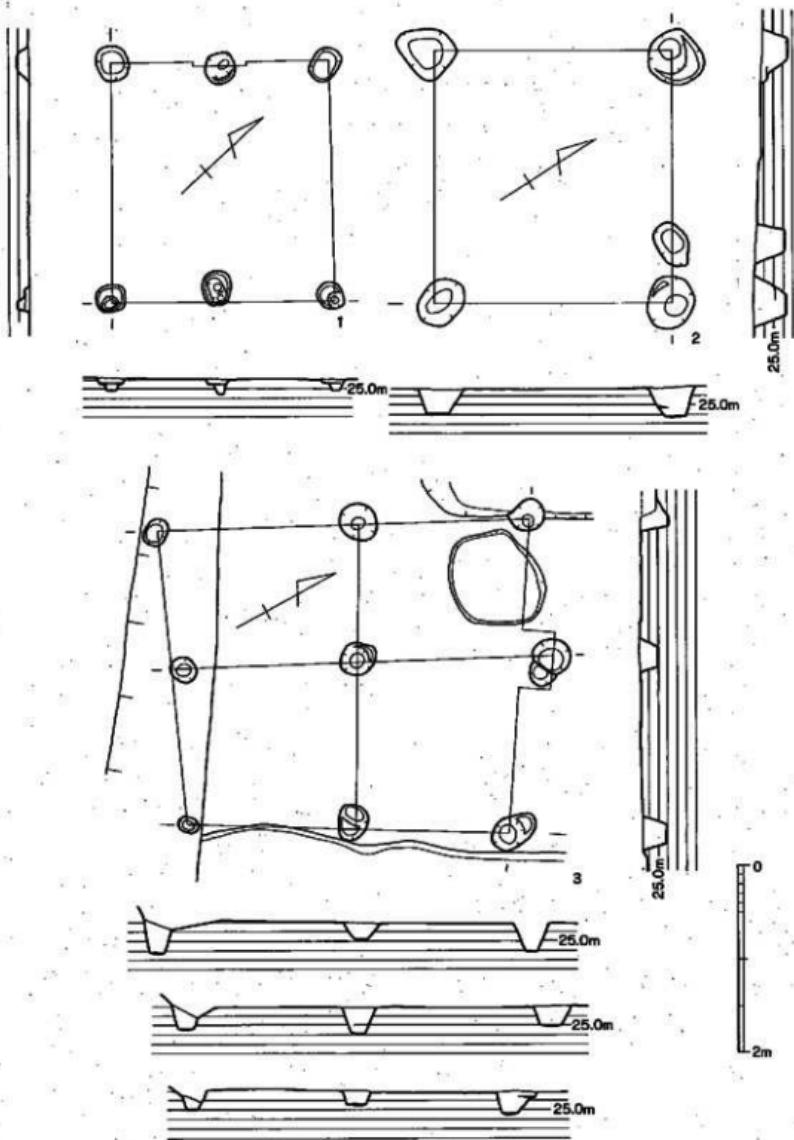
A地区の北側、1号建物跡の南側で検出された1間×1間の建物である。主軸方位をN34°Eにとり、梁行2.70m、桁行2.54mを測る。床面中央部では2号土坑が検出されている。それぞれの柱穴の径は約50cm位で深さ約30cmを測る。柱穴からの出土遺物はない。

3号掘立柱建物跡（図版7、第7図）

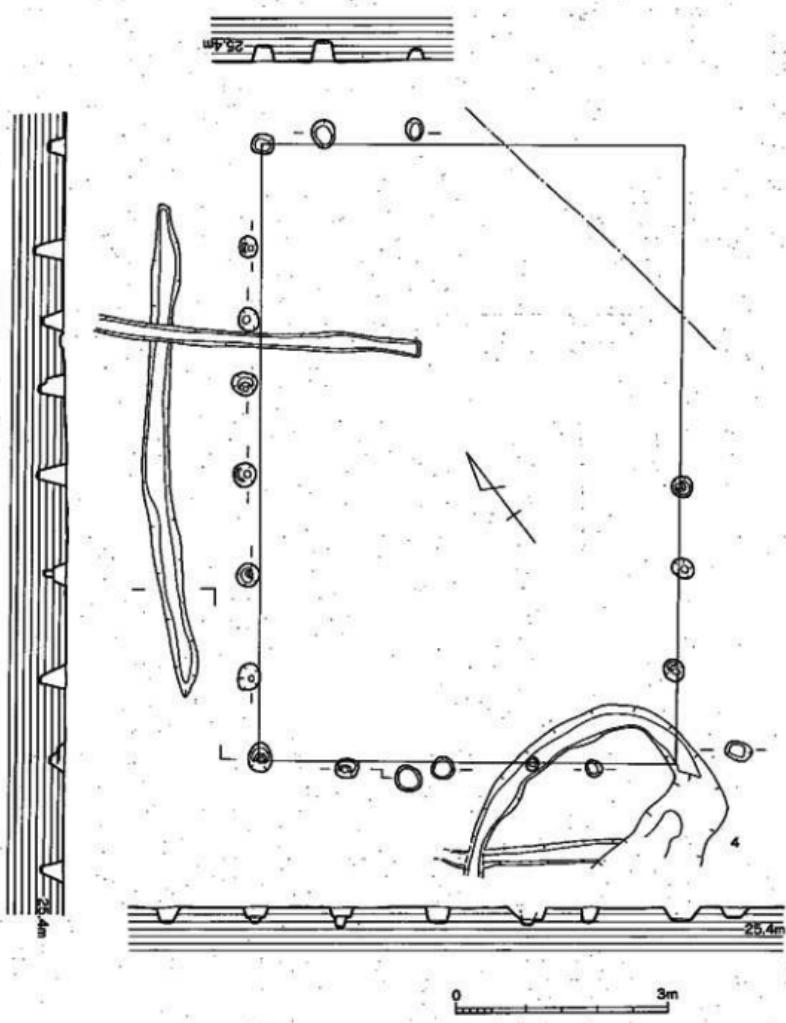
A地区の北側で検出された2間×2間の総柱建物である。主軸方位をN27°Eにとる。西側の桁については、調査区拡張後、新たに確認された。梁行3.36m、桁行3.32mを測り、柱間距離はそれぞれ1.46m、1.90mで、南側1.80m、1.64mである。柱穴は径40cm位で、深さは残りの良いところで30cm位である。柱痕ははつきりと確認できなかった。柱穴からの出土遺物はない。

4号掘立柱建物跡（図版8、第8図）

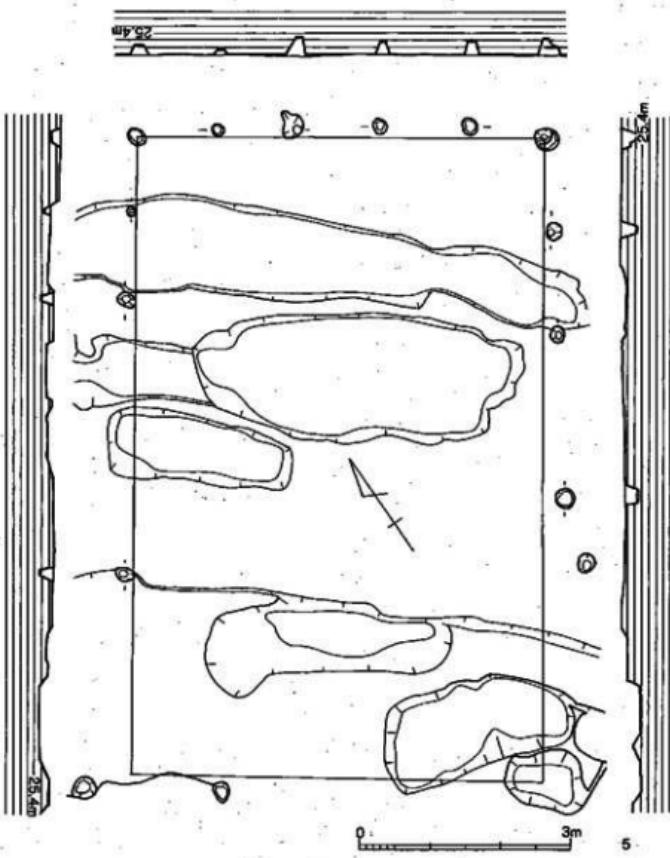
B地区北の1号大溝南側で5号建物跡と並んで検出された。北側の一部は調査区外に伸びている。5間×7間の建物であり、主軸方位をN37°Eにとる。梁行2.98m、桁行4.40mを測る。柱間距離は、梁行で1.00~1.20m位、桁行で1.00~1.20m位を測る。柱穴は径20~26cm位で、深さは35~40cm位で径に対して深い穴である。全体に不規則に柱穴が配置されており規格性は低い。また、柱穴からの出土遺物はない。



第7図 1~3号掘立柱建物跡実測図 (1/60)



第8圖 4号掘立柱建物跡実測図 (1/80)



第9図 5号掘立柱建物跡実測図 (1/80)

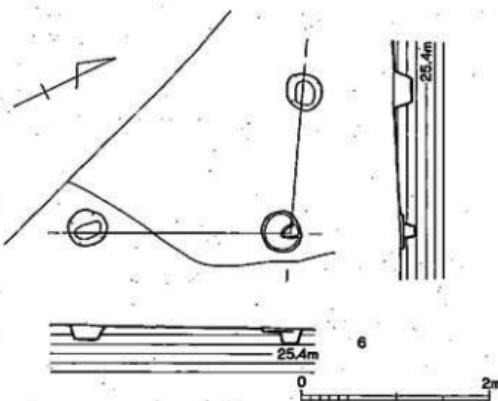
5号掘立柱建物跡 (図版8、第9図)

B地区北の1号大溝南側で4号建物跡と並んで検出された。半数位の柱穴が後世の擾乱を受けており梁行5間であるが、桁行については不明である。主軸方位をN35°Eにとり、梁行2.97m、桁行4.50mを測る。柱間距離は北の梁行で1.00~1.20m位、桁行で1.20m位を測る。柱穴は径20~

25cm位で、深さは35~44cm位で径に対して深い穴である。全体に不規則に柱穴が配置されている。柱穴からの出土遺物はない。

6号掘立柱建物跡（第10図）

C地区南の2号大溝の西側で検出された。大部分は調査区外であり、主軸方位をN26°Eにとり、梁行桁行が1間×1間以上になること以外に規模は分からぬ。柱間距離はそれぞれ、1.54m、2.20mである。柱穴は径35~40cm位で、深さは残りの良いところで20cm位である。柱穴からの出土遺物はない。



第10図 6号掘立柱建物跡実測図 (1/60)

3) 土坑

1号土坑（第11図）

A地区北側の1号掘立柱建物の東で検出された。上縁長軸1.88m、短軸0.71mで、最深42cmを測る。極端な隅丸長方形である。主軸方位はN70°Eを測る。遺物は出土していない。

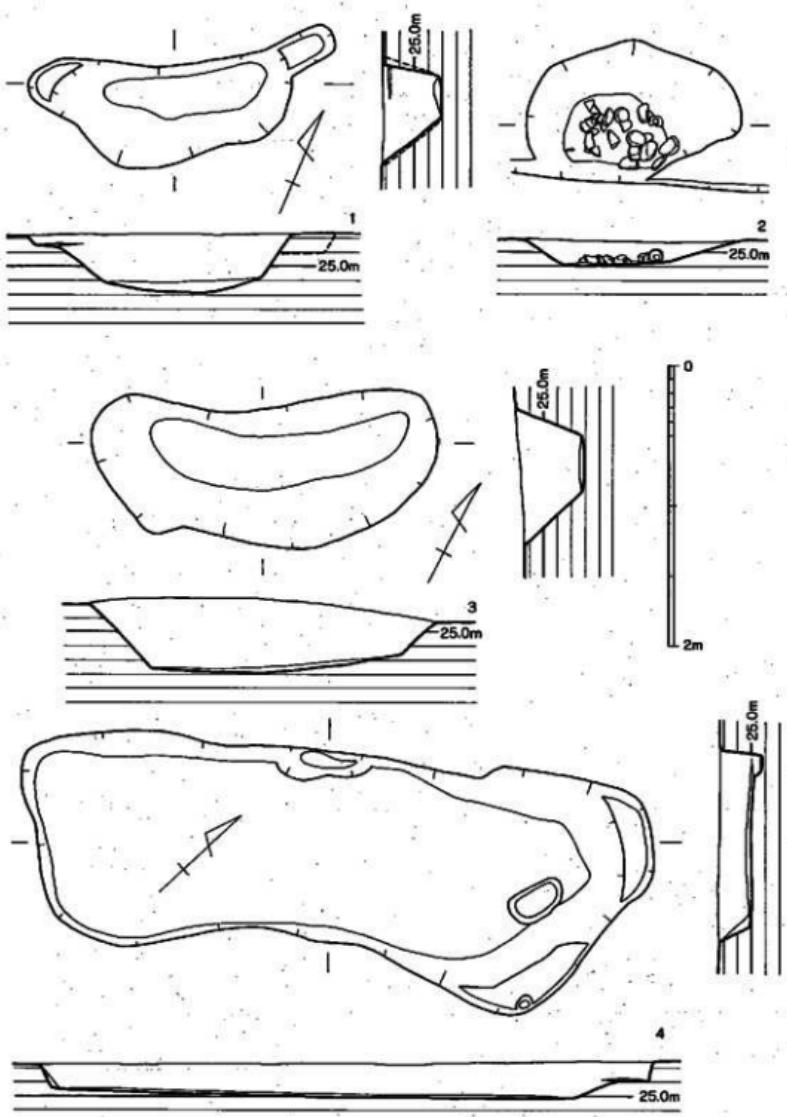
2号土坑（第11図）

A地区北側の2号掘立柱建物の中央床面部で検出された。上縁長軸1.52m、短軸1.00mで最深18cmを測り、不定形な梢円形を呈している。土坑内には拳大の礫が投げ込まれ、土器等とともに混在している。主軸方位はN30°Eを測る。遺物は出土していない。

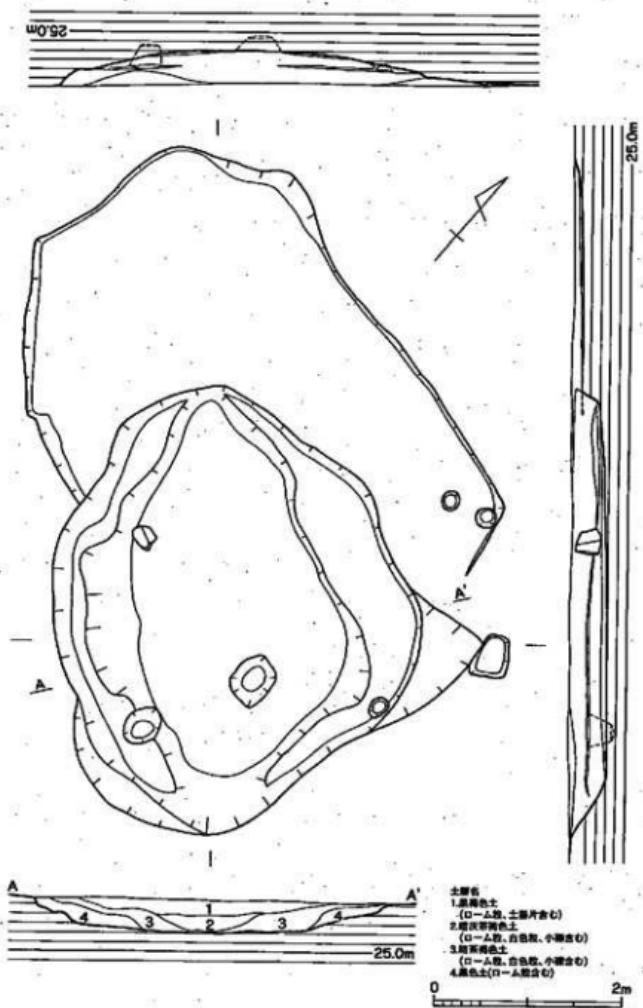
出土遺物

土器（図版16、第13図）

1は磨滅著しく調整不明。口径124cmを測る。2も磨滅著しいが外底面は削りのちナテ調整。3も器面の磨滅が著しい。杯部外底面の調整は削りであろう。裾部に突帯を一条持つ。4も同様。



第11図 1~4号土坑実測図 (1/40)



第12圖 5号土坑実測図 (1/60)

の資料であろう。5は口径216cm、器高383cmを測る。内外面ともに刷毛目による調整で、底面については認められるが磨滅している。頸部はヨコナデ。

遺構の時期は6世紀後半であろう。

3号土坑（第11図）

A地区の1号掘立柱建物跡の北で検出された。上縁長軸246m、短軸0.76mで最深0.52mを測る。極端な隅丸長方形で多少湾曲しており、倒木痕の可能性もある。主軸方位はN27°Eを測る。遺物は出土していない。

4号土坑（第11図）

A地区の1号大溝北に近接して検出された。上縁長軸4.36m、短軸1.36mで、最深0.24mを測る大きな隅丸長方形のプランを呈している。埋土は上層がやや酸化し赤味を帯びた灰色土でその下層ではローム混じりの黒色土が堆積している。浅いが床面の角が鋭く、人の手によって掘られたのである。また、埋土の状況から自然堆積でなく人為的に一気に埋められたと考えられる。主軸方位はN74°Eを測る。遺物の出土はなく時期決定はできない。

5号土坑（図版8、第12図）

A地区の1号大溝のすぐ北で検出された。上縁長軸4.80m、短軸4.58mで最深0.40mを測り大きな不定形のプランを呈している。主軸方位はN42°Wを測る。土坑内に二つピットがあり、深さは30cm位ある。埋土が黒色土であることから水の影響が考えられ、貯水施設の可能性がある。確認段階では2基の土坑が切り合っていると考えられたが、一方は浅く土坑には成りえない。切り合いからみれば土坑が新しいが、それぞれに大きな時期差を求めるよりセットで機能する貯水施設と考えて良いのかもしれない。

出土遺物

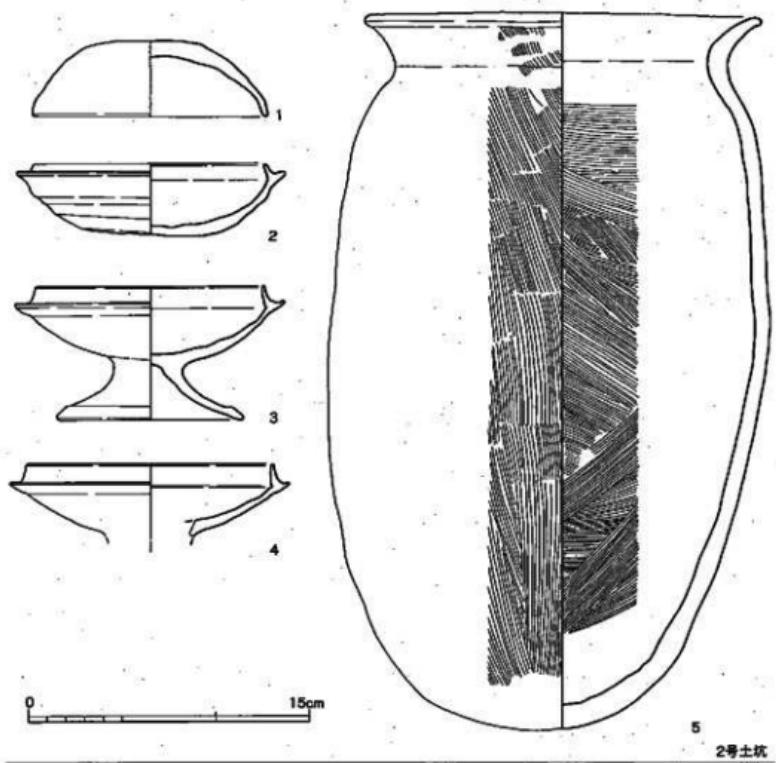
土器（図版16、第13図）

1の高杯は口径102cmを測り、杯部の高さは約60cmある。杯部内外面共にナデ調整で外面には沈線が入る。外底面は削り出して、接合部はナデによって行われている。2は土層観察のベルト中より出土した。

遺構の時期は6世紀後半である。

6号土坑（第14図）

6~13号土坑はC地区南側の1号溝の北で近接して検出された。これらの土坑は確認段階では切り合いが不明で検出段階で確認した。また、埋土は自然堆積したと言うより、時間を置かず



第13圖 2·5號土坑出土土器夾測圖 (1/3)

埋められたような状況であり、時期差はないと考えられる。また、一箇所で集中的に掘られていたため土取りの可能性も残している。

6号土坑は一番西側に位置し、プランのわかる残りが良いものの一つである。復元上縁190m、確認面からの深さは54cmを測り、隅丸長方形を呈している。主軸方位はN90°Eを測る。遺物は出土していない。

7号土坑（第14図）

残存状況が良く、確認面からの深さは54cmを測る。円形に近い形を呈している。主軸方位はN46°Eを測る。遺物は出土していない。

8号土坑（第14図）

この土坑も残りが良く、確認面からの深さは58mを測り、円形を呈している。主軸方位はN86°Eを測る。

出土遺物

瓦片が出土している（第21図）。

9号土坑（第14図）

特に残りが良い土坑の一つである。確認面からでの復元上縁は120mで、深さは100mを測る。円形を呈している。主軸方位はN13°Wを測る。遺物の出土はない。

10号土坑（第14図）

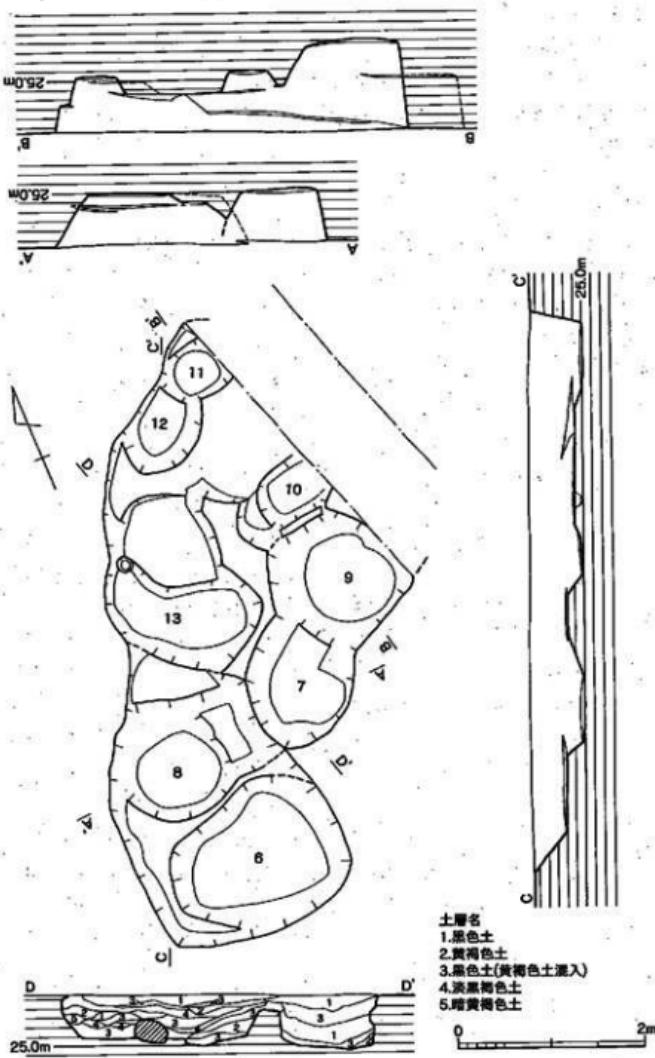
他の土坑に比べ小さいが、確認面からの深さは58cmを測り、決して浅くはない。円形であり柱穴の可能性も残している。遺物は出土していない。

11号土坑（第14図）

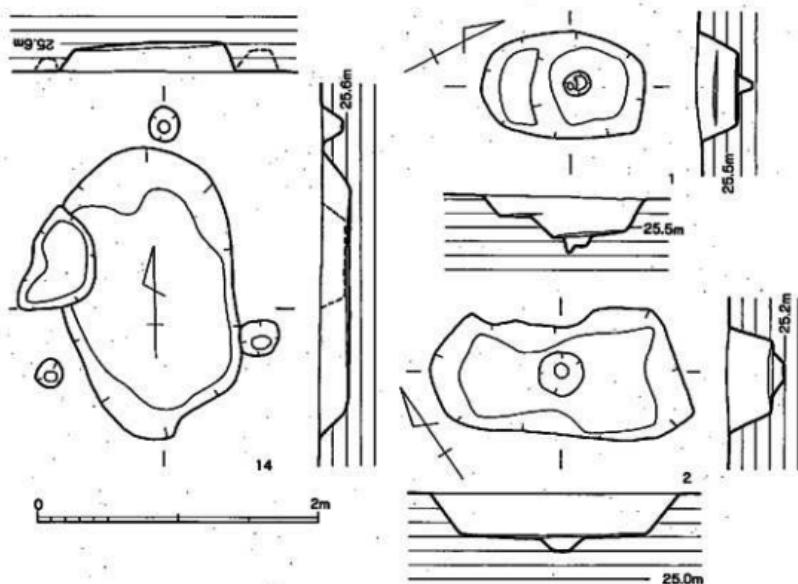
11号土坑も同じく小さいが、確認面からの深さは58cmを測り、浅くはない。円形であり、断面で観察すると規模は10号と同じで、両者の心心は180mを測り柱穴の可能性も残している。遺物は出土していない。

12号土坑（第14図）

この土坑はほとんど底の部分しか残っていない。確認面からの深さは40cmを測る。出土遺物はない。



第14圖 6~13号土坑実測図 (1/60)



第15図 14号土坑、1・2号小土坑実測図 (1/40)

13号土坑（第14図）

1はまわりの土坑に切られ底の部分しか残っていない。確認面からの深さは58cmを測る。やや縦長い梢円形を呈している。遺物は出土していない。

14号土坑（第15図）

C地区南側の3号大溝のそばで検出された。上緑長軸2.60m、短軸1.22mで最深20cmを測る。梢円形を呈し、周辺に対応しそうなピットが三つある。

その他、図示していないが、攪乱坑と考えられる土坑がある（15号土坑）。

1号小土坑（第15図）

B地区中央付近の東端で検出された。上緑長軸1.14m、短軸0.76mで最深28cmを測る。主軸方位はN20°Eを測る。隅丸長方形で中段にテラスがあり、底の中央部に小ピットがある。このような特徴は落し穴状造構と呼べよう。出土遺物はない。

2号小土坑（第15図）

C地区南側の1号溝のそばで検出された。上縁長軸17.8m、短軸0.78mで最深30cmを測る。主軸方位はN56°Wを測る。1号と同じく、中央にピットを持つが、浅くやや大きい。遺物は出土していない。

4) 溝状遺構

1号大溝（図版9、第16図）

調査区北側を南西から北東に流れおり、遺構外へ伸びている。約50mを調査した。N51°Eを測りかなり東側に振れている。溝幅は西側で2mで東では最も広いところで1.50m位である。西と東の検出底面のレベル差は、約60cmである。各土層を観察すると、ほぼ幅いつぱいに各層堆積している。特に2a層で砾が多量に出土することや、2b層よりも暗く腐食が進んだような状況は、この時期までに当初の溝が廃れつつあったと考えられよう。一方下流においては、溝を直行に切る形に溝幅が字状に広いところがあり、取水口と考えられる。三ツ溝跡の1号大溝でも同様の遺構があった。

出土遺物

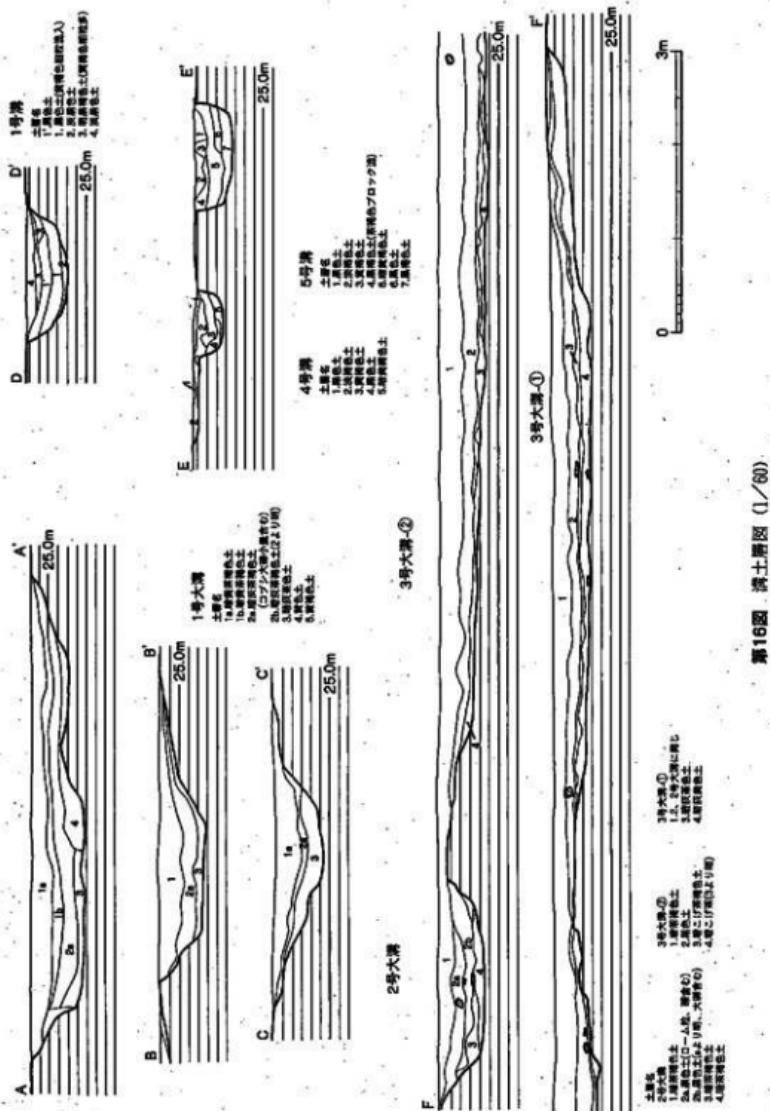
土器（図版17、第18・19図）

1は口縁から体部を欠損する須恵器杯で底径7.0cmを測る。体部はヨコナデによる調整で高台との境目は明瞭ではない。2の杯は外底面に削りを残す。底径8.6cmを測る。3は土師器の皿で磨滅著しいが、盤面はナデによる調整であろう。4は須恵器の皿で内外面ナデ調整で口縁端部はわずかに外反する。5は環状蓋の可能性も考えられる。外面はナデ調整。6は底部付近の破片で底部は回転ヘラ削り。壺の底であろう。7は高杯の脚部で外面に一条の沈線、内面にシボリ痕あり。8、9は高杯脚の裾部片である。10～13は須恵器壺の口縁から脚部片である。10の復元口径は22.6cmで、口縁端部は内湾する。11も口縁端部は内湾する。12は赤色で磨滅が著しい。13は口縁下に一条の鋭い突帯が付き、頸部に沈線が入る。内面頸部は撫で調整。14～18は須恵器壺の胸脚部である。15は頸下の破片で外面カキ目、内面の当て吳痕は車輪文である。16の内面も車輪文。その他は青海波文である。20、21は壺の口縁片、22は弥生土器の壺底部片である。また、図示していないが、9世紀代と考えられる高台付の土師器片も出土している。なお、出土瓦についてはあとでまとめて説明する。

これらの遺物から、溝の機能した時期は8世紀中頃から後半位に比定されよう。

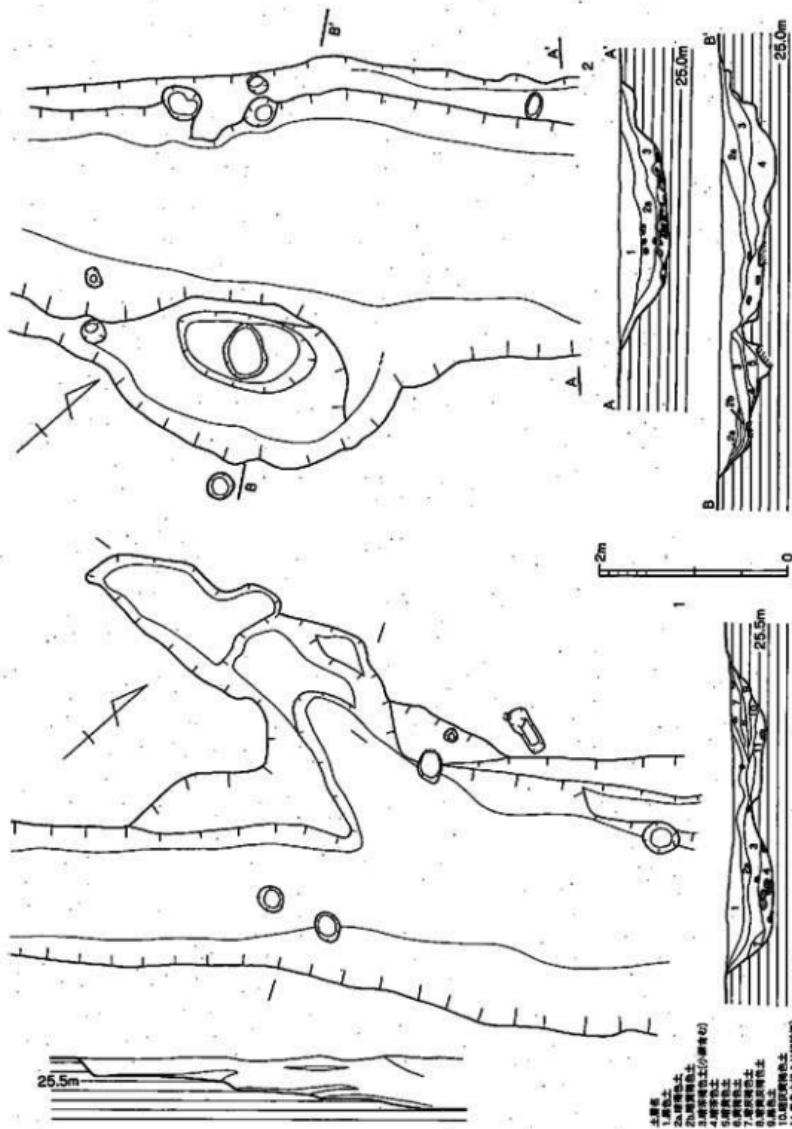
鉄器（図版18、第23図）

1はやや細身の鉄鎌である。肩位まではおさえられていない。



第16圖 滲土管圖(1/60)

第17圖 2号大溝特殊造構測圖 (1/60)



2号大溝（図版10、第16・17図）

C地区南側を南西から北東に流れており、遺構外へも伸びる。約35m分を調査した。溝の流れる方位はN47°Eを測り、1号大溝と同じく北へ振れており、平走しているかもしれない。おそらく東側の調査区外で3号大溝にぶつかると考えられる。溝の上縁幅は西の狭い所で1.50mで最も広い所で3.00mある。西と東の検出底面のレベル差は約30cmである。溝の堆積状況は4層からなる。4層は大小の礫を多量に含んでいるが、一部は自然堆積層（「地山」）中のものがむき出しになつたものである。その他が人為的に敷かれたのかは判断できない。3層は小礫が含まれる。2層はabに分層できたが、上面付近は腐食によるのであろう黒味が強い。この3層から2層の時期に溝本来の機能が廃れつつあったのであろう。1層は3号大溝とつながつてゐる。

大溝特殊遺構（図版11、第17図）

2号大溝では、2箇所でこの溝に関係すると思われる特殊な遺構が検出された。

1は西側付近で検出された。2号大溝から分岐するように取り付いているが、2段のテラスが付き階段状に上がつてゐる。分岐部の土層觀察では2号大溝と堆積が異なり、一部3層が切り込むものの直接水が流れた跡は無い。また、2層が大きく堆積することから大溝と共時性を持つ可能性が高い。これらのことから推察すれば、「取水場」の可能性が考えられよう。

2は中央付近で検出された。2号大溝から張り出すように取り付いてゐる土坑状の遺構である。土層觀察から溝と共時の関係は観察できないが、4層の立ち上がりがこの遺構にかかるないことから、この遺構の造出期が溝の開溝期と同時であれば「水ため」の機能は持てたかもしれない。

出土遺物

土器（第19図）

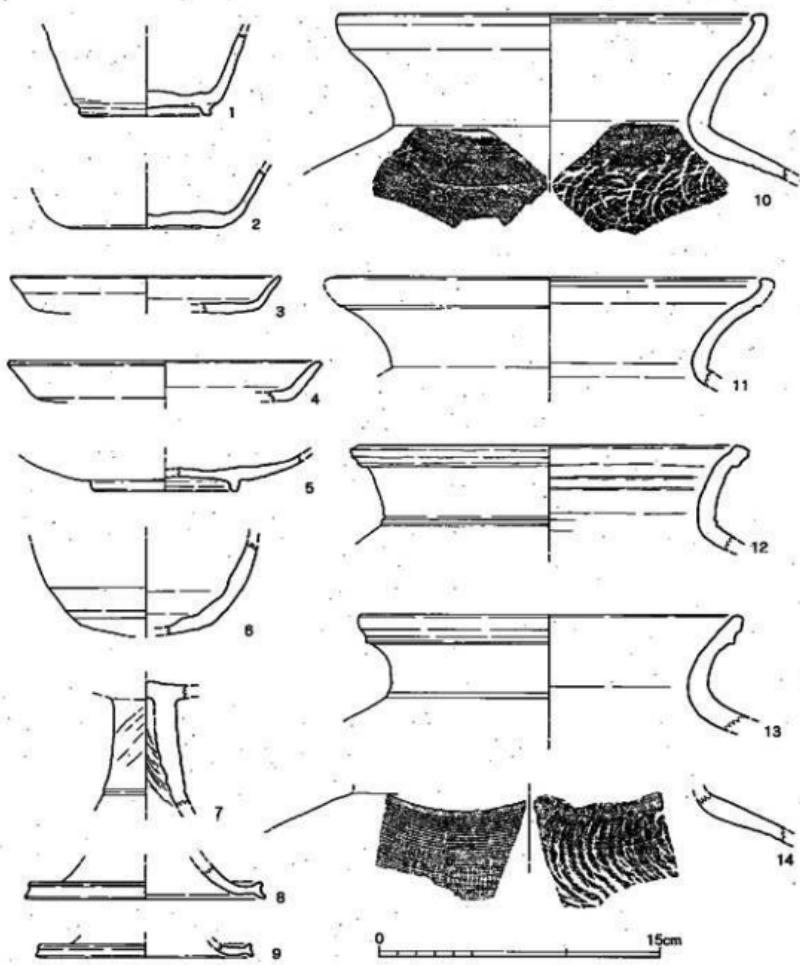
遺物の一部が整理の段階で別の溝と混じってしまった。図示できるのは以下の資料だけである。現場で確認した限りでは1号大溝と時期的には変わらない。

1は須恵器杯身の底部片である。2は土師壺壺の口縁から頸部片で、頸部はくの字に折れる。外面共などで調整。3は土師壺の壺片である。4は赤土器の底部片。

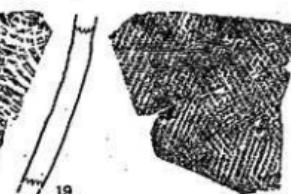
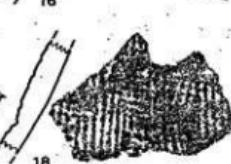
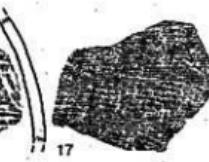
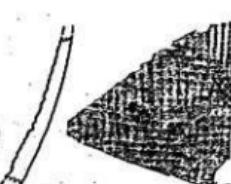
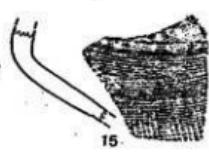
遺物から時期を決定し得ないが8世紀中頃には溝は開溝していたであろう。

3号大溝（第16図）

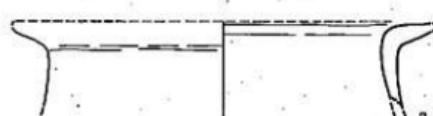
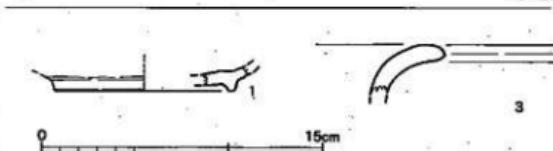
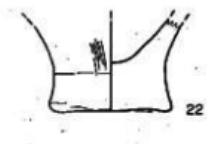
2号大溝の南で検出した。調査区南をほぼ東西に横切つてゐる。約30m、幅10~15mを検出した。一番深い東側で60cm位の深さである。溝の肩が明瞭でないことや、蛇行していることから人為的に造出されたものではなく、自然流路的なものであろう。東端で2号大溝とつながり、1層はどうちらもつながつてゐる。この様な状況から、ある時期以降、このあたりはため池化していった可能性がある。遺物はほとんど出土しなかつた。



第18圖 大溝出土土器実測図① (1/3)



21 1号大溝



22 2号大溝

第19圖 大溝出土土器実測図② (1/3)

1号溝（第16図）

C地区を東西に流れており、造構外へ伸びている。約30mを調査した。N4°Eを測りほぼ東西に軸をとっている。東側の調査区外では大溝1にぶつかる方向にある。溝幅は最も広いところで150m位であり、平均100m位である。深さは40cm前後である。土層を観察すると、溝幅いっぱいに各層が堆積している。また、5層のようなに黒色土の堆積から、流水があったことは確実であろう。

出土遺物

土器（第20図）

1は須恵器の杯片である。外面は回転ナテ、内面底がナテ上げ。2は大型杯の底部であろう。内外面回転ナテで外底面にヘラ起し痕あり。3は土師器杯片で内面に変色部分あり。4は土師器杯の底部である。回転ナテ調整。

溝の下限は10世紀代に求められよう。

2号溝

1号溝を切っている。北西から南東方向に流れており、約15m分を検出した。幅30m位で深さは10cmにも満たない。埋土は灰色で新しい。

3号溝

C地区南側で4号溝等の東で検出された。北西から南東方向に流れており、約15m近くを調査した。幅は広いところでも0.30m位で深さも10cmに満たない。埋土も新しく耕作の跡と考えられる。

4号溝（第16図）

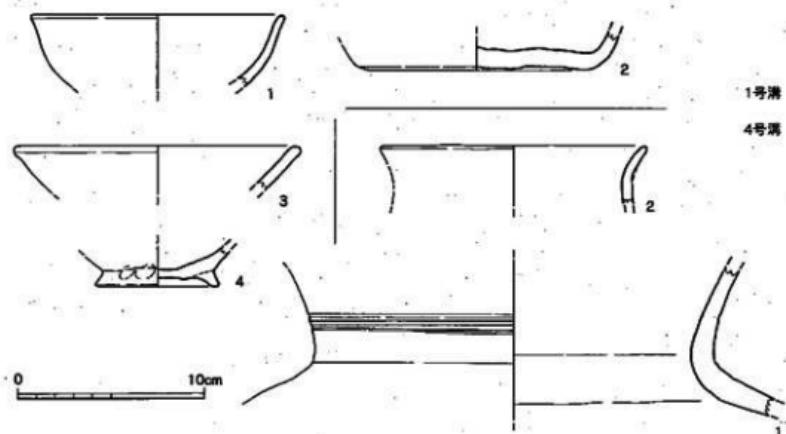
3号溝の西側で検出された。約10mを調査した。幅は最も広いところで15m位で深さ15cm程度である。断面の観察と深さから流水の可能性は低く、北側で検出した耕作に関わると考えられた溝と同じものであろう。

出土遺物

土器（第20図）

1は須恵器蓋の頭部片である。頭部にはカキ目のようにナテ調整、沈線がある。また、灰被りがみられる。内面は回転ナテ。肩部に外間に平行叩き、カキ目内面に円弧叩きあり。2土師器の小甕である。口縁部をヨコナテしている。

造構の時期比定は難しい。



第20図 I・4号溝出土土器実測図 (1/3)

5号溝 (第16図)

C地区南側で4号溝等に平行して約16m分検出された。北西から南東に向かつて流れている。幅は北西付近が2mで最も広く南側で0.45m位である。溝の検出面から最も深いところで約65cm近くある。その他は両端に向かつてテラス状に徐々に浅くなっている。土層観察では、溝が自然堆積した状況と違う。ただ、底の層は多少なりとも水の影響を受けたと考えられる黒色土である。これらのことから人為的に掘られた溝だが流水機能は持たないと考えられる。

出土遺物

須恵器の脛部片が出土しており、6世紀以降の時期が考えられる。

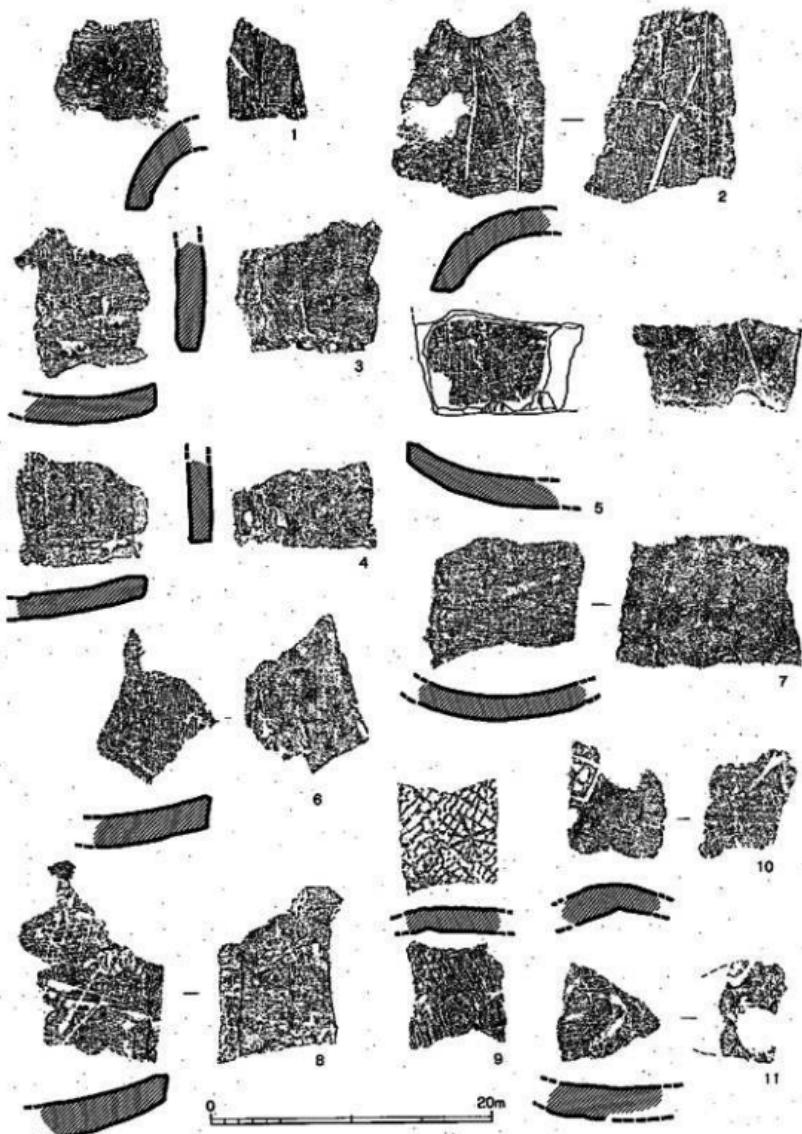
6号溝

C地区南側で5号溝等に平行して検出された。北西から南東方向に流れしており、約9m近くを調査した。幅0.55~1.50m位で深さ10~15mである。水が流れた跡もなく、耕作の跡と考えられるよう。

5) その他の遺物

本遺跡では、遺構内外でも特殊な遺物が出土している。それらについてまとめて説明する。

瓦 (図版17、第21図)



第21圖 瓦実測図 (1/4)

遺構内外より出土しているが、ここでまとめて報告する。

これらの瓦の大きな特徴は、焼が軟質であることと凸面の調整がナデによっていることであろう（9除く）。1・2は行基葺の丸瓦である。1は側縁部の面取りを二面行っている。1号大溝より出土。2も側縁部を二面面取りを行っている。3号大溝より出土。3～8は平瓦である。3の凹面端部は面取りを行っている。8号土坑より出土。4は須恵質である。凹面に模骨の跡が残る。側面は二面面取りしている。1号溝より出土。5の端面は潰れている。側面は二面面取りをしている。1号大溝より出土。6の側縁は一面の面取りである。1号溝より出土。7は1号溝より出土。8は側縁の面取りは2面である。表探資料。9は複合文の叩文で、焼成は硬質である。垂水施寺に類例がある。確認資料。10・11は文字瓦である。10は丸瓦で模骨の跡が残る。凸面に「大」字の押印がある。2号大溝出土。11も押印が観察される平瓦である。取り上げ地点不明。

土器（第22図）

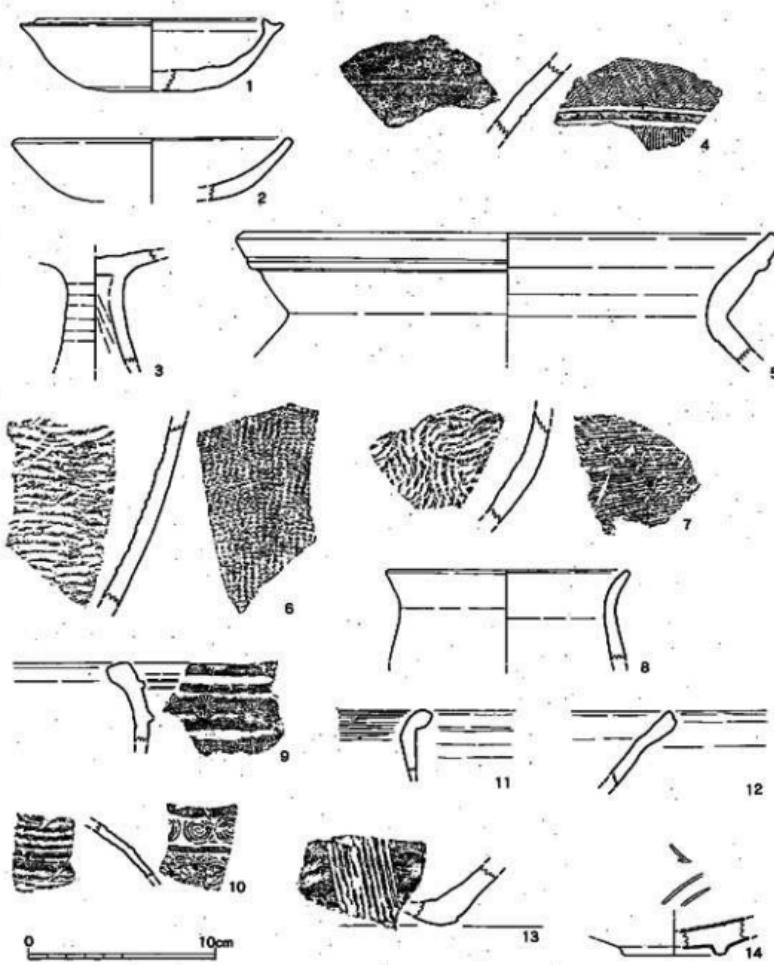
1は復元口径12.0cmを測る。2は外底面に削りを残す。3の高杯は外面回転ナデ調整。9は瓦質の鉢で菊花文を押印している。中央調査区南の溝より出土。10は瓦質の渦巻き文を持つ釜の小片であろうか。15号土坑より出土。11の鉢は土師質で内面に磨きを持つ。南側調査区探集資料。12の鉢は瓦質で口縁が外に折れる。15号土坑より出土。13のすり鉢は陶質である。備前系であろうか、確認資料。14は龍泉窯系青磁盤の底部片である。見込に片切り彫りの草文が一部みえる。14世紀代。中央調査区の耕作跡より出土。その他、石鍋や灰釉壺の胴部片や白磁片等が出土している（図版18）。

鉄器（図版18、第23図）

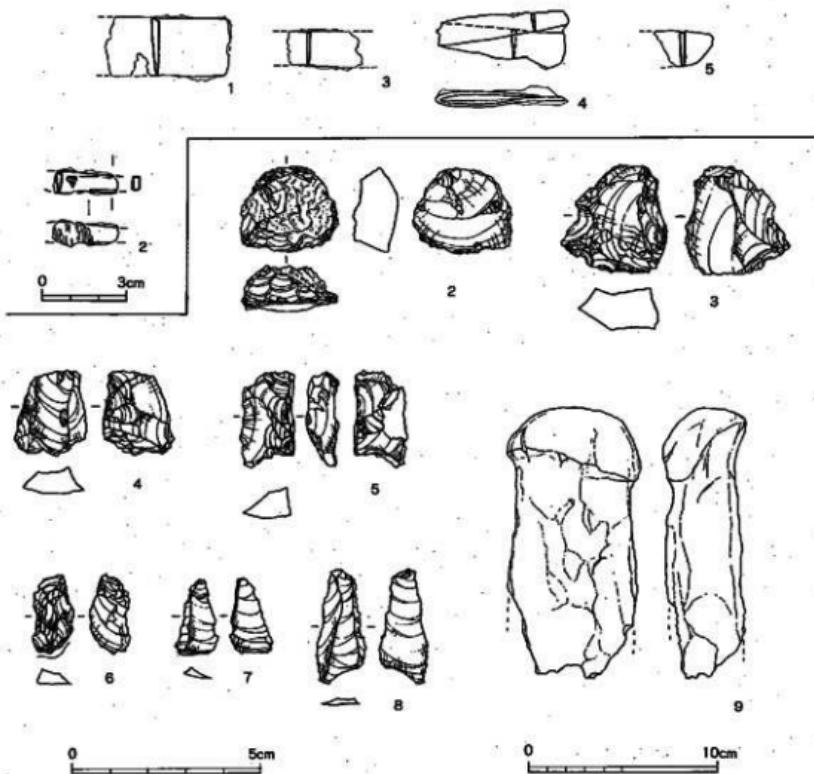
3の刀子は細身で、刃部が鋭く残る。遺構確認資料。4・5は不明製品。4は15号土坑より出土。5は遺構外。

石器（図版18、第23図）

2は環面を残す剝片の端部に刃部加工を施したエンドスクレイバーで、旧石器時代の可能性がある。長さ23.0cm、幅2.65cm、厚さ1.25cm、重さ7.70gを測る。タンパク石製。中央調査区東で探集。3もエンドスクレイバーで不定形剝片に刃部加工を施している。長さ22.5cm、幅2.60cm、厚さ1.20cm、重さ7.70gを測る。姫島産黒耀石製で表探資料。4は剝片の両極に剝離を持つ楔形石器である。長さ2.85cm、幅2.75cm、厚さ2.25cm、重さ9.40gを測る。5は折れた剝片に両極剝離が入るがそれぞれのバインに差がある。スクレイバーであろうか。黒耀石製で長さ2.50cm、幅1.40cm、厚さ0.85cm、重さ3.30gを測る。P10より出土。6は微細剝離を有する剝片で姫島産黒耀石製。長さ2.05cm、幅1.10cm、厚さ0.85cm、重さ1.10gを測る。7、8は黒耀石製の剝片で表探資料。それぞれ旧石器時代の可能性がある。7は長さ2.00cm、幅1.10cm、厚さ0.40cm、重さ0.40gを測る。8は、長さ3.00cm、幅1.30cm、厚さ0.30cm、重さ0.80gを測る。9は2号大溝より出土した石棒である。長さ12.8cm、幅6.30cm、厚さ3.90cm、重さ305.1gを測る。凝灰岩製。



第22図 造構検出他出土土器・陶磁器実測図 (1/3)



第23図 鉄器・石器実測図 (1, 1/2・2~8, 2/3・9, 1/3)

3. おわりに

1. 検出遺構について

本遺跡で検出された主な遺構は、住居跡2軒、建物跡6棟、土坑16基（小土坑を含む）、大溝2条、溝5条等である。

1・2号住居跡の時期はわずかな前後関係が認められるが、どちらも6世紀後半代と考えられる。1号住居跡はカマドを持っており、煙道が左コーナー隅にまで伸びているいわゆる「オンドル」と呼ばれるタイプものである。両袖は既に破壊されており、燃焼室の状況ははつきりしない。また、煙道を断ち切ったが熱を受けた状況は確認できなかった。一方、2号住居跡においては、やはり、煙道が左側に伸びているが大部分が調査区外でコーナー付近の状況がわから

ないため、認定はできない。ところで1号住居跡のような「オンドル」が検出された遺跡には、バイパス路線内では5世紀前半代の池/口遺跡がある。また矢野和昭氏（新吉富村教育委員会）によれば、同様の調査事例が長田遺跡周辺でも確認されていると言う。これらのことから、この地域においては、少なくとも5世紀前半から6世紀末位までは、同様の立地場所に「オンドル」を持つ住居が営まれており、この「オンドル」が終焉する時期をつかむことによってこの地域における出現と終焉の社会背景が理解できるであろう。

1・2号大溝は調査区を東西に並走している。その下限は認定し得ないが、遺物の出土状況からどちらも8世紀代には機能しており、また1号大溝出土の遺物の状況から、「その終焉は9世紀位と考えられる。また、どちらも掘り方の形状や規模が近似しているが、2号大溝においては、取水施設と考えられる階段状や土坑状の遺構が検出された。特に2号大溝の階段状遺構については、土層観察によると、確実に溝に切り込んでいることと水の影響を受けた段があることから取水口と認定できよう。ところで、これらの溝が最も機能していた時期が8世紀代の律令期であることから、この溝の在り方は当時の律令集落の展開にもかかわってこよう。調査区内では6世紀後半代以後の住居跡が検出されないことから、このような大溝沿いに集落を営むことが外的要因によって不可能であったと理解できる。もし、溝の開溝が住居跡と共に持つのであれば、その後に住居跡が残されること状況は社会的要因によって溝とその周辺の役割が、日常生活圏から社会体制に関わる生産圏へと変化したと言えよう。この検証については周辺地域の状況が明らかになるにつれて行えよう。

2. 出土土器について

出土遺物で注目すべきものには、2号住居跡カマド周辺から出土した特殊な椀がある。また、5号土坑出土の高杯も同様の椀に脚が付いたものである。2号住居跡出土の椀は、器高6.90cm、10.6cmを測り胸部が直線的に立ち上がる。胸部分が丁寧なナデによって仕上げられたのち、外底面はヘラ削りのまま底部との境はシャープな稜を残しており、胎土中には熱変化により黒色になったものがある。また細かく観察すれば、整形段階において外底部は外にくらくらんた椀底状であり、その後全体をナデ上げたのち底面をシャープ削り出している。右回転のロクロを使用している。一方、5号土坑出土の高杯は外面に沈線を一条持つことと、脚をナデ付けた際に底面にナデあとが残ること以外に素材や技術に差は認められない。この椀の時期については、共伴する杯身の外底面が大きく削りを残すことから同様の6世紀後半～終末の時期が考えられる。このような椀や高杯は、おおむねこの時期に杯身などといっしょに出土する。しかし、外底面がシャープに削り出される同様のものは豊前地域では北九州市の天鏡寺山窯跡区の2号窯より出土しているだけでそう多くはない。また、その後型式変遷についても不明であり、今後検討されなければならない一群である。

2次調査

1. はじめに

2次調査区は調査区南東部に位置している。調査前は水田であり、ほぼ平坦に削平されている。遺構は溝4条と多数のピットが検出されたのみである。

2. 遺構と遺物

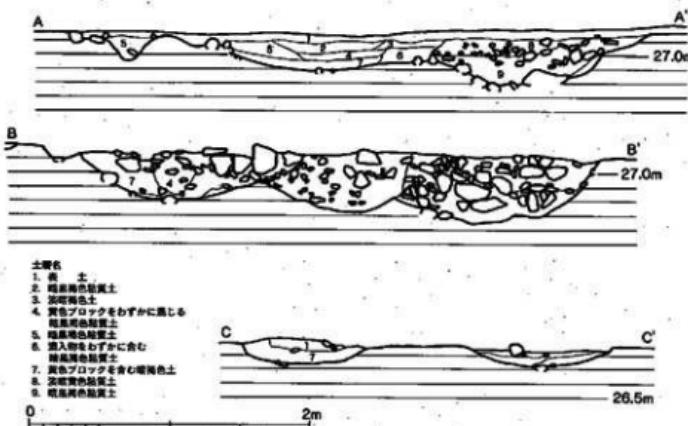
1) 溝状遺構

1・2・3号溝（図版14、付図2・第24図）

2次調査区を西から東に湾曲しながら並走しており、両端とも調査区外に延びる。遺構は西にいくほど残りがよく、東側で並走していた1・2号溝は、西側では幅が広がり、切り合っている。

1号溝の幅は広いところで16m、深さは50cm程、2号溝の幅は広いところで28m、深さは60cm程である。

最も幅が広いのは溝の湾曲する所で、そこには2号溝の掘り直しと思われる3号溝がある。3号溝は屈曲部から西に向かい、途中で2号溝に合流しているので、部分的なものと思われる。



第24図 1~3号溝土層断面図 (1/40)

おそらく、溝を流れる水が運ぶ泥などが湾曲部に溜るために、溝さらえや掘り直しをした結果、幅が広がつたものであり、3号溝は湾曲の度合を小さくする目的で掘られたのではないだろうか。湾曲部からの出土遺物や礫が最も多くいのはこれを示している。また、2号溝埋土中からは馬の骨や齒が出土したが、かなり乱れており、流れ込んだものと考えられる。

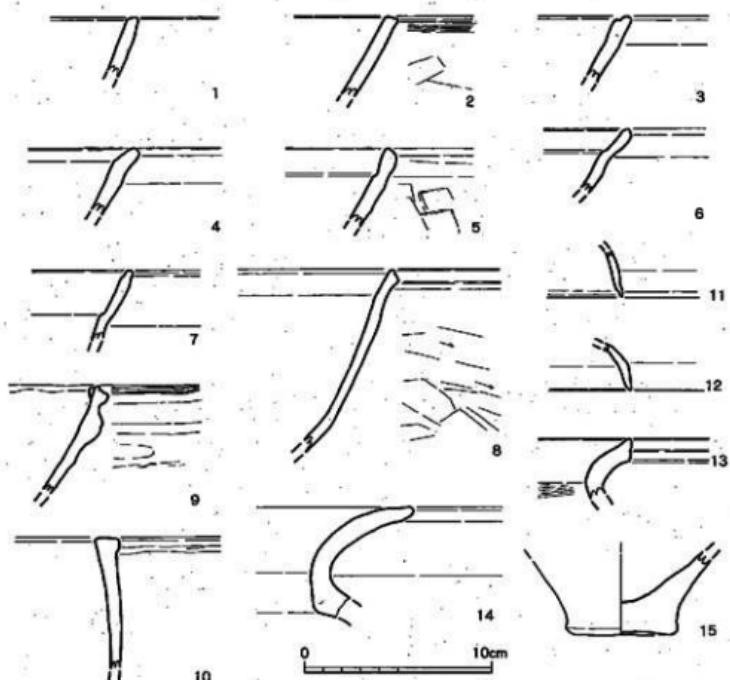
土層の観察から1号溝が2・3号溝を切っている。瓦質の鉢の口縁部形態に型式変化とともにパリエーションがあることから、14C前後で時期軸をもつであろう。

出土遺物

若干の遺物が出土しているが、遺物をとり上げる際に混じってしまったので一括で取り扱う。瓦質土器を主体としており、須恵器・弥生土器の小片が混入品している。

土器（図版19、第25図）

1~8は瓦質の鉢の口縁部で、口縁形態にパリエーションがある。1・2は屈曲をもたないタイプで、外面には吹きこぼれの炭化物が付着している。5は外面の口縁下位に横ナデが凹線状に



第25図 1~3号溝出土土器実測図 (1/3)

入るタイプ。4は外面口縁下のナデが口縁上端に達したもので、口唇部が傾斜し、段がつくタイプ。5は外面のナデの入る部分が屈曲し、口唇部の傾斜が大きくなるタイプ。6は口縁の屈曲が大きくなり、口唇部の傾斜は内面の口縁下にまで達し、段を形成する。7は屈曲部が伸長し、内面口縁下の段もそれに合わせて下がっている。これに対して、同じ瓦賀の鉢だが、8は口縁端部が断面三角形に肥厚して屈曲し、9は外面口縁下に貼り付け突帯をもつもので、口唇部に2条の沈線があり、片口の鍋になると思われる。10は火鉢の口縁部であろう。

11~14は須恵器で、11・12は蓋片、13・14は要の口縁部である。

15は弥生土器で、中期の要の底部と思われる。ローリングを受けており調整は不明である。

11~15は混入品で、1~9は14c代、8・11は16c代のものだろう。

4号溝（図版14）

西側にのみ残っており、1・2号溝と並走して、西端は調査区外に延びる。本来3条の溝が並走していただろう。幅は50cm程、深さは5cm程で非常に浅く、遺物も実測できるものが出土していない。

3. おわりに

2次調査区では溝4条と多數のビットが検出されたのみだが、本地區は1次調査区で推定される条理区画の端部の空間地であった可能性がある。溝の湾曲は、調査区南側の宅地に沿う現在の水路とほぼ同様であることから、調査区東南部はこの微高地の続きが存在し、これの端に沿つたものと思われる。

また、検出面には旧河道と思われる礫帶があり、これもまた、溝と同じ位置で、同方向に湾曲している。

この微高地は、東側の現在の集落域である微高地帯の先端部分に位置しており、その凹凸のため条理の端部が及ばなかつたのかもしれない。

調査区東端には大池添遺跡に続く落ち込みがあり、その部分がグライ化していることから、「大池添」の字名通り、池であった可能性がある。溝の東端はおそらくこの池に接しており、池を水源とする用水路だったのではないだろうか。

図 版

1

長田遺跡調査区全景（南から）



2

長田遺跡調査区全景（北から）



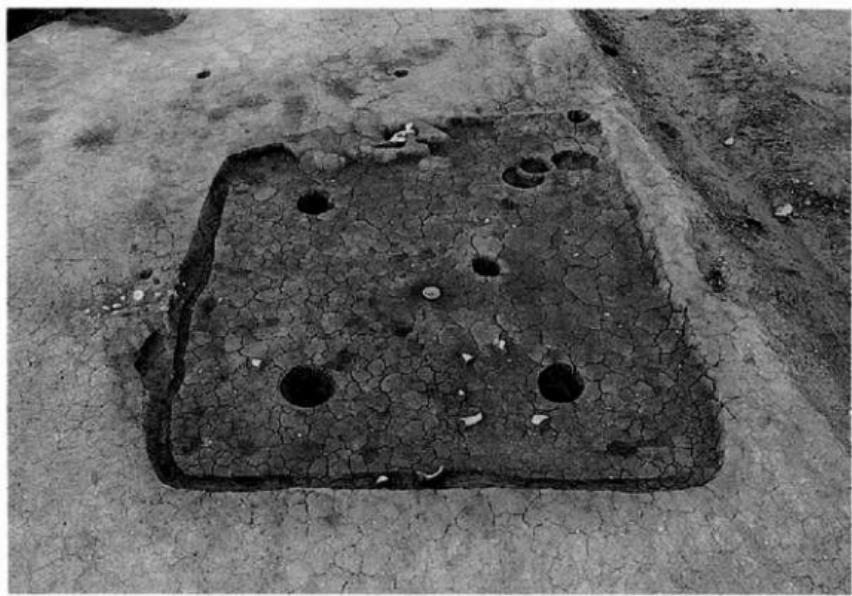
1 調査区北半全景（東から）



2 A地区北部（南から）



1 1・2号堅穴住居跡、5号土坑、1号大溝（南東から）



2 1号堅穴住居跡（南東から）



1 1号竪穴住居跡カマド（南東から）



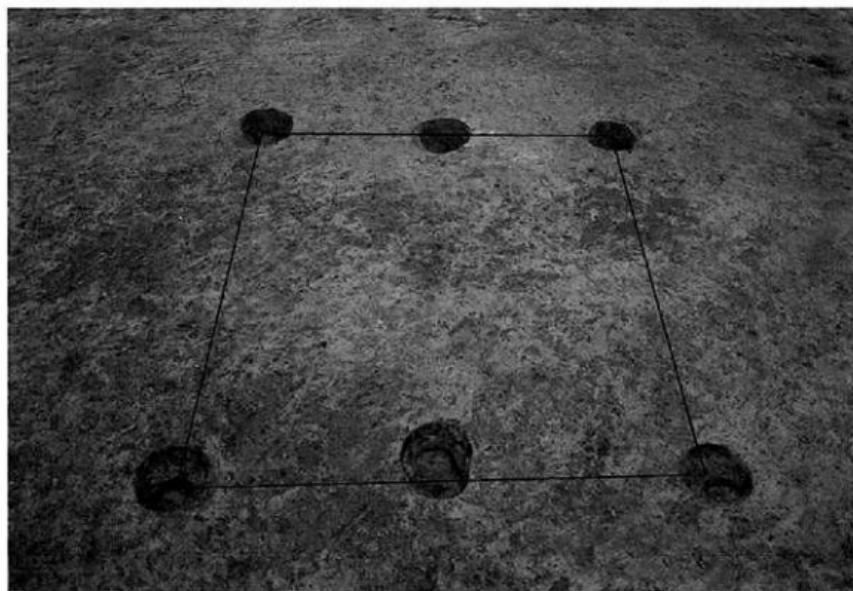
2 同カマド袖部断面（北東から）



1 2号堅穴住居跡（南東から）



2 同カマド（南東から）



1 1号掘立柱建物跡（南東から）



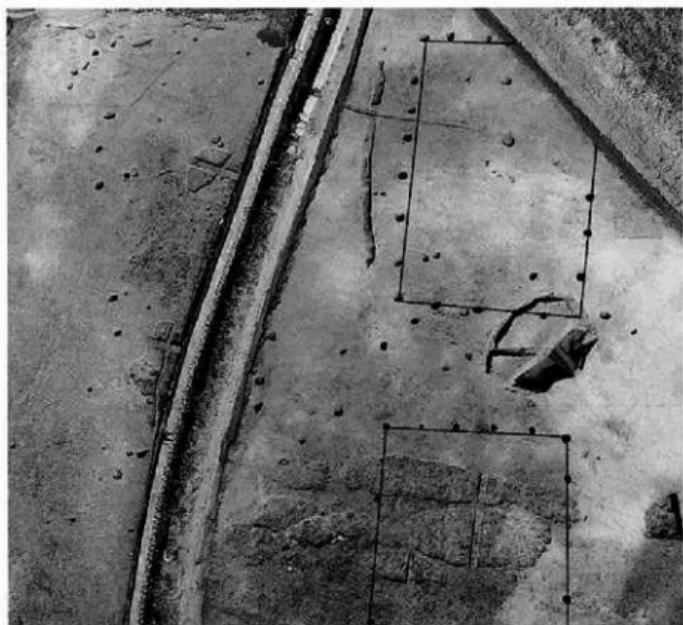
2 2号掘立柱建物跡（北東から）



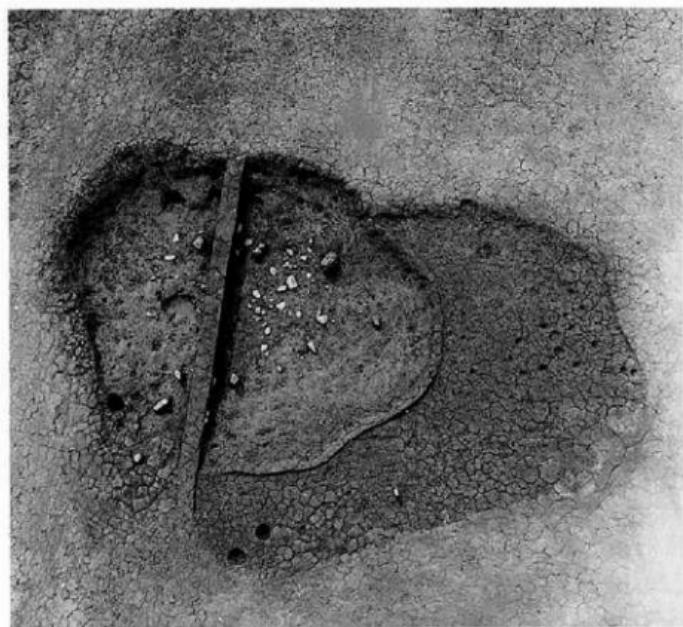
1 調査区北半全景（東から）



2 3号掘立柱建物跡（北西から）



1 4・5号臨立柱建物跡
(南西から)



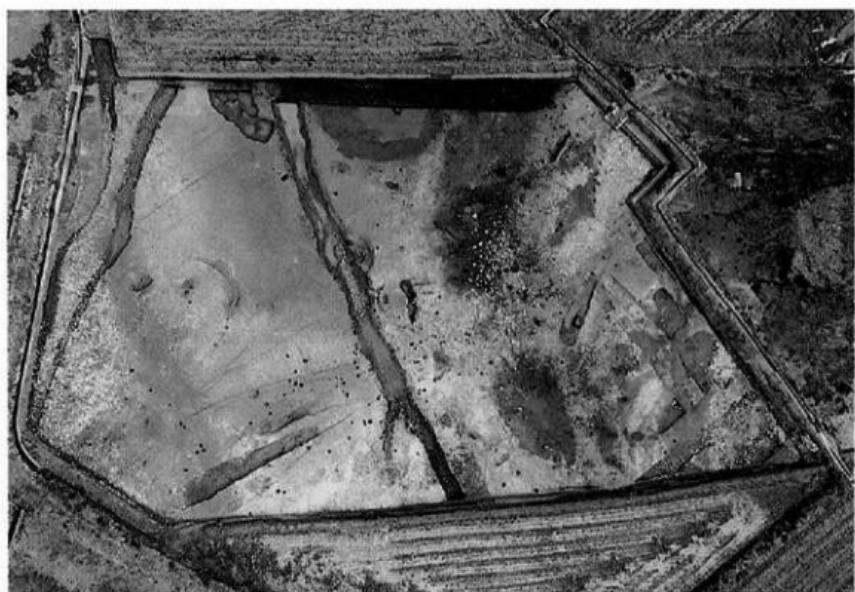
2 5号土坑
(東から)



1 1号大溝（東から）



2 同土層断面（西から）



1 2号大溝周辺



2 2号大溝（東から）



1 2号大溝特殊遺構（西から）



2 3号大溝調査風景（東から）



1 2次調査区全景（南東から）



2 2次調査区全景（北西から）



1 2次調査区全景（上空から）



2 2次調査区東端落ち込み（上空から）



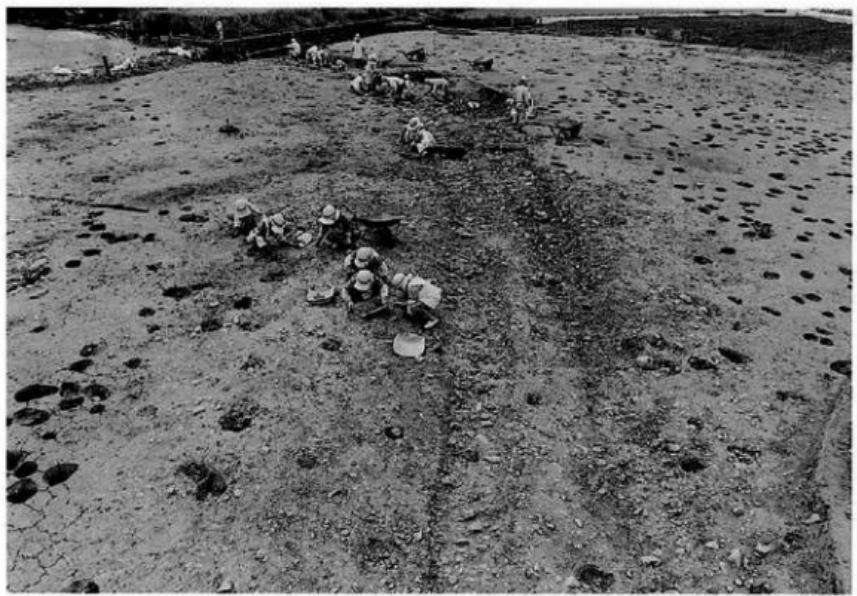
1 1~4号溝全景（東から）



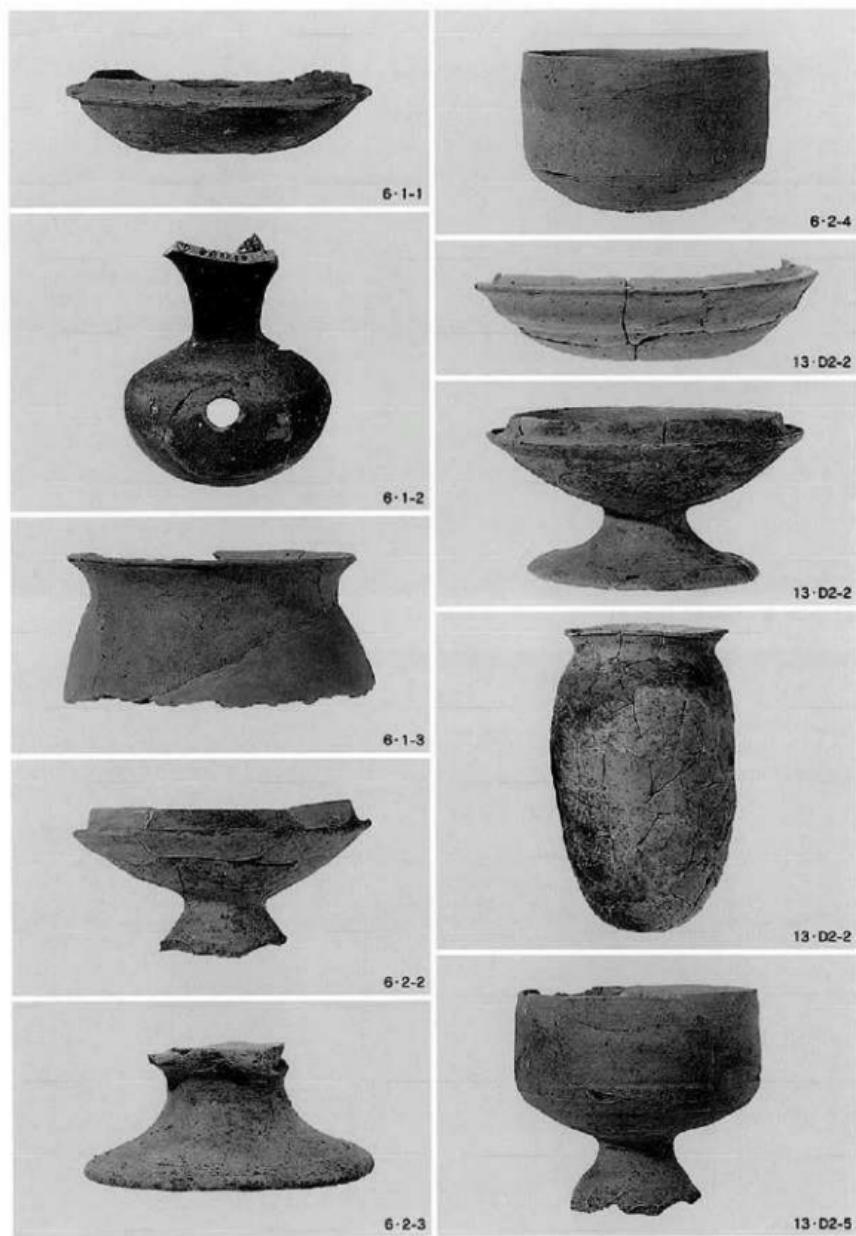
2 1・2・3号溝土層断面（北から）



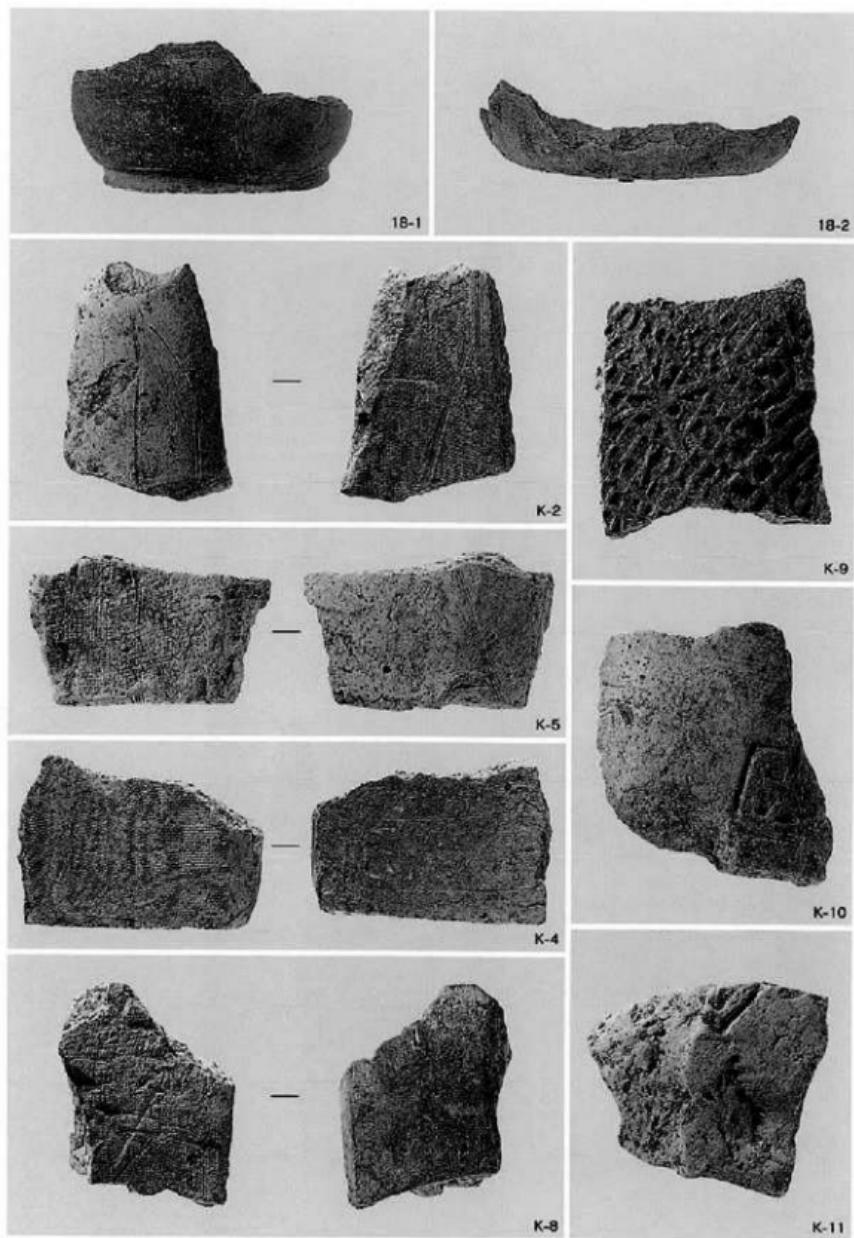
1 1・2号溝土肩断面2（北から）



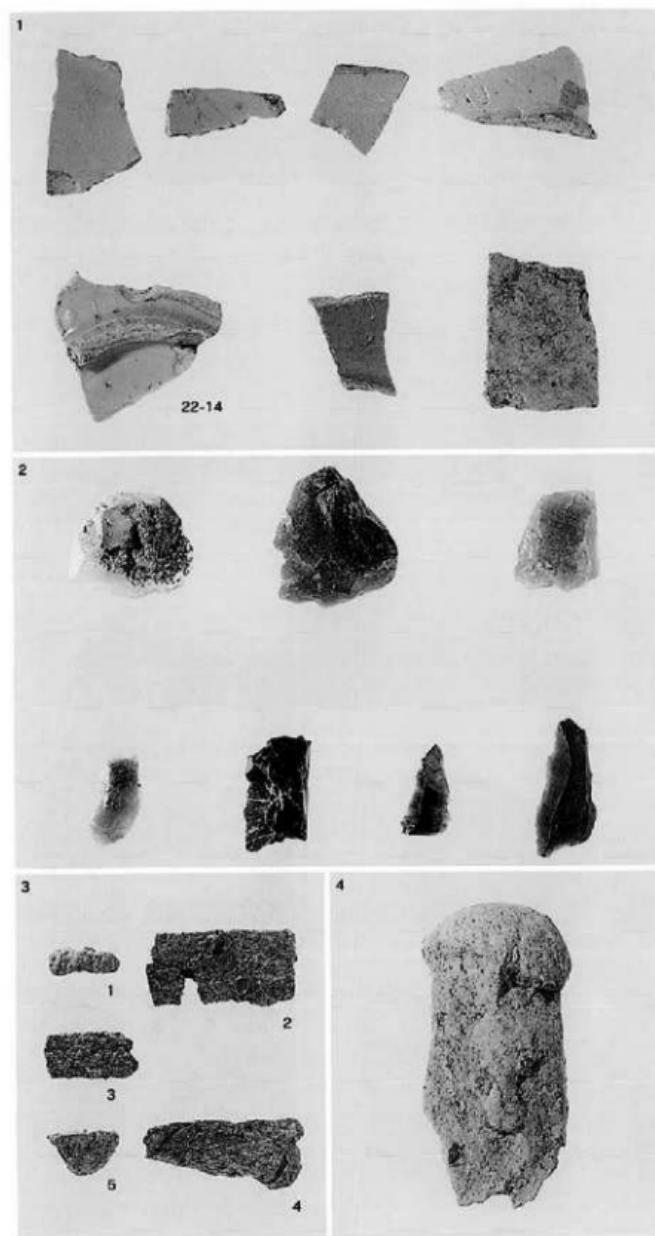
2 2次調査区作業風景



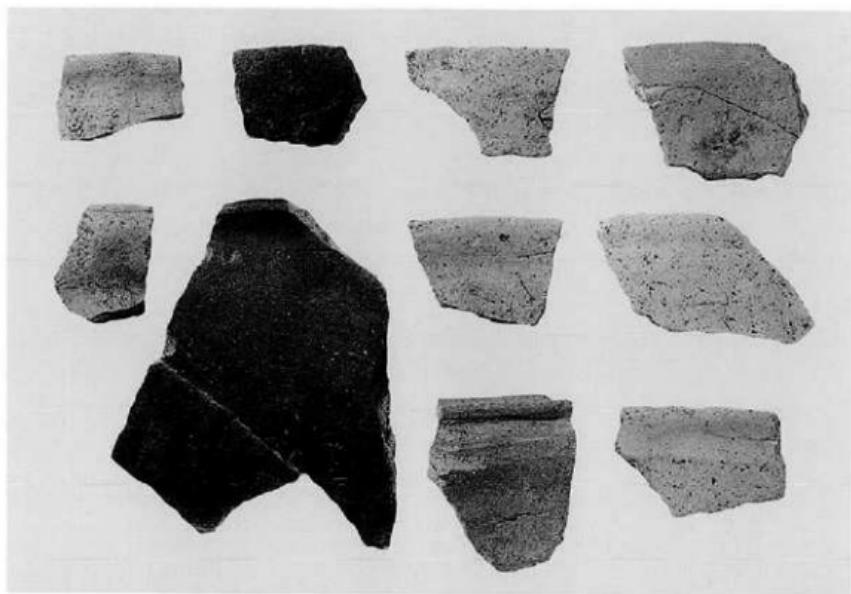
1·2号竖穴住居跡、2·5号土坑出土土器



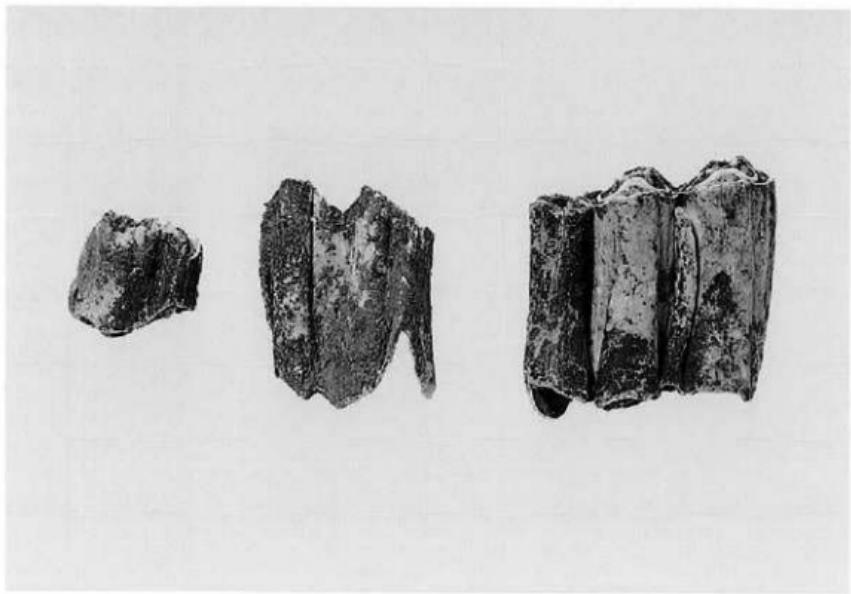
1号大溝出土土器（上）、出土瓦（左）、出土印文瓦（右上）、文字瓦（右下）



1. 出土·採集青磁·白磁他 2. 出土採集石器 3. 鐵器 4. 石棒



1 1~3号溝出土瓦質土器



2 2号溝出土馬の歯

おお いけ ぞえ
大池添・ウツケ畠 遺跡

1. はじめに

大池添遺跡は字大池添854・855番地、ウツケ畑遺跡は字ウツケ畑1071・1282-3番地に所在する。新吉富役場前を通る県道福土・吉富線を境に長田遺跡と分かれ、この路線から分かれる道路をもって大池添遺跡とウツケ畑遺跡が分かれている。さらにウツケ畑遺跡は調査区南東の道路で竹ノ下遺跡と分かれている。大池添遺跡の調査区は狭小で、遺構・遺物ともにほとんどないので、一連の調査であったウツケ畑遺跡と同一章で報告する。ウツケ畑遺跡は、道路建設工事の関係で途中で中断したため、その後残存部分を2次調査として再開している。

対象面積は計4,500m²で、調査面積は、大池添遺跡は543.6m²、ウツケ畑遺跡は3340.6m²である。大池添遺跡とウツケ畑遺跡1次調査は平成6年2月14日から3月29日まで継続して実施し、2次調査は平成6年5月9日から19日まで行なった。

調査前は宅地・水田・畑地であり、1290-4番地は遺跡の残りが悪く、1287-3・4番地は大きく削平されており、遺構面を形成する堆積層下の砾層が露出していた。1287-1番地は宅地であつたため植木の抜き穴が多く、2次調査区においても北側には多くの搅乱があり、南側には隣接するブドウ畑の高架用ワイヤーを据えるための溝が入っているため、總じて残りがよくない。

遺跡は標高約26mの友枝川西岸の河岸段丘最上段に立地しており、竹ノ下遺跡との境界となる南東端の道路から東は約2m急激に落ち、長田遺跡の境界となる県道福土・吉富線から西は緩やかに下がっている。現在でも遺跡の立地する段丘以外は水田地帯であることから、集落を営むのに適した場所であったといえる。

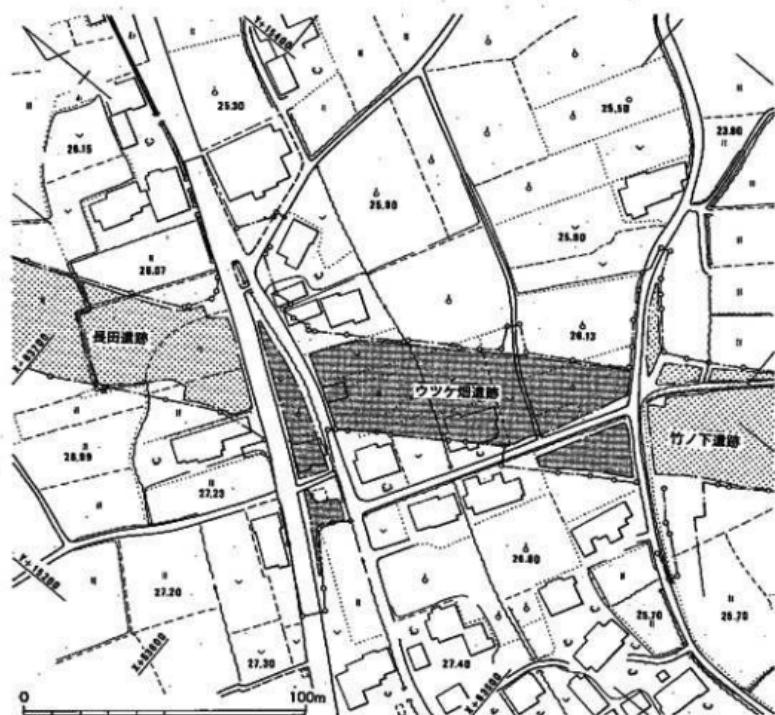
調査区内の旧地形は、削平を受けているため分かりにくいが、中央部に谷が入り、南北に大きく分かれている。この谷は河川の氾濫によって生じたものと考えられるが、遺跡の形成される以前にあったものと思われ、遺構面下の砾層が露出していない。現表土は盛土によりほぼ平坦にされているが、遺構検出面は全体的に南西に向かつて緩やかに傾斜しており、遺跡の南北端で約1m下がっている。

遺構は竪穴住居跡20軒、掘立柱建物跡26棟、土坑1基、溝状遺構1条が検出されている。

2. 遺構と遺物

1) 竪穴住居跡

竪穴住居跡は19軒検出された。住居番号は20番まで付けているが、5号竪穴住居跡は4号竪穴住居跡と同一住居であったので欠番になった。



第1図 大池添・ウツケ畠遺跡周辺地形図 (1/2,000)

1号竪穴住居跡（図版4、第2図）

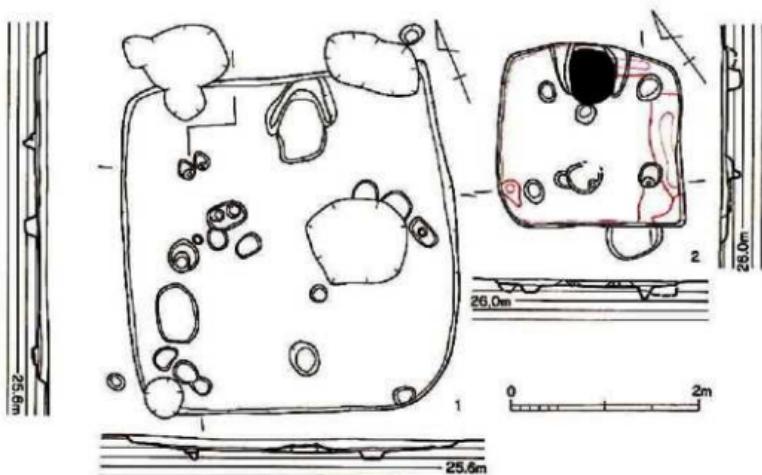
調査区北西部に位置し、II号掘立柱建物跡に切られる。一边3.6mの正方形プランで、主柱穴は2本しか確認できなかった。主柱穴の径は22cm前後である。北壁中央にカマドがつく。残りが悪く、焼土・支脚は確認されなかつた。

出土遺物

遺物は少なく、実測できたものには、製塙土器と思われる土器片と、土師器の甌の口縁部の小片があるが、前者しか掲載しなかつた。

製塩土器（図版30、第32図3）

残存する脛部の最大径が19.0cmで、脛が張らず直線的な器形であることから、製塙土器の可能性が高い。調整は内外幅広の横方向のナアのみであり、内面にナアのみと思われ、削りが見



第2図 1・2号竪穴住居跡実測図 (1/60)

られないにもかかわらず器窓は均一で薄い。チョウ石を多量に混入する異質な胎土で、黄白色を呈するので、搬入品の可能性が高い。

2号竪穴住居跡 (図版4、第2図)

調査区北西部に位置し、6号掘立柱建物跡に切られる。一辺1.9mの小形の正方形プランで、主柱穴は4本確認された。主柱穴の径は22~30cm前後である。北壁中央にカマドがつく。残りが悪かったが、焼土は明瞭であった。支脚は確認されなかった。床面は貼床で、これを剥がすと東壁沿いに落ち込みが見られた。これは、排水を目的とした床下施設であろう。遺物は少なく、実測できるものは小片2点のみだった。

出土遺物

土器 (第6図1・2)

1はカマド内から出土した土師器の杯の口縁部で、口縁内面に凹線をもつ。内外ヘラ磨きがあり、黄白色を呈す。2は須恵器の高杯の杯部である。

3号竪穴住居跡 (図版5、第3・4図)

調査区北西部に位置し、一辺2.3mの小形の正方形プランで、主柱穴は4本確認された。主柱

穴の径は22~35cm前後である。北壁中央からやや西よりにカマドがつく。残りが悪かつたが、焼土は明瞭であった。床面は貼床で、これを剥がすと中央に大きな落ち込みが見られた。これは、排水を目的とした床下施設であろう。カマドの下にも落ち込みがあり、床面では確認できなかつたが、支脚の抜き取り痕が確認された。遺物は少なく、2次焼成を受けた土器があるので、焼失の可能性がある。

出土遺物

土器（第6図4~8・9~10）

3~7は土師器である。3・4は杯の口縁部で、外面ヘラ磨きで、内面には暗文が入る。5は甕の口縁部、6は鉢の口縁部で、ピット1出土である。7は甕か鉢の底部である。8~10は須恵器で、8・9は高杯の脚部、10は小型の平瓶の頸部だろう。

石器（図版30、第33図8）砥石が埋土から出土した。5面使用している。暗黄白色で黄褐色の筋の入る頁岩系の石材である。

4号竪穴住居跡（図版6、第4図）

調査区北西部に位置し、3号竪穴住居跡を切る。一辺42mの小形の正方形プランで、主柱穴は4本確認された。当初2件の住居跡が切りあつてあると思われ、5号住居をつけたが、後に1件であったことが判明した。主柱穴の径は22~35cm前後と大きく、径25cm前後の柱痕が検出された。北壁中央からやや西よりにカマドがつく。残りが悪かつたが、焼土は明瞭であった。支脚は確認されなかつた。床面は貼床で、主柱穴はこれを剥がして検出されたので、柱穴は抜かれていらない。2次焼成を受けた土器があるので、焼失の可能性がある。

出土遺物

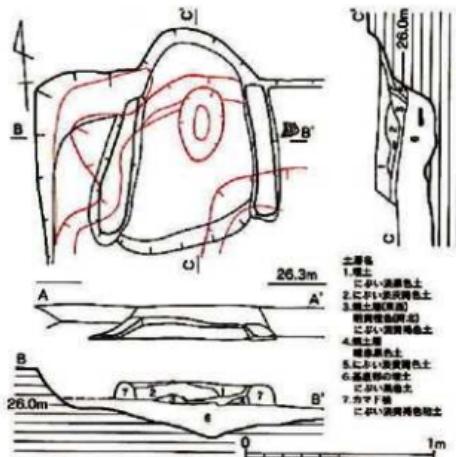
実測できたのはピット1より出土した1点のみである。

土器（第6図11）

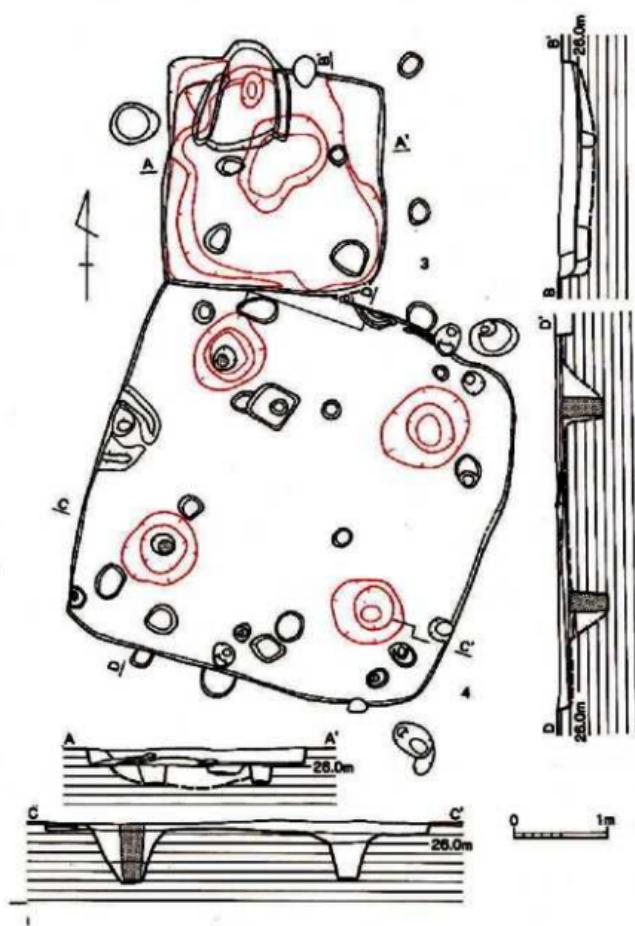
土師器の鉢の口縁部で、外面はタタキ、内面は粗いハケが入る。

6号竪穴住居跡（図版7、第5図）

調査区中央西部に位置し、南側調査区外に半分がかかっている。北壁



第3図 3号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30)



第4圖 3·4号竖穴住居実測図 (1/60)

しか確認されていないが、その辺で34mを測る。正方形プランと思われ、主柱穴は北側2本が確認された。主柱穴の径は30~35cm前後で、柱痕は検出されなかつた。西壁にカマドがつくが、調査区外に半分がかかっているので残りが悪かつたが、焼土は明瞭であった。支脚は確認されなかつた。遺物は実測できるものが出土しなかつた。

7号竪穴住居跡（図版7・8、第5図）

調査区中央西部に位置する、長軸33、短軸29mの長方形プランで一辺42mの小形の正方形プランである。主柱穴は4本確認され、その径は26~35cm前後で、柱痕は検出されなかつた。西壁中央にカマドがつくが残りが悪く、焼土は不明瞭だが、石製の支脚が確認された。また、カマドの南隣の床面からほぼ完形の土器が出土している。床面は貼床で、これを剥がすと中央よりやや南側に落ち込みが見られた。これは、排水を目的とした床下施設であろう。カマドの下にも落ち込みがあり、石製支脚が埋置されていた。

出土遺物

遺物量は少ないが、カマドの西横に出土したほぼ完形の土器が2個体を掲載した。床面から出土しているので、置き去りによるものと思われ、両者は大きさや2次焼成の受け方から、上下に組み合わせて使用された可能性がある。

土器（図版27、第6図12~14）

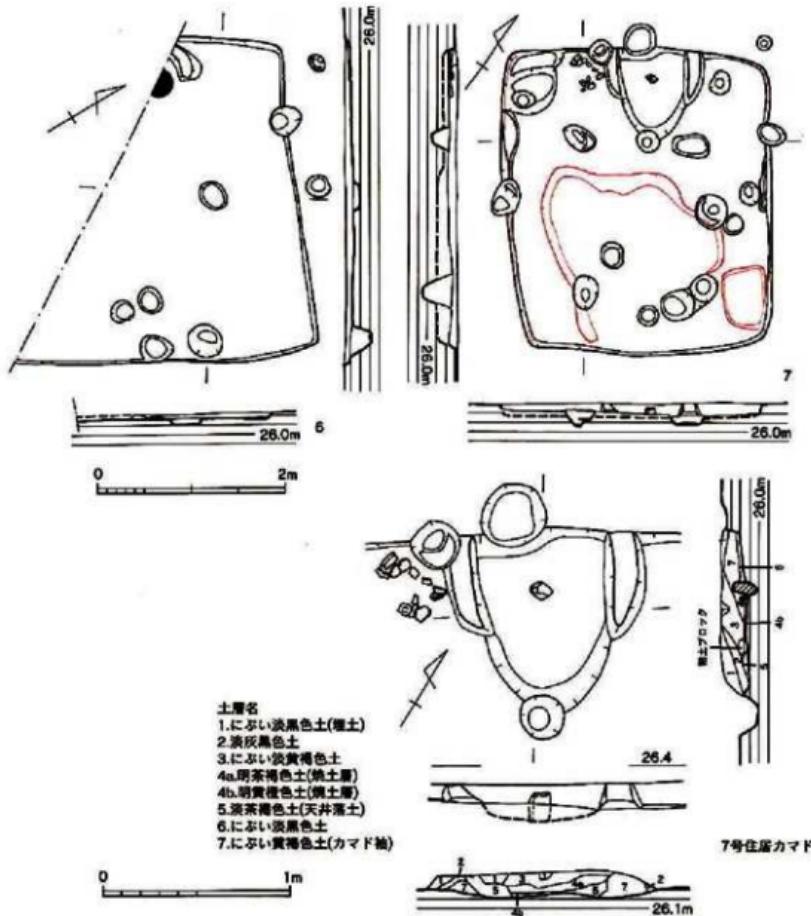
12・13・14は土器器の裏で、13・14は同一個体と思われるが、接合しない。また、13は小型品であるため明確でないが、12と同様に口縁端部は跳ね上げを意図したものでこれは、器内の影響を受けたものかもしれない。14は、外面頸部以下と口縁端部の内面に煤が付着しており、内蓋で煮沸使用されたと思われる。外面唇表の剥落が激しい。12は、外底部までハケが及んでおり、内面は胴上位がハケ、それ以下はナデである。頸部から胴中位と、口縁端部の内面に煤が付着しており、内蓋と思われる。

8号竪穴住居跡（図版9、第7図）

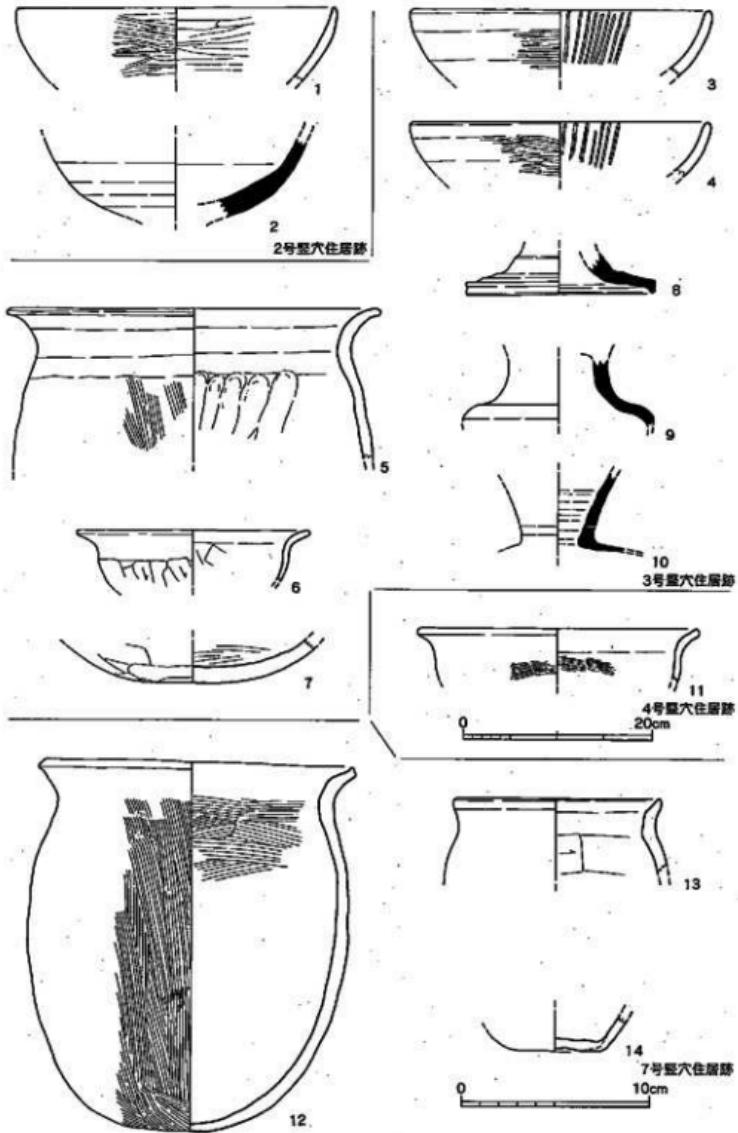
調査区中央部に位置し、長軸445m、短軸405mの方形プランの竪穴住居跡である。主柱穴は2本確認され、その径は26cm前後で、柱痕は検出されなかつた。壁の残りが悪く、貼床も確認できなかつた。遺物は実測できるものが出土しなかつた。

9号竪穴住居跡（図版9・10、第7図）

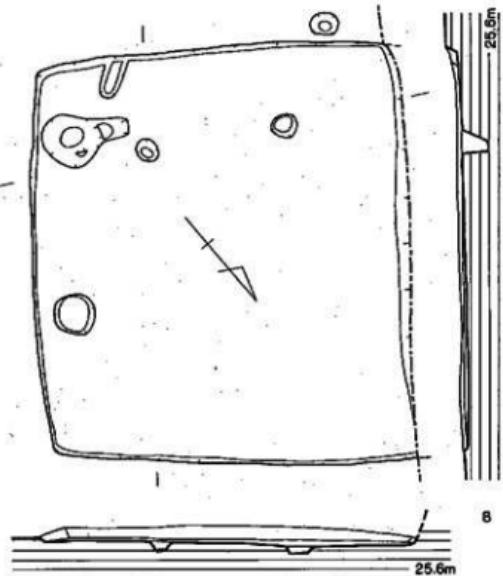
調査区中央部に位置し、18号掘立柱建物跡に切られ、搅乱の植木穴が切り込んでいため残りが悪い。一辺3.75mの正方形プランの竪穴住居跡である。西壁中央にカマドがつき、残りが悪いが焼土は明瞭に検出された。その焼土を切り込むピットがカマド中央にあるが、これは支



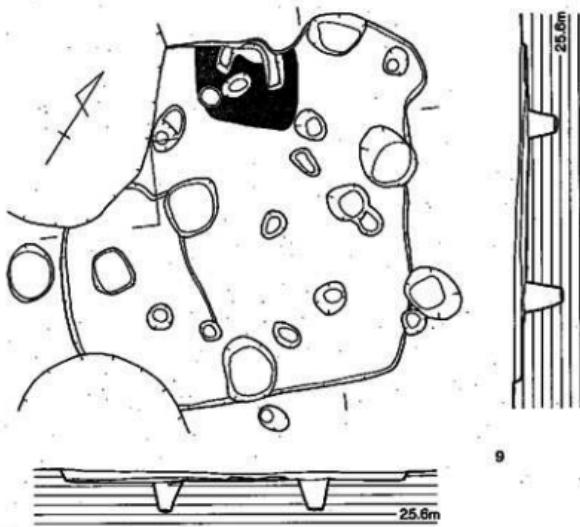
第5図 6・7号竪穴住居跡・7号竪穴住居跡カマド実測図 (1/60・1/30)



第6圖 竪穴住居跡出土土器実測図① (1/3、6・11は1/6)



8



9

第7圖 8·9號竖穴住居跡実測図 (1/60)

脚の抜き取り穴と思われる。遺物は実測できるものが出土しなかつた。

10号竪穴住居跡（図版10・11、第8図）

調査区中央部南よりに位置し、長軸3.45m、短軸2.95mを測る方形プランである。カマドは西壁中央やや北よりに位置しているが残りが悪く、焼土も検出されなかつた。主柱穴も南側2本しか確認できなかつた。径は16~20cmである。貼床も明瞭でない。2次焼成を受けた土器があり、焼失の可能性もある。

出土遺物

遺物は少なく、2はカマド内から出土している。

土器（第11図1~3）

1~3は土師器で、1は杯の口縁部で、内外ヘラ磨きが入るが、器表面が剥落しているので明瞭でない。内面の口縁下に凹線が入る。黄白色を呈す。2は瓶の胸部で、3は鉢で外面は粗いハケで、内面は胴上位が細かい横ハケである。

11号竪穴住居跡（図版11、第8図）

調査区南東部の竪穴住居跡の密集地帯に位置し、14号竪穴住居跡を切る。長軸2.65m、短軸2.20mを測る隅円方形プランである。壁の残りが悪く、検出時にすでに床面が露出していた。北側中央を22号掘立柱建物跡に切られているためか、カマドや焼土は検出されなかつた。主柱穴は3本しか確認できなかつた。その径は18~30cmを測る。貼床も明瞭でない。

出土遺物

土器（図版27、第10図4~7）

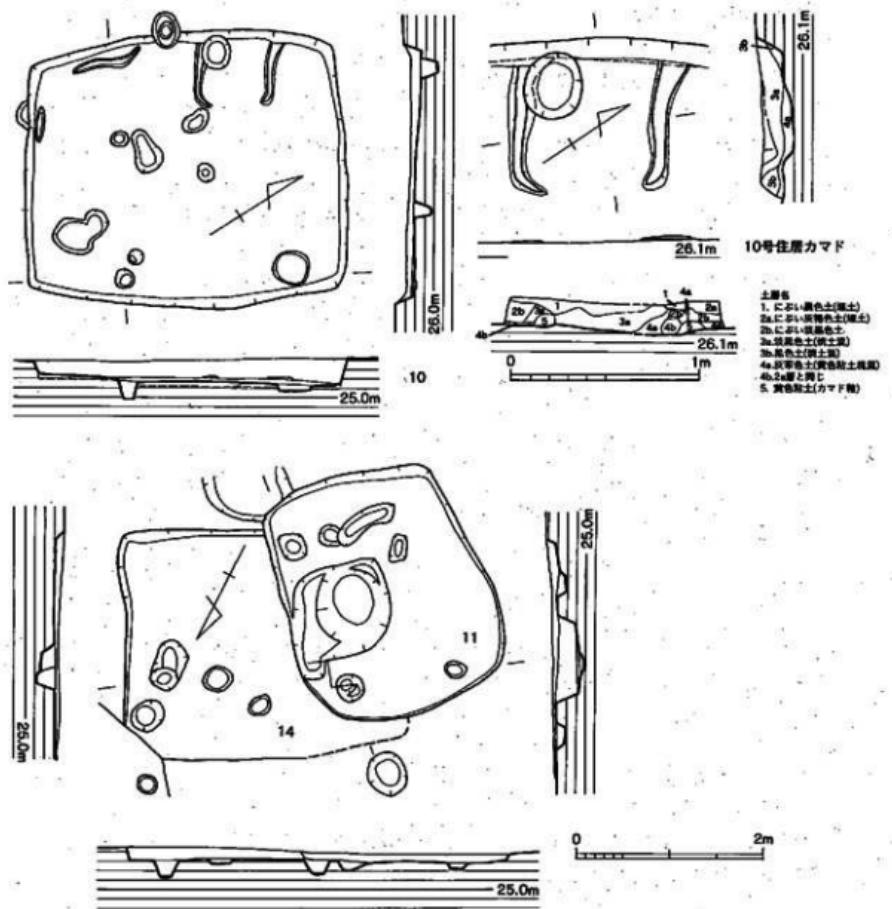
4は土師器の鉢の口縁部で、ピット1出土。5は土師器の皿と思われ、内面はヘラ磨きが見られる。6は須恵器の小型の杯身で完形だが、口縁部が歪んでおり、口径は不確実である。底部は回転ヘラ切りの後調整している。4は須恵器の甕の腹部で、外面に平行タタキ、内面に同心円文の当て具痕がある。

12号竪穴住居跡（図版11・12、第9図）

調査区南東部の竪穴住居跡の密集地帯に位置し、13・15号竪穴住居跡を切る。長軸4.15m、短軸3.65mを測る隅円方形プランである。壁の残りが悪く、検出時にすでに床面が露出していた。そのためかカマドや焼土は検出されなかつたが、主柱穴は4本明確に確認できた。その径は32~50cmを測る。貼床も明瞭でない。

出土遺物

土器（第10図8~11）



第8図 10・11・14号竪穴住居跡・10号竪穴住居跡カマド実測図 (1/60・1/30)

8~10は土師器である。8は杯の口縁部で、内外ヘラ磨きが入る。ピット2出土。9は瓶での口縁部で、ピット1出土。10は甕の口縁部。11は須恵器の蓋で、復元口径136cmを測る。

鉄器（図版30、第33図4）

埋土中から手鎌が出土している。

13号竪穴住居跡（図版11・12、第9図）

調査区南東部の竪穴住居跡の密集地帯に位置し、12号竪穴住居跡に切られる。重複が激しく、切り合い部分はプランが明確に検出できなかつた。東半分が失われているため、東西軸の長さは不明で、一辺32m前後の方形プランを推定するのみである。壁の残りが悪く、検出時にすでに床面が露出していた。焼土が北隅に検出されたが、カマド袖は確認できなかつた。主柱穴・貼床は明瞭でない。

出土遺物

遺物が少なく、実測できるもの2点を掲載した。12・13はピット1、14は埋土出土である。

土器（第11図、第12~14図）

12・13は須恵器の杯の口縁部で、同一個体の可能性があるが、両者とも大きく歪んでいるので確定できない。14は高坏の坏部であろう。

14号竪穴住居跡（図版11・12、第8図）

調査区南東部の竪穴住居跡の密集地帯に位置し、15号竪穴住居跡を切り、13号竪穴住居跡に切られる。西壁が検出されなかつたことから正確でないが、貼床の範囲から長軸3.05m、短軸2.45mを測る方形プランと思われる。カマドや焼土は検出されなかつた。主柱穴もはつきりとは確認できなかつた。その径は18~30cmを測る。貼床も明瞭でない。

出土遺物

遺物が少なく、実測できる遺物に土師器の杯の口縁部片があるが、掲載しなかつた。残りが悪く、外面にはヘラ磨きが入るが、磨滅のため内面は確認できなかつた。ピット1から出土している。

15号竪穴住居跡（図版11・12、第9図）

調査区南東部の竪穴住居跡の密集地帯に位置し、12・13・14号竪穴住居跡に大部分を切られるため、詳細は不明である。東隅しか確認できなかつたため、規模は不明で方形プランを推定するのみである。遺物も少なく、実測できるものがない。

16号竪穴住居跡（図版12、第10図）

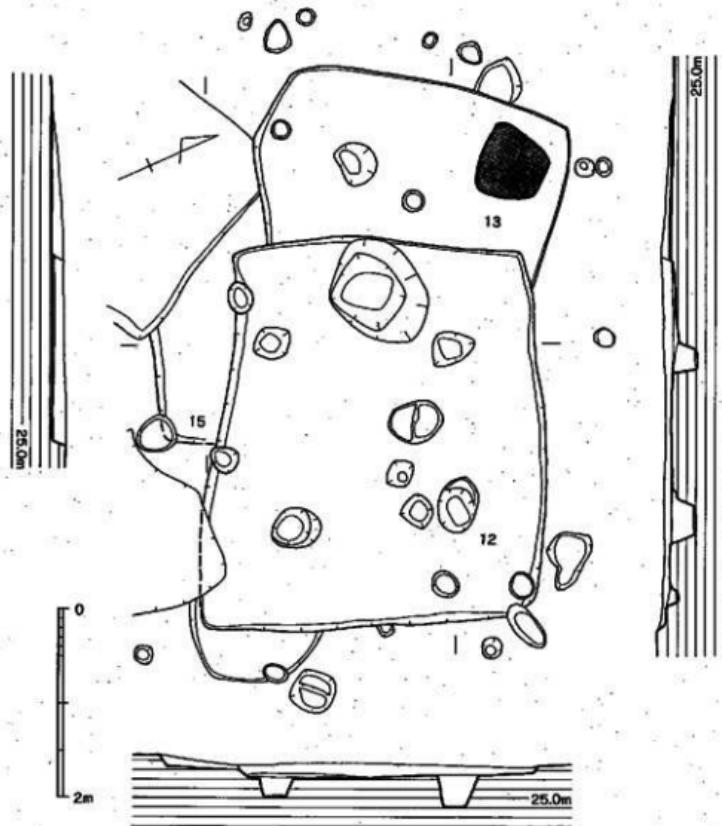
調査区南東部の竪穴住居跡の密集地帯に位置し、大部分が調査区外に出るため詳細は不明で

ある。西隅をピットに切られるため、東北隅しか確認できなかつた。そのため、規模は不明で方形プランを推定するのみである。主柱穴は1本だけ確認できた。貼床は明瞭で、これを剥がすと、壁沿いに溝状の落ち込みが見られた。これは排水のための床下施設であろう。カマドの有無は確認できなかつた。

出土遺物

土器 (第11図15)

土器部の高杯の裾部で、ピット2から出土。



第9図 12・13・15号竪穴住跡実測図 (1/60)

17号竪穴住居跡（図版12、第10回）

調査区南東隅の竪穴住居跡の密集地帯に位置し、18・19号竪穴住居跡を切る。大部分が調査区外に出るため詳細は不明である。北東隅しか確認できなかつたため、規模は不明で方形プランを推定するのみである。重複が激しく、壁の残りも悪く、床面も明瞭でなかつたことから、主柱穴は確実に伴うといえないと。遺物も少なく、実測できるものがない。

18号竪穴住居跡（図版12、第10回）

調査区南東隅の竪穴住居跡の密集地帯に位置し、17号竪穴住居跡に大部分を切られ、南半分が調査区外に出るため詳細は不明である。北壁しか確認できなかつたため、南北軸の長さがわからず規模は不明で、1辺3.0mの方形プランを推定するのみである。主柱穴は2本確認され、その径は35~40cmである。壁の残りが悪いため、遺物が少なく、実測できるものがない。

19号竪穴住居跡（図版12、第10回）

調査区南東隅の竪穴住居跡の密集地帯に位置し、18号竪穴住居跡に南半分を切られるため詳細は不明である。北壁しか確認できなかつたため、南北軸の長さがわからず規模は不明で、1辺2.0mの小型の方形プランを推定するのみである。主柱穴は2本確認され、その径は25~45cmを測る。遺物も少なく、実測できるものがない。

20号竪穴住居跡（図版21、第10回）

調査区南東部の南側に位置し、21号掘立柱建物跡に切られる。南半分が調査区外に出るため詳細は不明である。北壁しか確認できなかつたため、南北軸の長さがわからず規模は不明で、1辺2.1mの小型の方形プランを推定するのみである。主柱穴は2本確認され、その径は25~45cmを測る。貼床は明瞭でない。遺物も少なく、実測できるものがない。

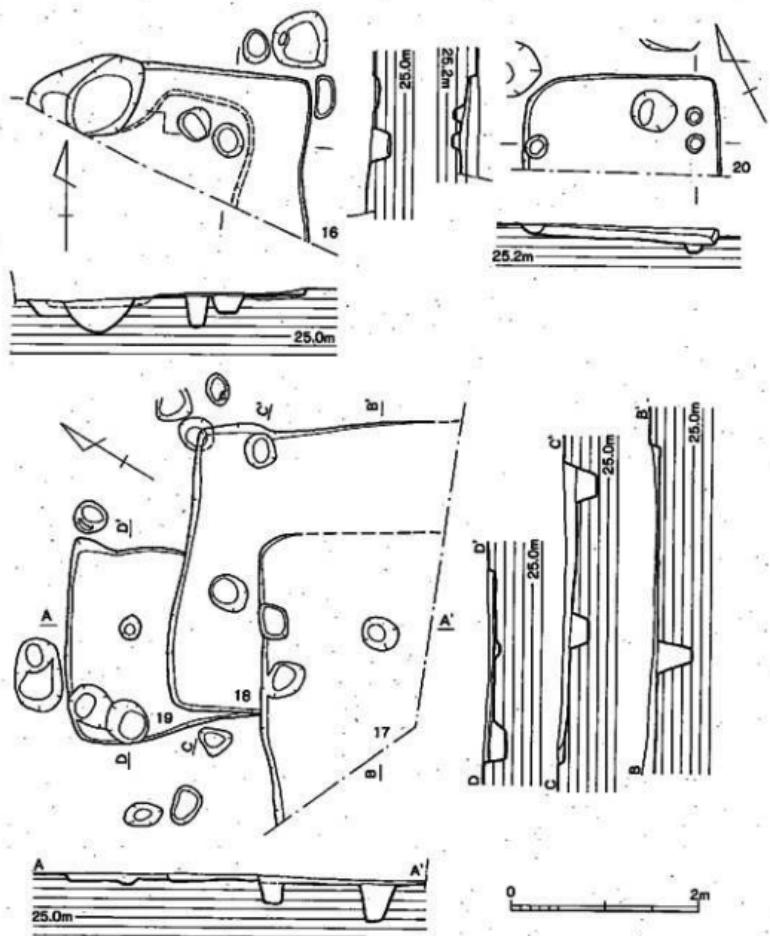
2) 掘立柱建物跡

1号掘立柱建物跡（図版13、第12回）

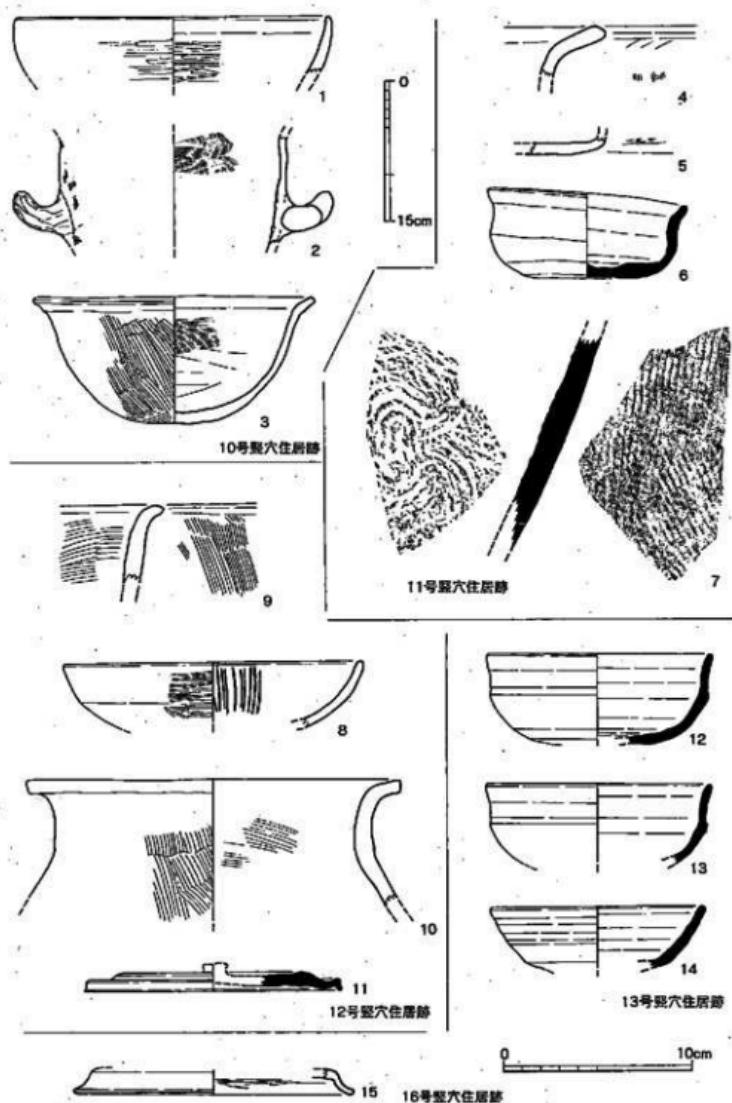
調査区西北端に位置し、西側の大半が調査区外にあるため、規模を推定できない。周辺のピットよりも若干大きく、主軸方向が明瞭に検出された建物群と一致するので建物跡と考えたが柵の可能性も残る。

検出された辺は3.6mで、軸方向はN-355°-Wである。柱穴はいずれも東側にテラスをもつ不整形で、大きいもので長軸33cm、短軸19cmを測る。柱痕は9~13cmのものが検出された。

実測できる遺物が出土しておらず、時期は不明。



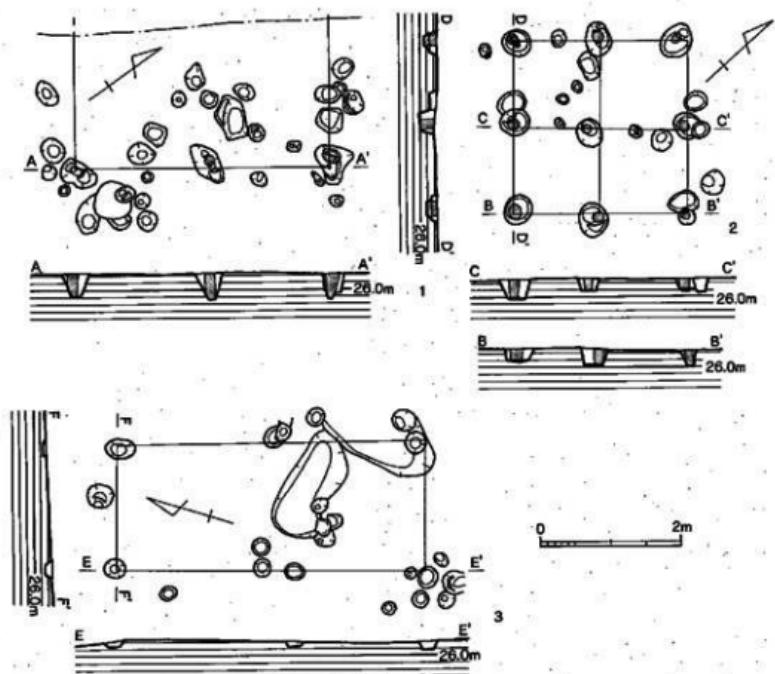
第10図 16~20号竖穴住居跡実測図 (1/60)



第11圖 竖穴住居跡出土土器実測図② (1/3、2・3は1/6)

2号掘立柱建物跡 (図版13、第12図)

調査区西北に位置する、9号掘立柱建物跡の北側に隣接しているが、明瞭に検出されなかつた。2 (2.5m) × 2間 (2.5m) の総柱建物で、平面形は正方形を呈し、床面積は5.0m²である。主軸方向はN-43°-Eである。小さいもので径12cmの円形、大きいもので長軸24cm、短軸21cmの不整形であった。柱痕は9~13cmのものが検出された。実測できる遺物が出土しておらず、時期は不明。



第12図 1~3号掘立柱建物跡実測図 (1/80)

3号掘立柱建物跡（第12図）

調査区西北に位置する、1(1.8m) × 2間(4.4m)の建物で、床面積は7.92m²である。径25～45cmの円形で、柱痕は明瞭には検出されなかった。主軸方向はN-17°-Eで、周辺の建物群と異なり、柱穴スパンが広いので確実性に欠ける。

実測できる遺物が出土しておらず、時期は不明。

4号掘立柱建物跡（図版13、第13図）

調査区西北の掘立柱建物跡の密集地帯に位置する、1(3.0m) × 1間(3.0m)の建物で、平面形は正方形を呈し、床面積は9.0m²を測る。柱穴の平面プランは不整形のものが多いが、土層の観察から柱の抜き取りのためとわかる。本来の形を留めるのは柱4のみであり、その径は長軸70cm、短軸30cmの楕円形である。柱1～3には抜き取り穴のテラスが付いているが、いずれも建物の外側から抜いており、上屋構造がなくなるまえに抜き取った可能性が高い。これらは柱穴中位で柱痕が検出されており、その径は16～20cmである。柱3の南側に段状遺構があるがこれは、5号掘立柱建物跡のものと同様に地山の開削して平坦面を形成したものと思われる。主軸方向はN-355°-Eで5号掘立柱建物跡に近く、北西方向に平行に移動している。また規模はやや大きくなっているがほぼ等しいことから、5号掘立柱建物跡の建て替えと考えられるが、両者に切り合いがないため、前後関係は不明である。

実測できる遺物が出土しておらず、時期は不明。

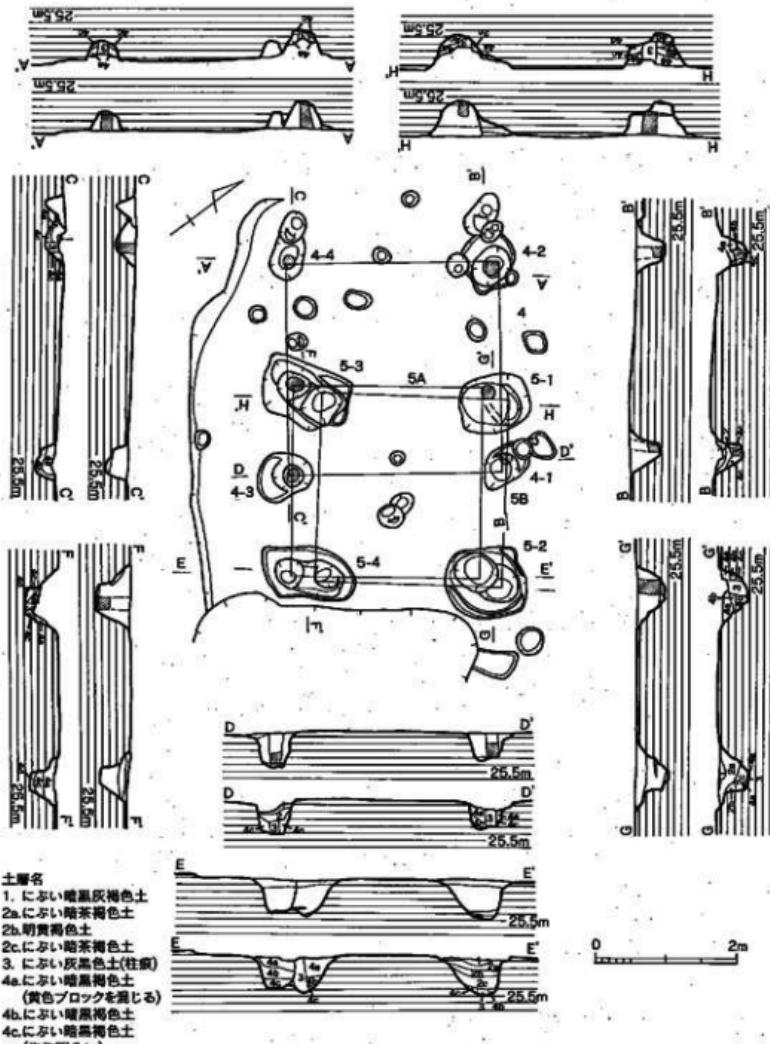
5号掘立柱建物跡A・B（図版13、第13図）

調査区西北の掘立柱建物跡の密集地帯に位置し、検出段階では建物の重複を認識できなかつた。建物A・Bは共に1(2.7m) × 1間(2.7m)の建物で、平面形は正方形を呈し、床面積は15.4m²を測る。柱穴は切り合いが明確でなかつたため、正確な平面プラン・規模は不明である。また、土層の観察から柱の抜き取りの入るものがあるため、不整形を呈するものが多い。柱1は抜き取りが入っておらず、本来の柱穴が残っている。柱穴は一辺80cm前後の略方形であろう。抜き取りの及んでいない深さで径16cm前後の柱痕が検出されている。

柱4の土層から、建物Aが新しい。主軸方向は建物AがN-36.5°-Eで、建物BがN-38°-Eであり、若干ずれているが、ほぼ同じ位置に建て替えたと見てよい。前述したように4号掘立柱建物跡も本建物の建て替えと考えられるが、両者に切り合いがないため、前後関係は不明である。

建物南側には段状遺構があるが、建物Bの辺から18m前後離れて並走している。途中で屈曲するがその位置も、北辺から12mほど離れている。このことから、この段状遺構は、建物建築前に地山の開削して平坦面を形成したものと思われる。

実測できる遺物が出土しておらず、時期は不明。



第13図 4・5A・B号掘立柱建物跡実測図 (1/80)

6号掘立柱建物跡（図版14、第14図）

調査区西北の掘立柱建物跡の密集地帯に位置し、2号竪穴住居跡を切る。2(3.0m) × 3間(4.4m)の建物で、床面積は13.2m²である。径35~40cmの円形で、柱痕はすべての柱穴から検出され、その径は18~24cmを測る。主軸方向はN-41°-Eで、周辺の建物群と一致する。

出土遺物

柱7の掘形内からは綠釉陶器片が出土している。

綠釉陶器（図版27、第23図1）

1は楕の口縁部で、口縁端部が外反する。復元口径15.0cmで、釉は明緑色で非常に薄くかかっている。胎は灰白色で、軟質である。

7号掘立柱建物跡（図版15、第14図）

調査区西北の掘立柱建物跡の密集地帯に位置し、西南端が調査区外にあるため桁行は不明である。南辺の西南端は搅乱を受けているため、もう1間延びるかどうかは不明であるが、主軸を同じくする建物の規模から、もう1間以上延びると推定されるので、2(3.8m) × 3間以上(5.9m以上)の建物で、床面積は22.4m²以上であろう。柱穴は径30~36cmの円形で、柱痕はすべての柱穴から検出され、その径は11~19cmを測る。主軸方向はN-41°-Eで、周辺の建物群と一致する。実測できる遺物は出土していない。

8号掘立柱建物跡（第14図）

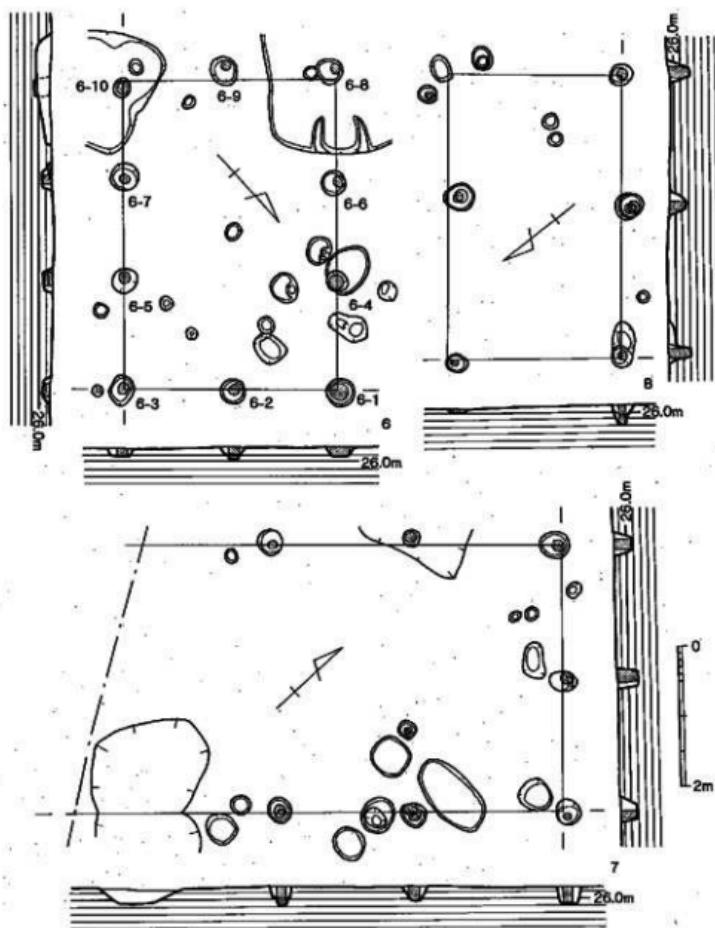
調査区西北の掘立柱建物跡の密集地帯に位置し、1(2.45m) × 2間(4.05m)の建物跡である。主軸方向はN-52°-Eで、周辺の建物群とほぼ90°振れているが、柱穴スパンが広く、明瞭には検出されなかつたので確定性に欠ける。柱穴は一辺30~42cmの円形を呈し、深さはやばらつく。柱痕は1本を除いて検出されており、その径は12~16cmを測る。実測できる遺物は出土していない。

9号掘立柱建物跡（図版15、第15図）

調査区西北の掘立柱建物跡の密集地帯に位置する、2(3.7m) × 4間(7.14m)の建物跡で、南辺に扉が付く。柱穴は一辺の33~54cmの円形を呈し、深さはやばらつく。柱痕はすべての柱穴から検出されており、その径は14~22cmを測る。主軸方向はN-37°-Eで、周辺の建物群と一致している。実測できる遺物は出土していない。

10号掘立柱建物跡（図版16、第15図）

調査区西北の掘立柱建物跡の密集地帯に位置する、3(4.5m) × 3間(6.1m)の建物跡で、梁と桁の柱穴スパンが異なるので長方形プランを呈する。柱穴は一辺58~60cmの略方形を呈し、



第14図 6~8号掘立柱建物跡実測図 (1/80)

柱痕はすべての柱から検出されており、その径は20~40cmを測る。主軸方向はN-33°-Eで、周辺の建物群と一致している。実測できる遺物は出土していない。

11号掘立柱建物跡（図版16・17、第16図）

調査区西北の掘立柱建物跡の密集地帯に位置し、1号竪穴住居跡を切る。2(4.1m)×2間(4.1m)の總柱建物で、正方形プランを呈する。柱穴の平面プランは不整形で、切り合いや抜き取りのため、不整形になっており、一辺25~50cmの円形を呈す。柱痕はすべての柱穴から検出されており、その径は12~18cmを測る。主軸方向はN-18°-Eで、周辺の建物群と一致している。実測できる遺物は出土していない。

出土遺物

土器（第23図2）

須恵器の無頸の高杯で、口縁端部がわずかに外反する。

12号掘立柱建物跡（図版18、第16図）

調査区西北の掘立柱建物跡の密集地帯に位置する、1(1.32m)×3間(5.00m)の建物跡で、柱穴は径50~54cmの平面円形を呈す。柱痕は柱10を除くすべての柱穴から検出されており、その径は15~20cmを測る。主軸方向はN-37°-Eで、周辺の建物群と一致している。実測できる遺物は出土していない。

出土遺物

土器（第23図3・4）

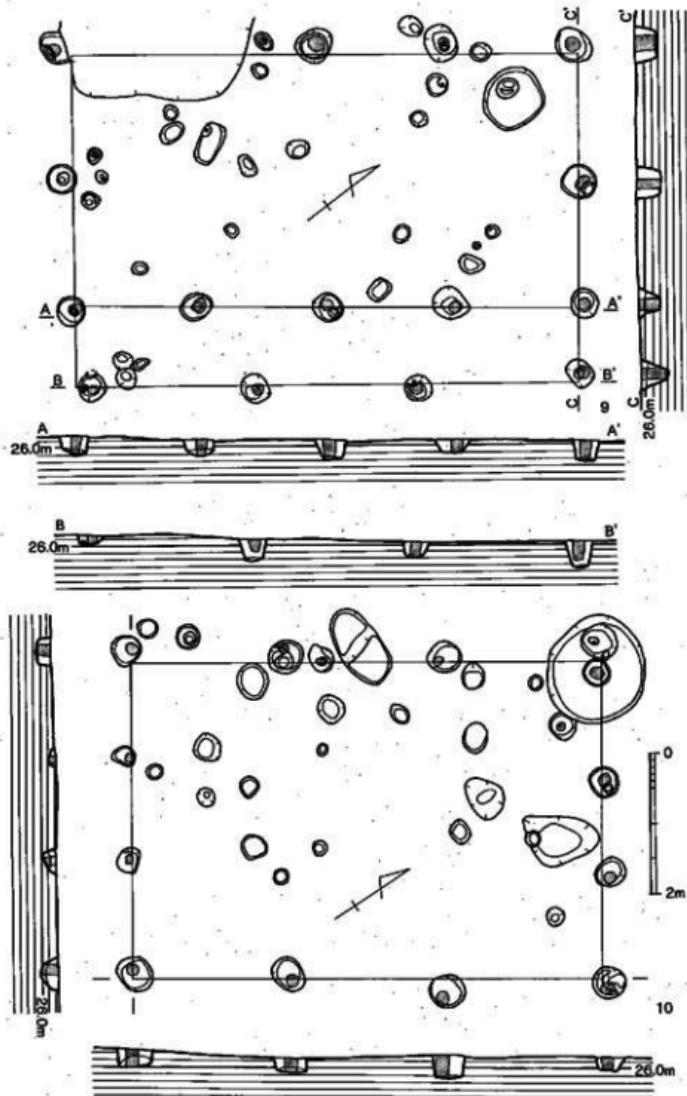
3・4は土師器の甕の口縁部で、前者は口縁端部跳ね上げで、内面は、胴部が削り、口縁部と外面に細かいハケが入る、異質なもの。後者は外面に煤が付着する。

13号掘立柱建物跡（図版18、第16図）

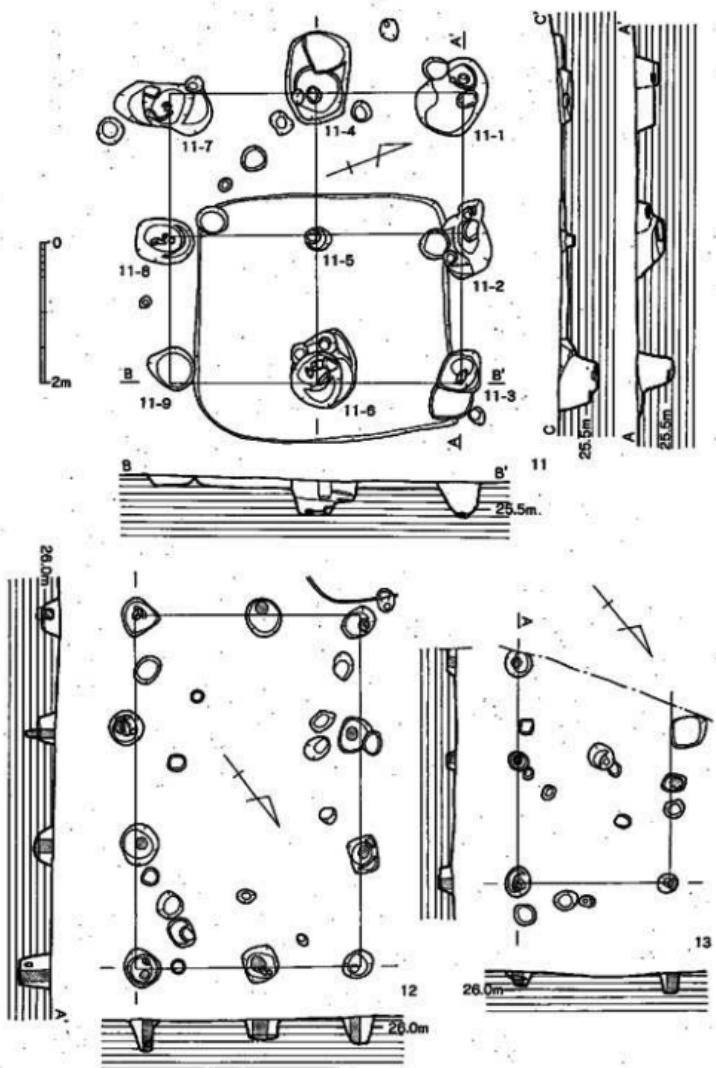
調査区西北の掘立柱建物跡の密集地帯に位置し、西側の大半が調査区外にあるため、規模を推定できない。1(2.15m)×2間(3.30m)以上の建物跡で柱穴は径24~40cmの平面円形を呈し、柱痕はすべての柱穴から検出されており、その径は13cm前後を測る。主軸方向はN-39°-Eで、周辺の建物群と主軸方向は一致するが、柱穴が小さく、明瞭には検出されなかつたので確実性に欠ける。実測できる遺物は出土していない。

14号掘立柱建物跡（図版18、第17図）

調査区西北の掘立柱建物跡の密集地帯に位置し、西側の大半が調査区外にあるため、規模を推定できない。1(3.1m)×2間(4.4m)以上の建物跡で柱穴は径28~30cmの平面円形を呈し、



第15圖 9・10号獨立柱建物跡実測図 (1/80)



第16図 11~13号掘立柱建物跡実測図 (1/80)

柱痕は柱2~4から検出されており、その径は13cm前後を測る。主軸方向はN-51°-Eで、周辺の建物群と主軸方向は一致するが、柱穴が小さく、明瞭には検出されなかつたので確実性に欠ける。実測できる遺物は出土していない。

15号掘立柱建物跡（図版19、第17図）

調査区西北の掘立柱建物跡の密集地帯に位置し、中央部に水道管の下のために調査できない範囲があり、東辺が明瞭でないため柵跡の可能性もあり確実性が弱い。また、北半分が調査区外にあるため、規模は不明で、他の掘立柱建物跡の例から、2(4.0m)×3間以上(4.85m以上)の掘立柱建物跡を推定するにとどまる。柱穴は径52~70cmの平面方形を呈す。柱痕は検出されていない。主軸方向はN-35°-Eで、周辺の掘立柱建物群と主軸方向が一致する。実測できる遺物は出土していない。

16号掘立柱建物跡（図版20、第17図）

調査区西北の掘立柱建物跡の密集地帯に位置し、西辺が水道管下で調査できない位置に入っているが、明瞭に検出されたことから規模は特定できる。北辺の梁の柱が1本足りないか、2(4.0m)×3間(5.6m)の建物跡である。柱穴は径52~70cmの平面方形を呈す。柱痕は柱7からのみ検出されており、その径は24cmを測る。主軸方向はN-52°-Eで、周辺の建物群と主軸方向は一致する。

出土遺物

土器（第23図5）

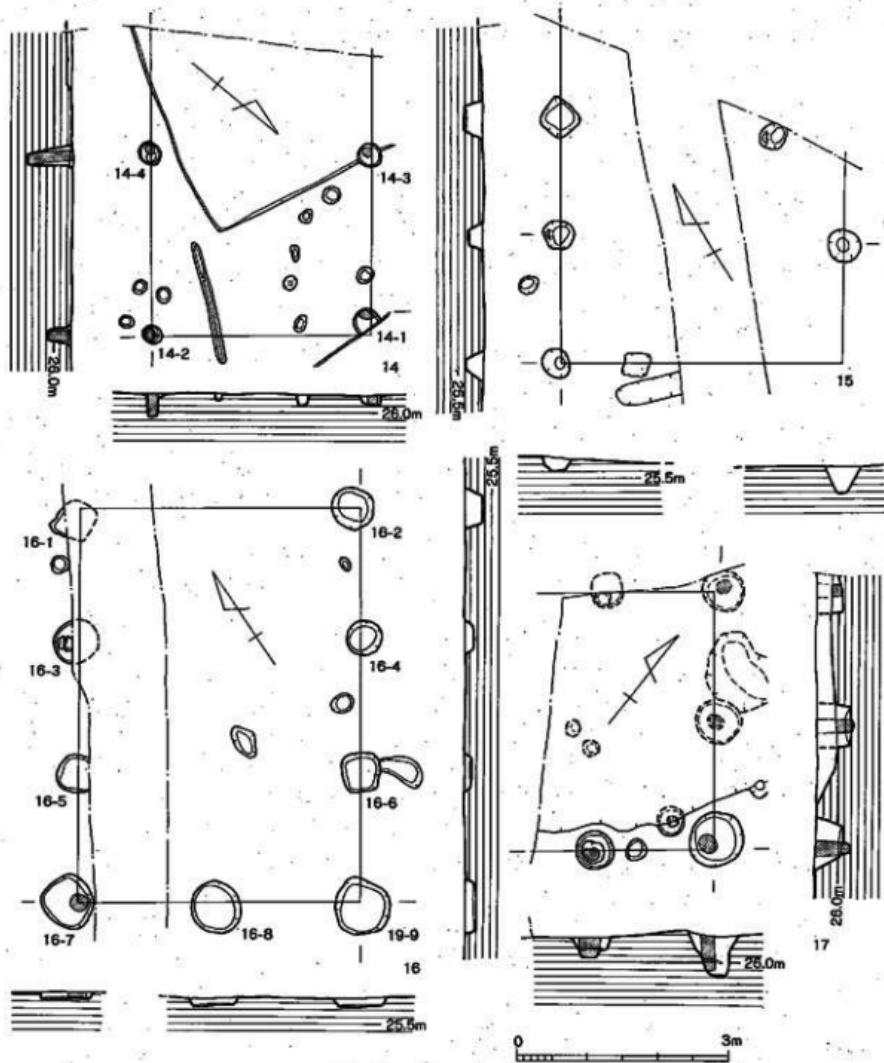
須恵器の杯身で、底部は静止ヘラ切りで、粗い調整が入っている。復元口径10.1cmで、器高3.7cmである。

17号掘立柱建物跡（図版19、第17図）

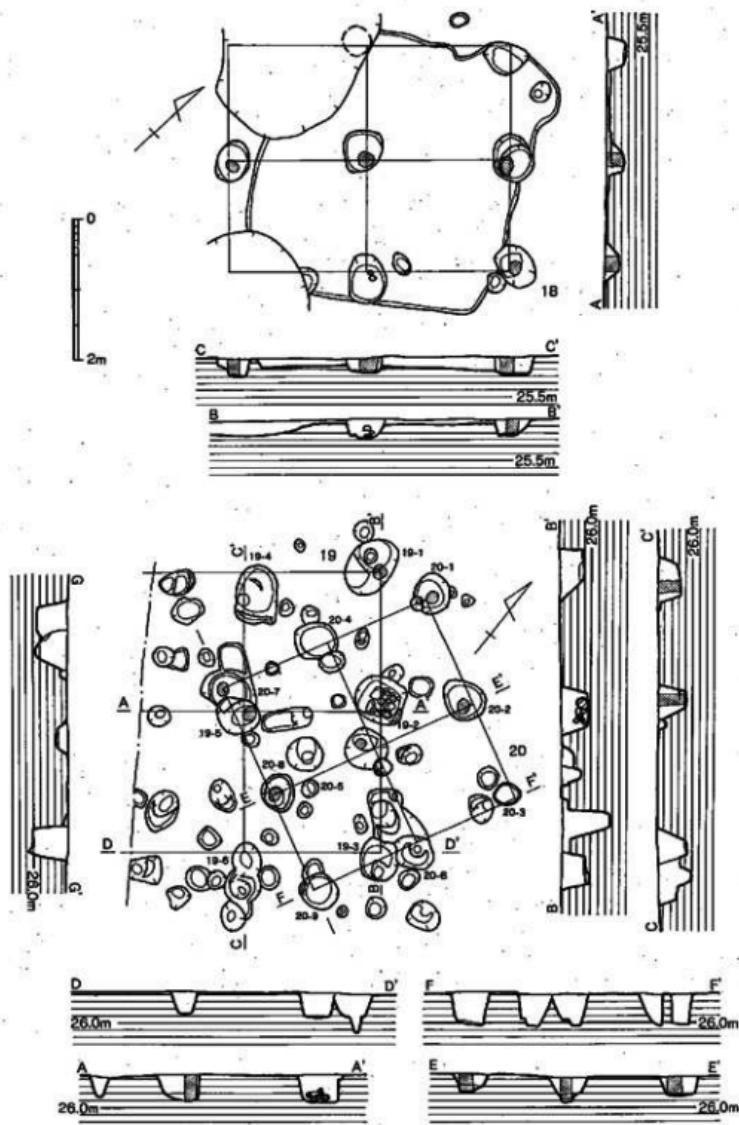
調査区西北の掘立柱建物跡の密集地帯に位置し、攪乱の下からであるが明瞭に検出された。西側が調査区外にあるため、規模は不明で、2(3.78m)×1間以上(2.55m以上)の建物跡を推定するにとどまる。柱穴は径50~75cmの円形を呈し、柱痕はすべての柱穴から検出されており、その径は19~30cmを測る。主軸方向はN-36°-Eで、周辺の建物群と主軸方向は一致する。実測できる遺物は出土していない。

18号掘立柱建物跡（図版9、第18図）

調査区中央に位置し、9号竪穴住居跡を切る。植木の抜き穴の攪乱を受けており、残りが悪いが、明瞭に検出された。2(3.22m)×2間(3.98m)の建物跡で、平面プランは方形である。柱穴は1辺40~60cmの平面略方形を呈す。柱痕は検出されたもので、径20~24cmを測る。主軸



第17図 14~17号据立柱建物跡実測図 (1/80)



第18図 18~20号掘立柱建物跡実測図 (1/80)

方向はN-41°-Eで、周辺の建物群と主軸方向は一致する。実測できる遺物は出土していない。

19号掘立柱建物跡（図版20、第18図）

調査区中央に位置し、20号掘立柱建物跡と重複し、ピットが集中しているため、明瞭には検出されなかつた。柱穴が大きく、平面形が略方形を呈するので確実であろう。西側が調査区外にあるため、規模は不明であるが、2(40m) × 2間(40m)の平面プラン正方形の総柱建物跡が推定できる。柱穴は1辺38～62cmの平面略方形を呈し、柱痕は検出されたもので径20cmを測る。主軸方向はN-52.5°-Eで、周辺の建物群と一致する。実測できる遺物は出土していない。

20号掘立柱建物跡（図版20、第18図）

調査区中央に位置し、19号掘立柱建物跡と重複し、ピットが集中しているため、明瞭には検出されなかつたが、柱穴が大きく、平面形が略方形を呈するので確実であろう。2(42m) × 2間(35.3m以上)の平面プラン正方形の建物跡である。柱穴は1辺32～64cmの平面略方形を呈す。柱痕は検出されたもので、径14～23cmを測る。主軸方向はN-27.5°-Eで、周辺の建物群とは異なる。実測できる遺物は出土していない。

21号掘立柱建物跡（図版21、第19図）

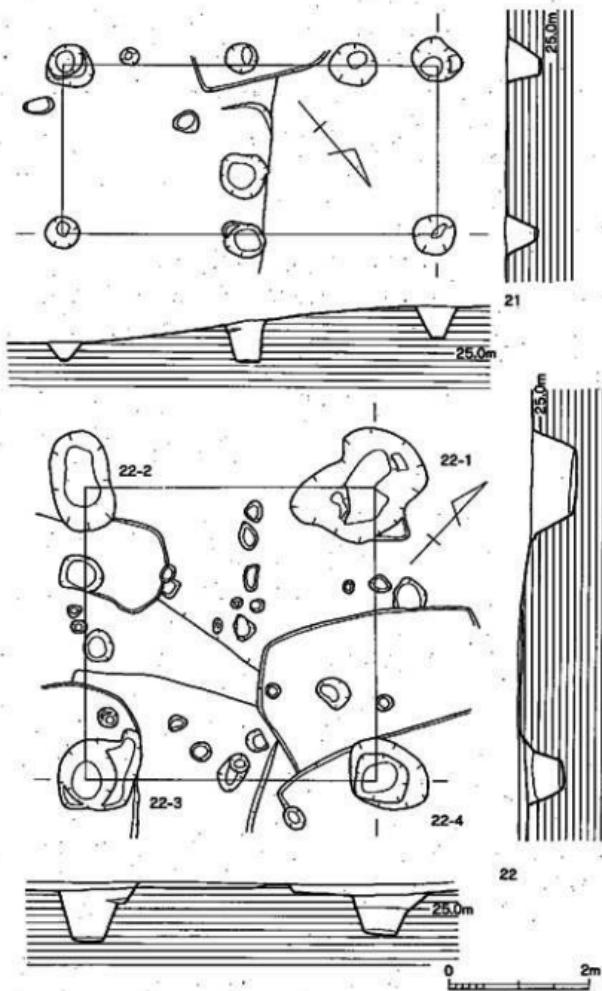
調査区中央に位置し、規模の同じピットが集中しているため、明瞭には検出されず、柱間スパンも異なるので確実性は弱い。また、西側が調査区外にあるため、規模は不明で、1(5.3m) × 1間(25.4m)か、2 × 1間以上の建物跡を推定するにとどまる。柱穴は1辺38～58cmの平面略方形を呈す。柱痕は検出されたもので、径14～23cmを測る。主軸方向はN-40°-Eで、周辺の建物群とは異なる。実測できる遺物は出土していない。

22号掘立柱建物跡（図版12・22、第19図）

調査区南東の竪穴住居跡の密集地帯に位置し、11・12号竪穴住居跡と切り合うが、先後関係は不明確である。1(4.16m) × 1間(4.16m)の建物跡で、平面形は正方形を呈し、床面積は8.32m²を測る。柱穴の平面プランは不整形のものが多いが、柱痕が検出されなかつたことから、柱の抜き取りのためと考えられる。比較的本来の形を留めている柱4は、1辺1.0～1.1mの平面略方形である。柱1・3にはテラスが付くが、前者は不整形で、小さなテラスが付くので抜き取り穴に伴うもので、後者は柱東辺に沿うものなので建築時のものであろう。柱痕は検出されなかつた。主軸方向はN-47°-Wである。

出土遺物

土器（第23図6）



第19図 21・22号据立柱建物跡実測図 (1/80)

土師器の杯の口縁部で、内外に丁寧なヘラ磨きが入る。

23号掘立柱建物跡（図版22・23、第20図）

調査区南東側に位置し、明瞭に検出された。2(3.6m) × 2間(4.2m)の平面プランほぼ正方形の総柱建物跡である。柱穴は1辺63～90cmの平面略方形を呈す。柱痕はすべての柱穴から検出され、その径は16～24cmを測る。主軸方向はN-37°-Eで、周辺の建物群と一致する。

実測できる遺物が出土していない。

24号掘立柱建物跡（図版23、第21図）

調査区中央東側に位置し、1号溝に切られている。当初は、溝の北側に規模の同じピットが集中していたため、溝に中央を切られる大型建物を推定したが、北側の柱穴列は多くの攪乱を受けているため、明瞭でなく、柱筋がわずかにずれるので、ここでは北辺を切られた、2(3.9m) × 3間(5.4m)の建物跡を復元した。柱穴は1辺36～76cmの平面略方形を呈す。柱痕はすべての柱穴から検出され、その径は20～36cmを測る。主軸方向はN-23°-Eで、周辺の建物群と一致する。

出土遺物

土器（第23図7）

須恵器の杯身の口縁部片である。

25号掘立柱建物跡（図版22、第20図）

調査区中央北側に位置し、規模の同じピットが集中し、多くの攪乱を受けているため、明瞭には検出されず、確実性は弱い。また、北側が調査区外にあるため、規模は不明で、2(4.18m) × 2間以上(1.44m以上)の建物跡を推定するにとどまる。柱穴は1辺63～90cmの平面略方形を呈す。柱痕は検出されたもので径16～24cmを測る。主軸方向はN-34°-Eで、周辺の建物群と一致する。

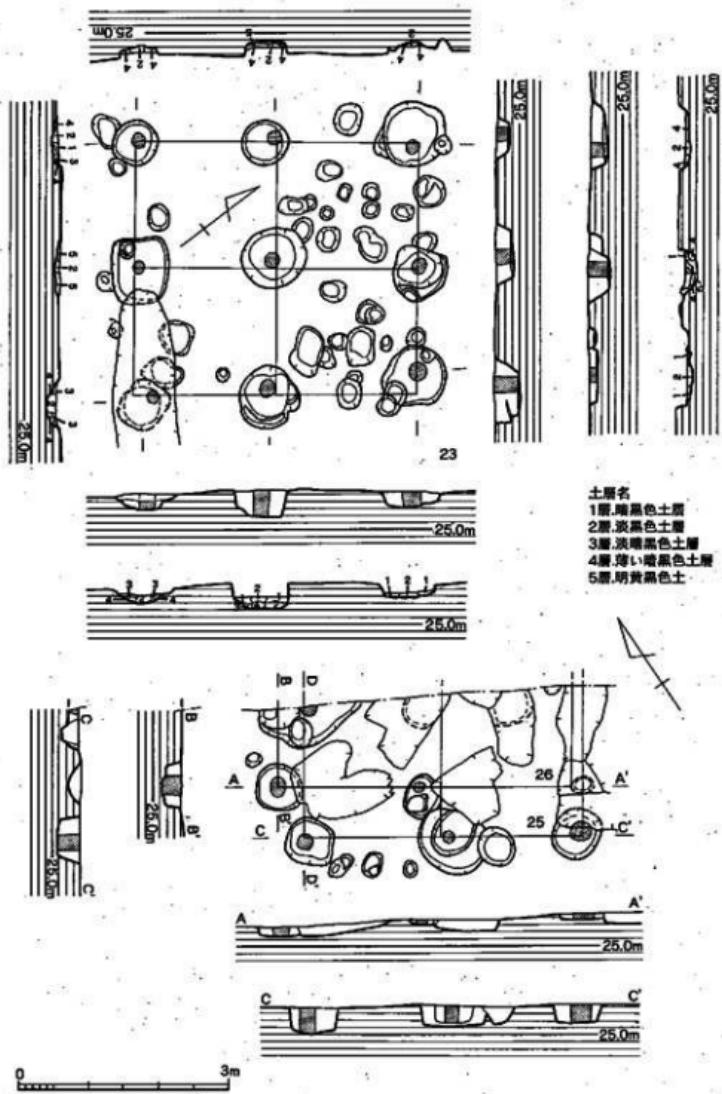
出土遺物

土器（第23図9・10）

土師器の杯か皿の口縁部片で、外面に削りが入る。

26号掘立柱建物跡（図版23、第20図）

調査区中央北側に位置し、規模の同じピットが集中し、多くの攪乱を受けているため、明瞭には検出されず、確実性は弱い。また、北側が調査区外にあるため、規模は不明で、2(3.98m) × 1間以上(1.82m以上)の建物跡を推定するにとどまる。柱穴は1辺50～63cmの平面略方形を呈す。柱痕はすべての柱穴から検出され、その径は14～22cmを測る。主軸方向はN-34°-Eで、周辺の建物群と一致する。



第20図 23・25・26号掘立柱建物跡実測図 (1/80)

出土遺物

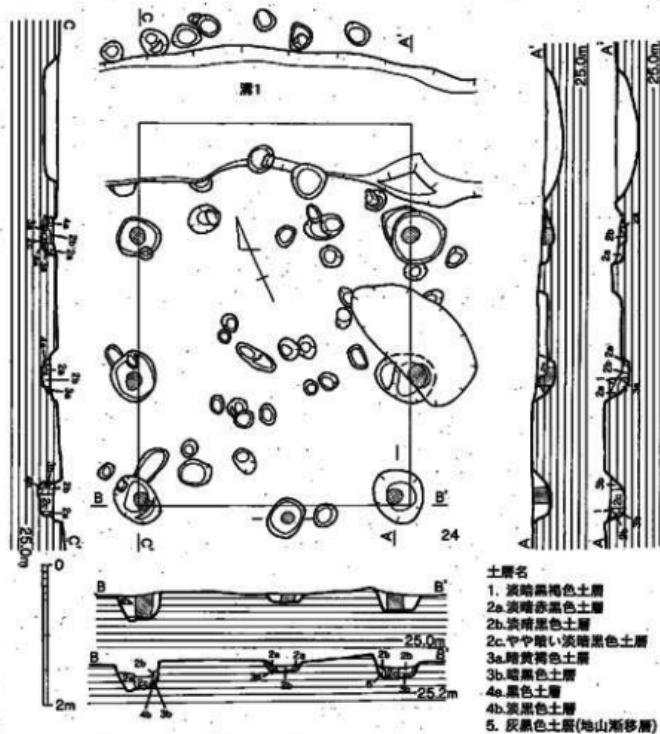
土器 (第23図9・10)

9は土師器の甕の口縁部、10は甕の口縁部であろう。

4) 櫛跡

1号櫛跡 (第22図)

調査区西北の掘立柱建物跡の密集地帯に位置し、11号掘立柱建物跡・1号竪穴住居跡の南に位置しているが、辺はそろっていない。また、周囲の掘立柱建物跡群とも軸方向が異なっているので、伴うものか不明である。長さ4m、柱穴の径は42~70cm、柱痕はすべての柱穴から検



出され、その径は16~20cm、軸方向はN-44°-Wである。

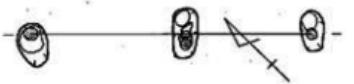
5) 土坑

1号土坑(第24図)

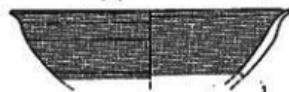
2次調査区西部に位置し、1号溝に切られている。

平面不整形で、長軸約2.5m、短軸2.2mと小さく、

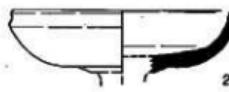
深さは最も深い所で36cmと浅い。埋土は溝のものとほぼ同じで、暗黒褐色であった。わずかに土器が出土している。



第22図 1号相跡実測図 (1/80)



6号掘立柱建物跡



11号掘立柱建物跡



17号掘立柱建物跡



3



22号掘立柱建物跡



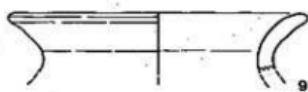
12号掘立柱建物跡



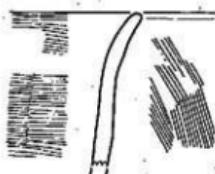
24号掘立柱建物跡



25号掘立柱建物跡



9



0 10cm

10
26号掘立柱建物跡

第23図 掘立柱建物跡出土土器実測図 (1/3)

出土遺物

土器 (第26図)

1は瓦質の鉢の口縁部で、外面に吹きこぼれた炭化物が付着する。復元口径36.0cmで2・3は須恵器の腹部である。

6) 溝状遺構

1号溝 (図版25・26、第25図)

2次調査区に位置し、北西から南東に直進し、南西に直角に曲がる。調査区外に延びるため、全体像は不明だが、現在の道路や水路と同じ方向に走っているので、区画溝の可能性が高い。幅は広いところで22m、深さは40cm程度で、北西から南東に傾斜している。24号掘立柱建物跡・1号土坑を切る。埋土下位から軒平瓦片が出土しているが、流れ込みと思われる。

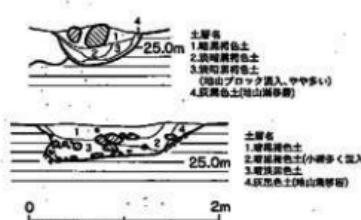
出土遺物

土器 (図版29、第26図1~7・9・10)

1・3・4・5は瓦質土器の鉢の口縁部で、3には口縁下に上向きの耳状の把手がついていたらしい。外面は磨き、内面は削りの後ナデており、淡暗灰を呈す。4



第24図 1号土坑実測図 (1/60)



第25図 1号溝上層実測図 (1/60)



第26図 1号土坑出土土器実測図 (1は1/4、2・3は1/3)

は外面は削りで、口縁部はナデ、内面もナデで、内外煤のため若干くすんでおり、橙褐色を呈す。復元口径50.2cm。5は、外面はタタキ後削りで、口縁部はナデ、内面もナデ、内外煤のためくすんでおり、外面には吹きこぼれらしい炭化物が付着する。復元口径46.6cm。2は焼成の悪い瓦質か土解質の摺鉢の口縁部で、外面は削り、口縁部はナデである。内面に摺目が見られ、橙褐色を呈す。6は瓦質の身の深い鉢であろう。外面は肩部は削り、口縁部はナデで、口縁下に凹線が入る。内面はナデのみで、口縁下に段をもち、口縁形態は鉢に共通するものがある。橙褐色を呈し、煮沸使用したような変色は見られない。7は須恵質の底部片である。9は須恵器の杯蓋片、10は肩部片である。

青磁（図版29、第28図8）

龍泉窯系の鍋蓮弁文椀の口縁部片で、明淡緑色の釉がかかる。口縁部外面がわずかに膨らむ。瓦（図版29、第28図11）

顎面の文様から垂水庵寺出土のものと同型と考えられ、瓦当面は残っていないが、右流れの扁行唐草文を配する軒平瓦片と思われる。垂水庵寺出土例から顎面の文様を復原すると、2個の宝相華文で面を飾り、四隅に8個の観音文を配して外周に珠文を46個巡らす。凹面は中央部は横方向のナデ、端部は縦方向の削りで、側面の2面も削りによる調整が入っている。桶巻作りと思われるが、痕跡は残っていない。

鉄器（図版30、第33図3）

鉄製釘隠しが出土している。扉に打つ釘の頭を隠す半球状のもので、鋳造品と思われ外面は平滑だが内面は鋳造時の凹凸が残っている。また、このことから鋳型は、表裏を彫り込んだものを合わせたタイプではなく、表面を半球状に彫り込んだ1枚のもので、中子なしに流し込んだのであろう。

管状土錐（図版30、第32図6）

長さ48cm、最大径1.0cm、重さ46gで埋土出土。

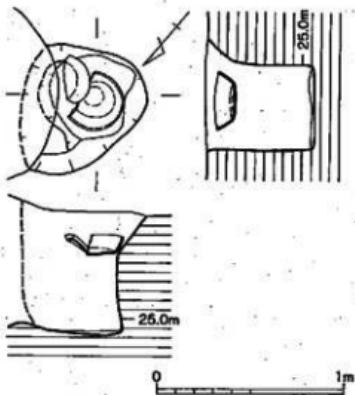
製塙土器（第32図1）

内面に布目を残すもので、細片であるため器種・部位は不明である。

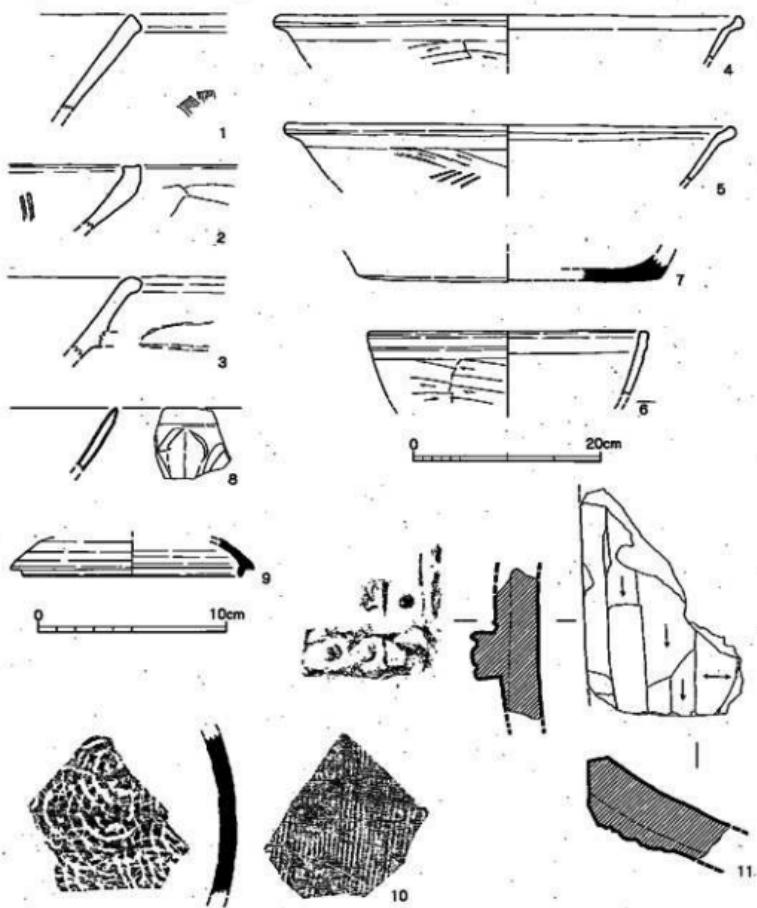
7) ピット

2次調査ピットII（図版26、第27図）

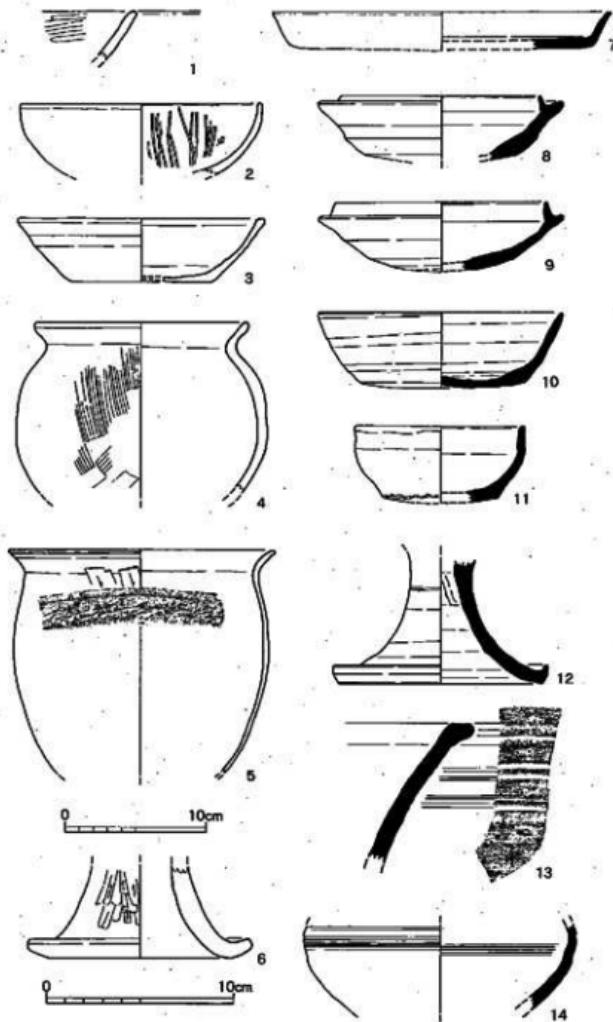
2次調査区南壁中央に位置し、上位より完形の須恵器が出土している。



第27図 ピットII実測図 (1/30)



第28図 1号溝出土土器実測図 (1/3、4・5・6は1/6)



第29図 ピット出土土器実測図 (1/3、5は1/4)

出土遺物

土器（図版27、第29図10）

須恵器椀で、底部は回転ヘラ切り後調整されており、口径13.0cmで、器高4.1cmである。

その他のピット出土遺物

土器（図版27、第29図）

1は黒色土器の椀の口縁部片で、内面はよく磨かれている。ピット6出土。

2~6は土師器で、2は杯で内面に暗文が入る。ピット4出土。3は椀で、底部は回転ヘラ切りである。内面にはナデが入る部分にスリップがかかり、橙褐色を呈す。復元口径13.0cmで、器高3.4cmでピット14出土。4は小型甌の口縁部片で、ピット20出土。5は中型甌で、外面は煤が付着し、内面も変色が著しい。ピット135出土。5は高杯の脚で、外面にケズリが入る。ピット10出土。

7~14は須恵器で、7は皿で、底部は回転ヘラ切りである。復元口径18.0cmで、器高2.0cmである。2次調査ピット2出土。8は小型の杯で、底部は回転ヘラ切りのち調整されてない。復元口径9.0cmで、器高4.1cmでピット10出土。9・10・11は杯で、9は復元口径10.4cmで、ピット103出土、10は復元口径11.2cmで、器高3.6cmである。ピット82出土、14は甌の脚部片であろう。ピット158出土。13は甌の口縁部で、ピット153出土。12は高杯の脚部で、ピット22出土。

手捏土器（図版30、第32図4・5）

いわゆるミニチュア土器で、4はピット53、5はピット57出土である。两者とも底部を欠損しているが、丸底と思われる。外面は整形時のオサエのみで、内面はナデ。復元口径は两者とも5.0cmである。

鉄器（図版30、第33図1・2・5・6）

1・2は鉄釘であろう。1は残存長3.5cmで、ピット18、2は残存長4.5cmで、ピット9出土である。5・6は大池添遺跡ピット1から出土した鉄製品で、薄いブリキ状の板を丸く曲げて、断面は中空の錐鉄型の中に仕切りの入ったもので、5はその先端部分と思われ、叩いて平坦にしており、丸く仕上げている。何かの金具であろう。

石器（図版30、第33図7）

7は姫島産黒曜石の打製石器で、ピット98から出土している。基部を欠き、残存長2.5cm、重さ1.4gである。

製塙土器（図版30、第32図2）

内面に布目を残すもので、細片であるため器種・部位は不明である。ピット28出土。

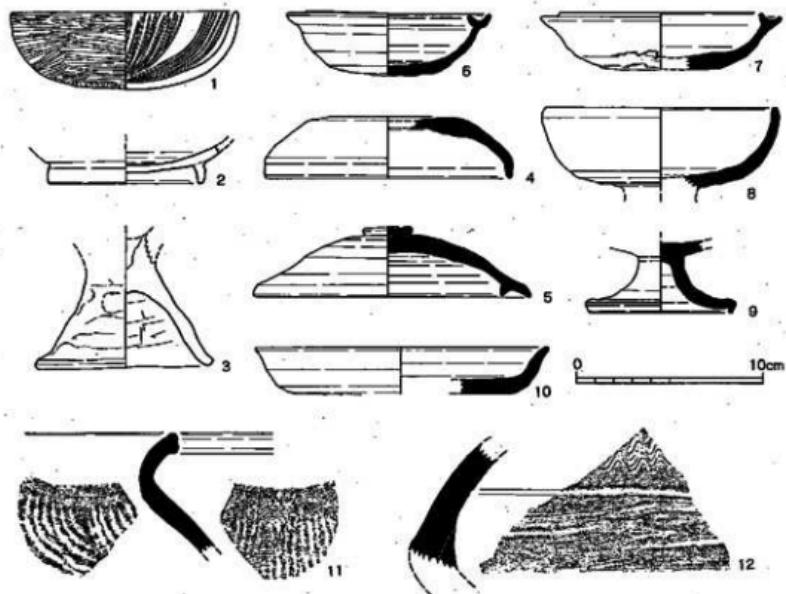
8) 包含層・搅乱出土の遺物

土器 (図版28、第30図1~12)

1~3は土師器で、1は杯で、外面はヘラ磨きで、内面は暗文が入る。2は回転ヘラ切りの後、高台を貼り付けている。内面はスリップがかかり、橙褐色を呈する。高台径8.0cmを測る。3は高杯の脚部である。

4~15は須恵器で、4は杯蓋で、天井部回転ヘラ切り後調整している。復元口径13.4cmで、器高3.5cm。5は偏平な宝珠つまみをもつ完形の杯蓋で、口径12.4cm、器高3.8cm。6は完形の杯身で底部は回転ヘラ切り後、未調整。復元口径8.4cmで、器高3.4cm。7は杯身で、底部は回転ヘラ切り後調整している。復元口径10.6cm、器高3.0cm。8は無頸の高杯で、杯部の下1/3は回転ヘラ削り。9は高杯の脚部、10は皿で、回転ヘラ切り後調整している。復元口径15.6cmで、器高3.0cm。11は蓋の口縁部。12は甕の頸部で、接合面で剥離している。口縁下に数条の複線波状文とその下に沈線が1条入る。

磁器 (図版28、第31図1)



第30図 包含層・搅乱出土土器実測図 (1/3)

淡黄緑色の透明釉が内外にかかるが、外底には及ばず、見込みは蛇ノ目の釉掻き取りである。近世のものだろう。

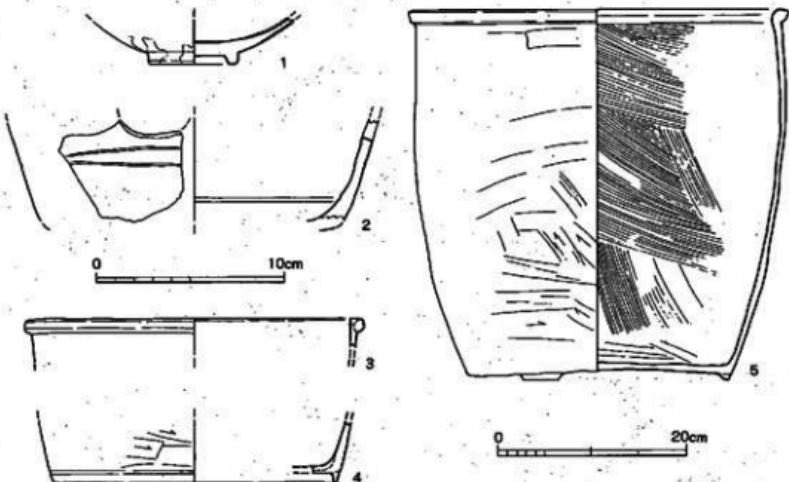
陶器（第31図2）

火鉢の脇部片だろうか。2条のヘラ書き沈線と円形の透かしの下半分と思われるものがある。内面に1条の沈線が入る。近世のものだろう。

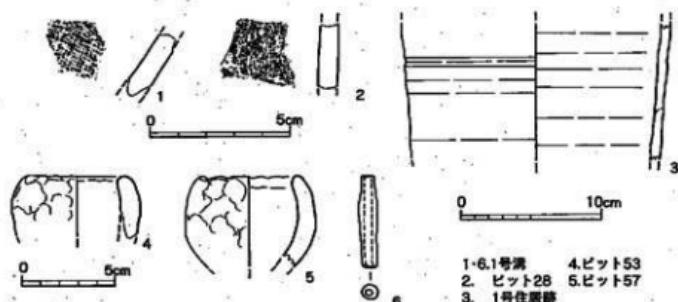
瓦質土器・火鉢（図版27、第31図3～5）

3は口縁部片で、復元口径36.0cmを図る。口縁部は外面を断面方形に肥厚させ、口唇部は平坦にしている。4は底部で、短い高台がつく。底部との接合部分は沈線状になっている。復元底径30.0cmを測る。5は外面に削りが入り、内面は細かいハケで、底部に方形の高台が3個ないし4個付く。胴中位で欠損しており、接合しなかつたため、器高は他の遺跡の出土遺物を参考にしており、正確なものではない。

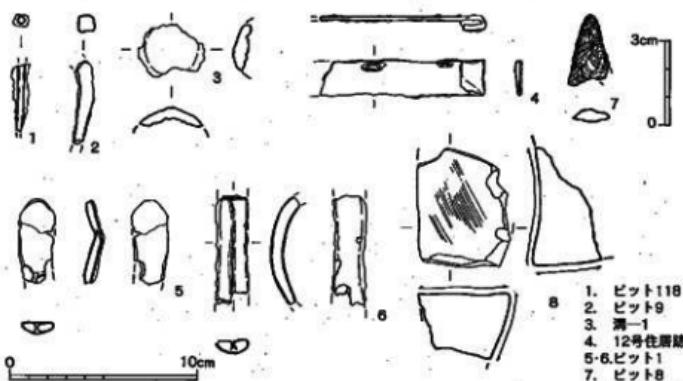
第30図1～3・5・6・9・10・12・13・第31図4は包含層出土、第30図4・7・8・12・第31図1～3・5は搅乱出土である。図5は2次調査区の南側に入る搅乱溝中の出土だが、ほぼ完形であったことから、搅乱溝の掘削時に掘り上げたものを投棄した可能性が高い。



第31図 包含層・搅乱出土近世遺物実測図（1・2は1/3、3～5は1/6）



第32図 土製品・製塙土器実測図 (1・2は1/2、3は1/4、4・5は1/3)



第33図 鉄製品・石製品実測図 (1/3, 1/2)

3. おわりに

大池添・ウツケ畠遺跡では竪穴住居跡19軒、掘立柱建物跡26棟、柵跡1基、溝状遺構1条が検出された。個々の遺構の残りも悪いことから、出土遺物が少なく、遺構の時期については不明なものも多い。そのため、細かい時期設定ができないが、遺跡の変遷を3期に分けたい。

1期は、6c末から7c中葉の集落で、2期は、8c後半から9c前半の集落、3期は16c代の溝状遺構である。個々の遺構の時期比定は、基本的には出土遺物によっているが、掘立柱建物跡は柱穴からの出土遺物に時期のわかるものが少なく、確実性が低い。また遺物の出土していないもの

もあるので、これについては建物の主軸方向の一一致するものを同時期とする。

本遺跡周辺の豊前バイパス路線内の新吉富村側の調査では、本遺跡に東接する一段下の段丘上の竹ノ下遺跡^Dでは同時期の集落遺跡が発見されており、その段丘の東端の友枝川に面する所では、同時期の群集墳が発見された宇野代遺跡^Dが位置している。西側には、県道福土・吉富線を挟んで、条里区画に伴う可能性のある溝状構造の検出された長田遺跡^Dが位置している。このことから、集落域・生産域・墓域をセットで把握することができる。また、本地域には古代寺院である垂水庵寺があり、その建立に伴う集落域の移動や、寺院を建立した氏族の動向など、遺跡の変遷や消長を総合的に考える必要がある。そのため、これについては改めて考察編を設けて詳述することにし、ここでは本遺跡のみの変遷を簡単に述べたい。

本遺跡では大きく削平された区画があるため、集落構造は完全には把握できないが、時期別配置図によって遺構分布を示し、各時期について述べる。

1期 (6c末~7c中葉)

遺構は谷を挟んで南北に分かれており、異なる集団であったかもしれない。北側には1から7・9・10号竪穴住居跡と、2・11・16から20号掘立柱建物跡が位置し、南側には11から19号竪穴住居跡と、22から24号掘立柱建物跡がある。

北側の竪穴住居跡はカマドの残っているものが多く、カマドの付く方向と切り合い関係から、2つのグループに分けられる。この2グループは切り合い関係があることから、2つの小期に分けられる。ここではA・B期とするが、年代を与えることはできない。1から3号竪穴住居跡はそれ以外の住居より新しいと考えられ、出土遺物から12号掘立柱建物跡、1号竪穴住居跡を切る11号掘立柱建物跡と、これと軸を同じくする2・16・20・23から26号掘立柱建物跡を含めてB期とし、それ以外はA期とする。南側の遺構は、北側の主軸方向と一致し、切り合い関係から新しいものをB期とする。

A期の北側の遺構は、8号竪穴住居跡の位置する空間を巡るように配置されており、4・6・7号竪穴住居跡は近接しており共存できないもので、ほぼ北側2軒と南側2軒がほぼ等間隔に分布していたとみてよい。竪穴住居跡の大きさもほぼ等しいことから、これは農作業を共同で行う最小単位であったであろう。掘立柱建物跡は比較的近い位置にあるので、竪穴住居跡とセットで家屋を構成していただろう。生産物を入れたと思われる總柱建物は小さいが小集落に必要な倉庫としては、十分な規模であったのではないだろうか。

南側の竪穴住居跡群は小型のものが重複しており、建て替えが激しい。しかしその南側には竪穴住居跡が存在していない。このことから、居住空間が規制されていたことが推察される。

これに対して、B期は北側の竪穴住居跡は2軒しかなく小型化しており、A期のものと同規模の總柱建物と、やや離れたところに一回り大きい總柱建物が存在している。また、總柱建物

の東には2×3間の掘立柱建物跡が存在している。この組み合わせは南側にも見られ、竪穴住居跡とは距離を置いた場所に、ほぼ同じ規模の建物が建てられている。この在り方から、2つの建物については共同管理がなされたと思われる。

こうした変化は、居住形態があるいは集落内の社会構造に変化があったものと思われるが、時代背景から考えると後者であろう。

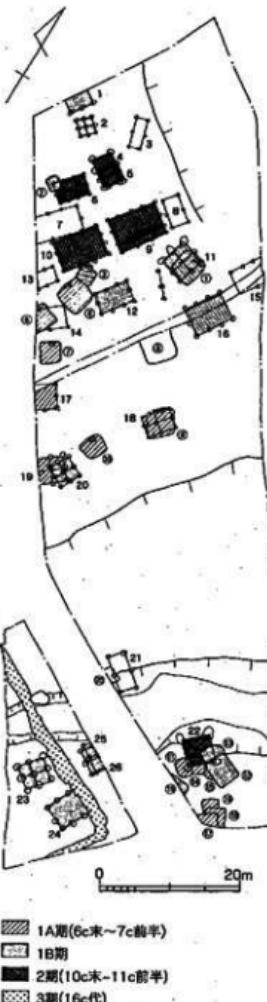
2期（10c末～11c前半）

確実にこの時期に伴う竪穴住居跡はなく、4～7・9・10号掘立柱建物跡がこの時期に当たる。時期比定の根拠は6号掘立柱建物跡の柱7の掘形から出土した縄釉陶器片のみであり、根拠としては薄弱であるが、柱痕の検出された柱穴からの出土であるので、遡る可能性はあっても下ることはないとあろう。縄釉陶器片は口縁下に稜を持ち、器壁が薄くなりつつ外反する特徴的な器形であり、底部に貼付け高台を持つ防長產縄釉陶器と思われる。

この建物群は、庇付きの9号掘立柱建物跡や10号掘立柱建物跡を主屋とし、6・12号掘立柱建物跡を副屋とし、4～6号掘立柱建物跡を倉庫とする構成で、何度かの建て替えが行なわれているが、基本的には1世帯であろう。

10c末～11c前半は、班田制度が崩壊し、莊園化が進行する時期である。こうした時代背景と、倉庫と考えられる4・5号掘立柱建物跡が小さく、それほど多くの生産物を収容できないことから、この建物群は一般農民の住居ではなく、農地を多く獲得した有力農民層か小規模の開発領主の屋敷地と考えられる。

22号掘立柱建物跡は、1B期のもつとも新しい



第34図 時期別遺構配置図 (1/800)

12号竪穴住居跡を切っていることから、この時期にあたる。1×1間だが柱間が大きく、柱穴も大きい大型建物で、段丘先端部に1棟だけ建っていることから、物見櫓のような特殊な目的で使用されていたのではないだろうか。当時は莊園を防衛する目的で武装化が進められていたので、その目的で建てられたものかもしれない。

3期（16c代）

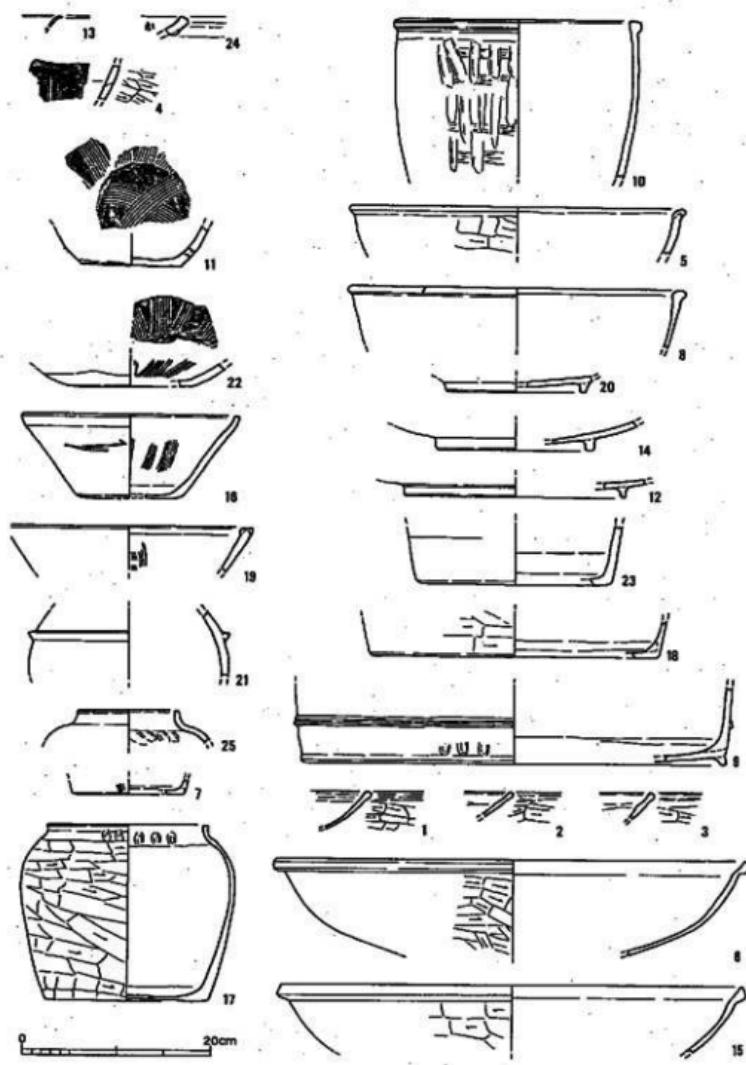
逆L字状に屈曲する溝が1条検出されたのみだが、この溝は現行の水路や道路と並走しており何らかの区画溝であった可能性が高い。溝の内部の調査面積が狭いため、内部からは溝に伴う遺構は検出されてない。溝からは瓦質土器の鉢が多く出土しているが、これは椎田町広幅城跡や行橋市金屋遺跡に類似が求められる。（第35図）それらの遺跡の瓦質土器の鉢とともに出土した遺物から、1号溝の時期は16c代と考えられる。

また、広幅城跡や金屋遺跡では、ウツケ烟遺跡2次調査区の搅乱溝から出土した瓦質土器の火鉢も出土しており、厳密な意味での共伴遺物ではないか時期的に大差ない位置に置くことはできよう。また、中津市黒水遺跡では、この火鉢を骨壺に使用した火葬墓が6基検出されている。（第36・37図）この遺跡でも共伴遺物が少なく時期を特定することができないが、ほぼ同時期と考えて差し支えないだろう。

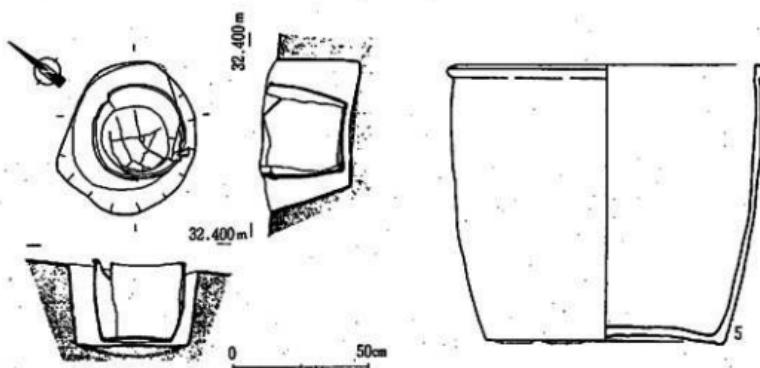
火鉢は破片ではあるが、3個体分出土しており、黒水遺跡と同様に火葬墓群が存在している可能性が高い。黒水遺跡の火葬墓群は調査区の中でも、東端の台地の先端部に位置しており、それより東は段をもって急激に落ちている。これは本遺跡の2次調査区の立地に近く、両者とも集落の営まれる台地の端に墓地を形成していたものと考えられる。したがって、2次調査区の溝は集落か屋敷地を区画するもので、その内部に火葬墓群が存在していたと想定することができる。

ところで、黒水遺跡の火葬墓群の成立背景については、近隣に所在していたとされる近世初頭の城跡に関係しているとの想定が成されている。確かに集落の一般成员の墓地に関しては数が少なく、埋葬方法も火葬であることから、一般民衆ではなく特定集団の墓地と考えられる。おそらく、本遺跡についても同様のことがいえるであろうが、周辺には城跡の存在を示す文献も伝承もない。この時期の一般成员の墓制が明らかでないことや、城が埋没している可能性であることから、今後の資料の増加を待たざるを得ない。

さて、この火鉢は出土例が少ないが、上毛・下毛・宇佐郡を中心に分布しているものと思われ、北九州では異なる型式のものが使用されているようだ。今後、前後を埋める時期の資料が増加すれば、より正確な時期比定も可能になるだろう。今後の調査に期待したい。



第35図 広幡城跡出土土器実測図 (1/6)



第36図 黒水道路5号火葬墓実測図 (1/20)

第37図 黒水道路5号火葬骨蔵器実測図 (1/6)

註

- 1) 本書掲載
- 2) 「一般国道10号線豊前バイパス埋蔵文化財発掘調査報告書第1集 宇野代遺跡」
福岡県教育委員会 1995年
- 3) 本書掲載
- 4) 「国立歴史民俗博物館研究報告第50集」「防長塗抹釉陶器の基礎的研究」 高橋照彦
1993年
- 5) 「椎田バイパス関係埋蔵文化財発掘調査報告—9— 福岡県築上郡椎田町所在広幡城跡の
調査」
福岡県教育委員会 1992年
- 6) 「一般国道10号線行橋バイパス埋蔵文化財発掘調査報告書第2集 金屋遺跡 福岡県行橋
市大字金屋所在遺跡の調査」 福岡県教育委員会 1992年
- 7) 「一般国道10号線中津バイパス埋蔵文化財発掘調査報告書(1)」 大分県教育委員会
1988年

図 版



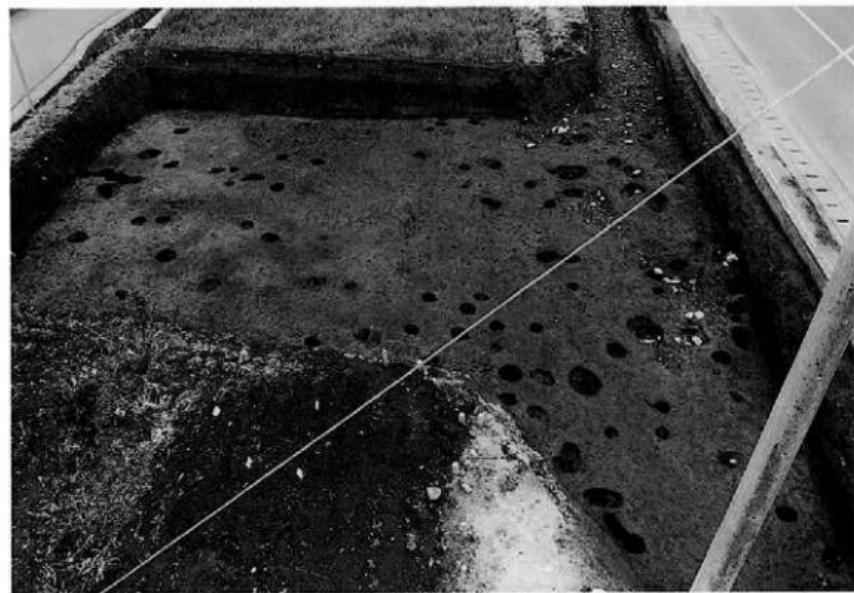
1 大池添・ウツケ畑遺跡から北西を見る（南東上空から）



2 大池添・ウツケ畑遺跡1次調査区全景（南東上空から）



1 大池添道跡北区全景（南から）



2 大池添道跡南区全景（北から）



1 ウツケ畠遺跡1次調査区南側（上空から）



2 ウツケ畠遺跡2次調査区全景（北西から）



1 1号竖穴住居跡全景（東から）



2 2号竖穴住居跡全景（南から）



1 3号堅穴住居跡全景（東から）



2 3号堅穴住居跡カマド（南から）



1 3号竖穴住居跡カマド土層断面（南から）



2 4号竖穴住居跡全景（東から）



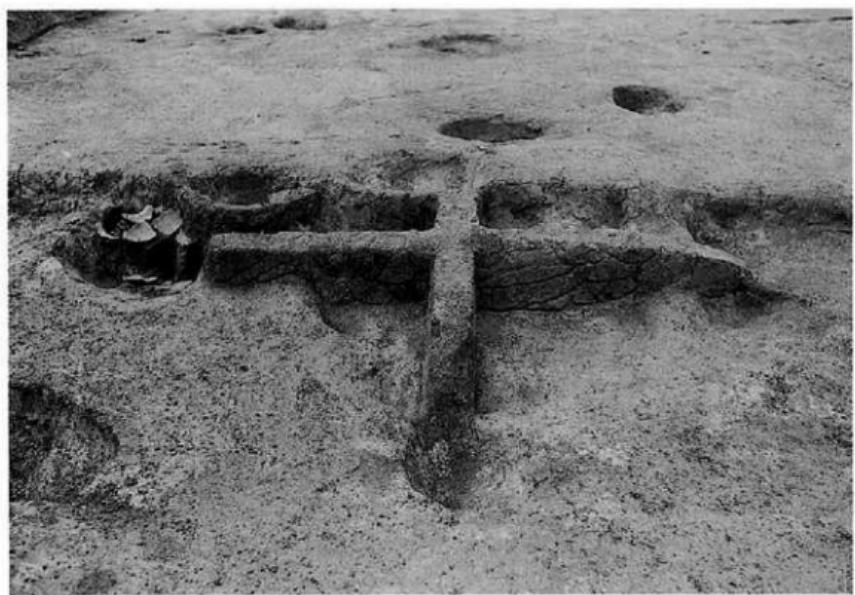
1 6号整穴住居跡全景（南東から）



2 7号整穴住居跡全景（南東から）



1 7号堅穴住居跡カマド（南東から）



2 7号堅穴住居跡カマド土層断面（南東から）



1 8号竖穴住居跡全景（北東から）



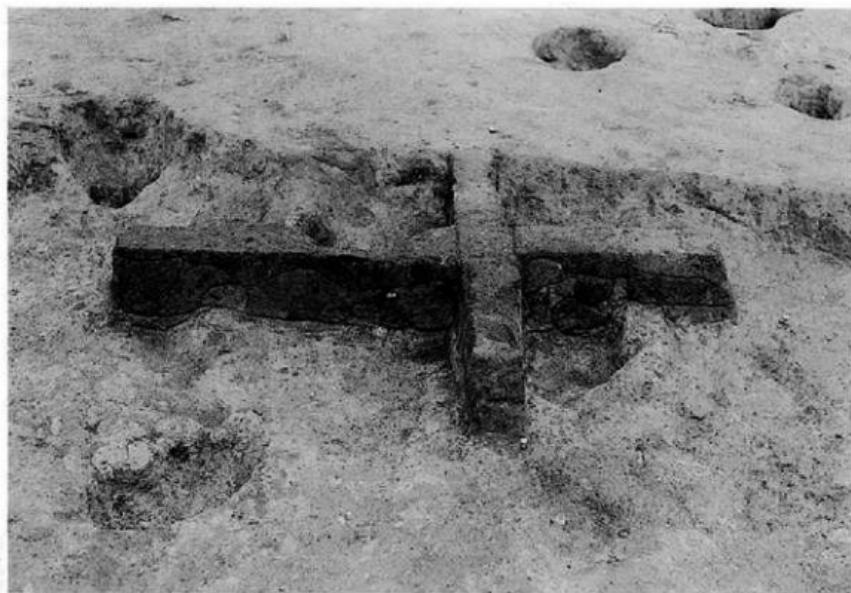
2 9号竖穴住居跡・18号掘立柱建物跡全景（南東から）



1 9号竖穴住居跡カマド土層断面（南東から）



2 10号竖穴住居跡全景（南東から）



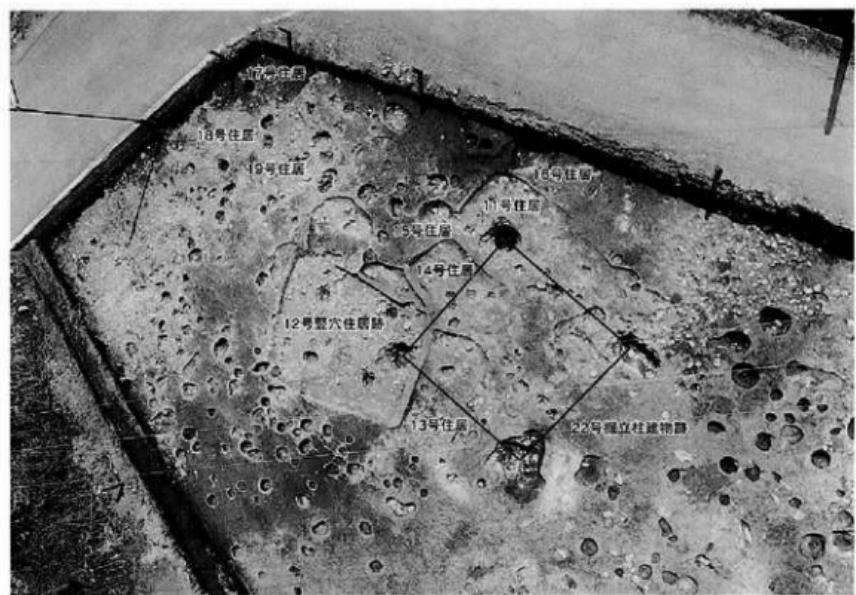
1 10号堅穴住跡カマド土層断面（南東から）



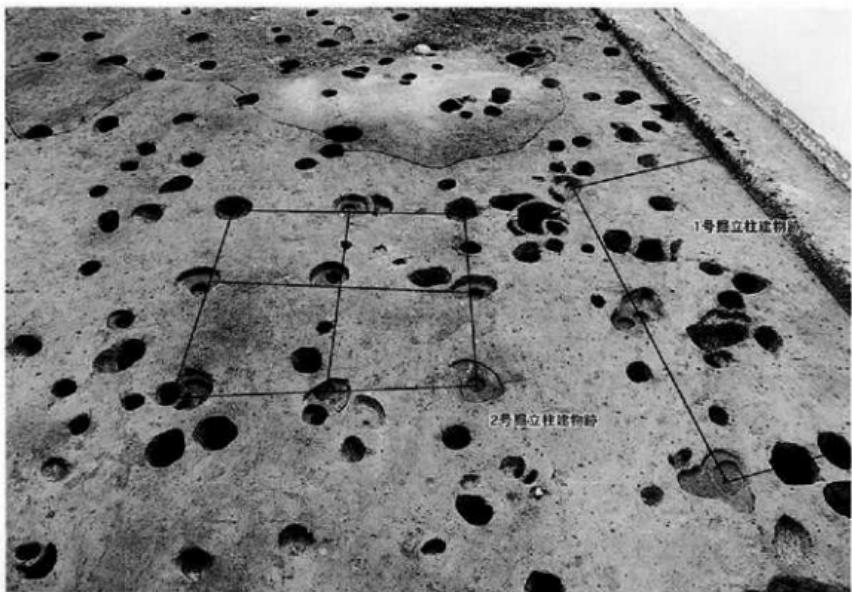
2 11~15号堅穴住跡全景（西から）



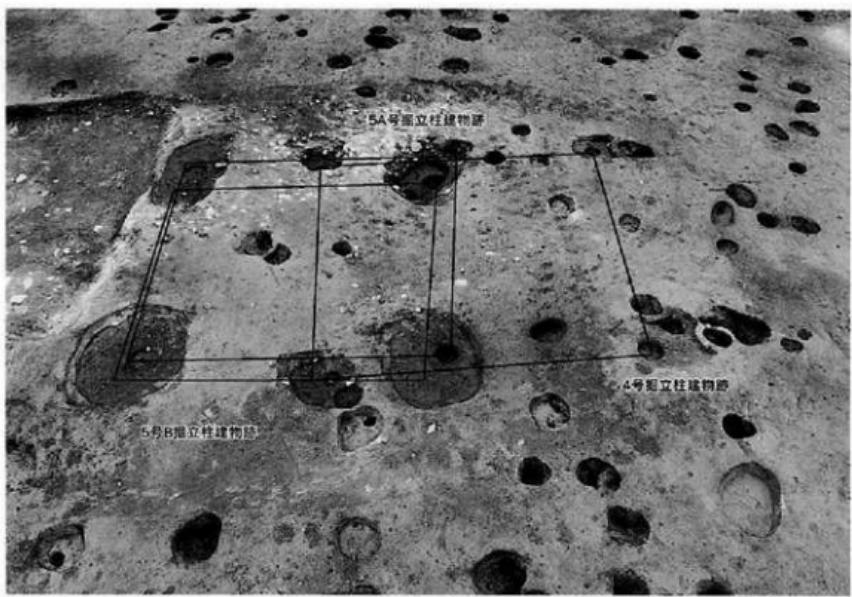
1 9・10号堅穴住居跡・17~20号掘立柱建物跡（上空から）



2 12~19号堅穴住居跡・22号掘立柱建物跡（上空から）



1 1・2号掘立柱建物跡全景（北西から）



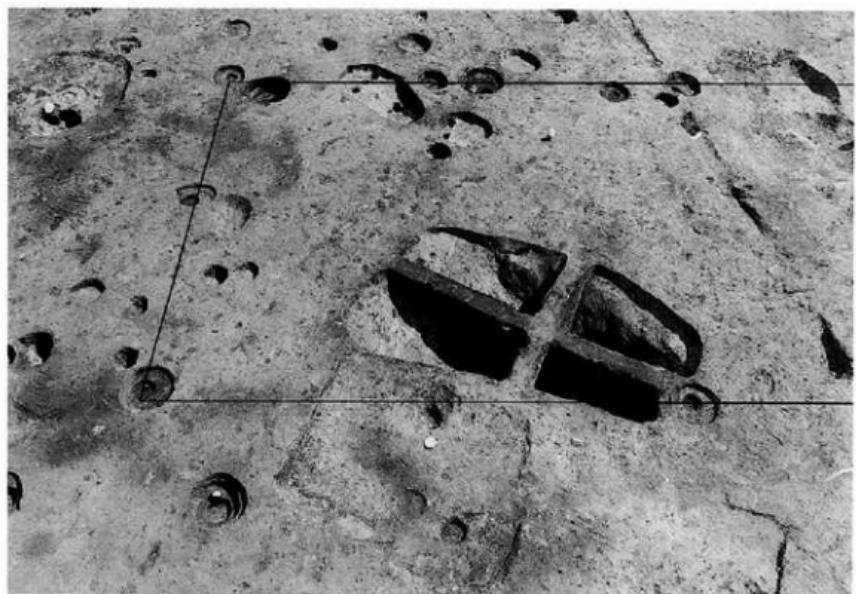
2 4・5号A・B掘立柱建物跡全景（北東から）



1 2号竪穴住居跡・6号掘立柱建物跡全景（北西から）



2 6号掘立柱建物跡柱7 緑釉陶器片出土状態（北西から）



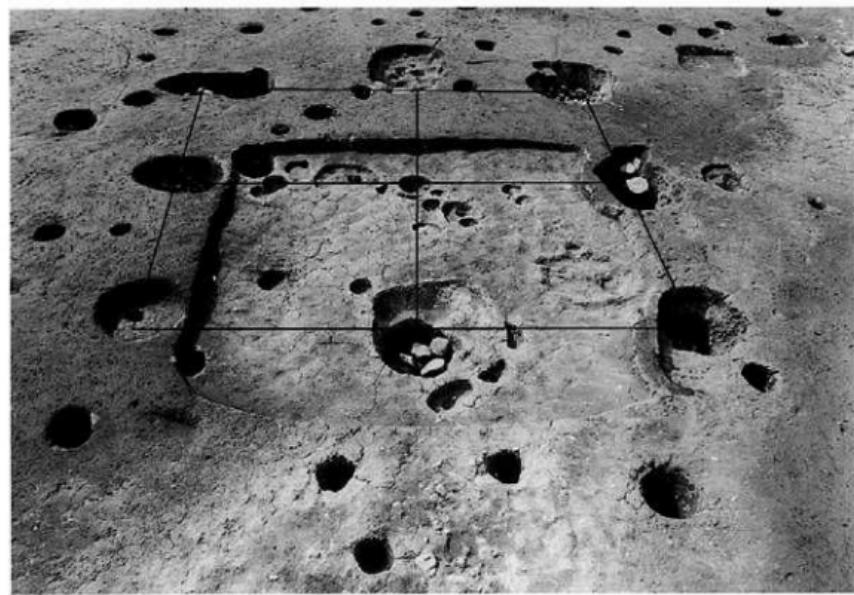
1 7号櫛立柱建物跡全景（北西から）



2 9号櫛立柱建物跡全景（南東から）



1 3号堅穴住居跡・10号掘立柱建物跡全景（東から）



2 11号掘立柱建物跡全景（東から）



1 11号櫛立柱建物跡柱1 (南東かん)



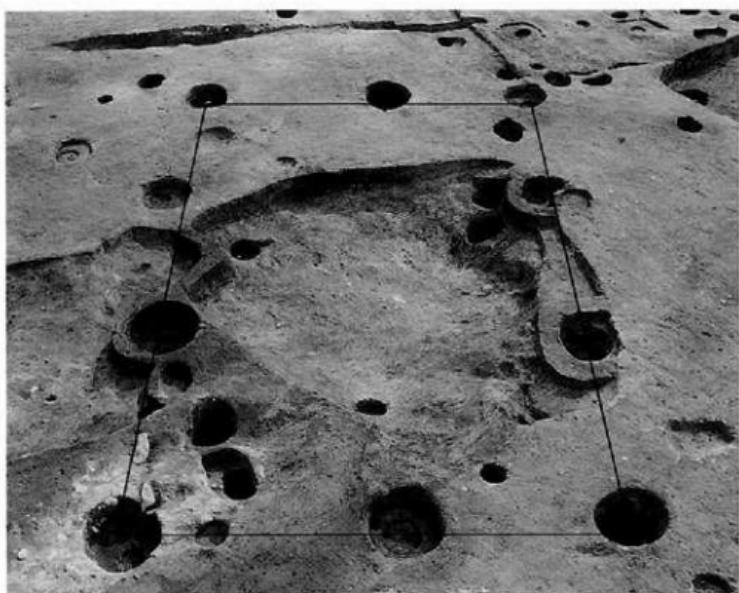
3 11号櫛立柱建物跡柱4 (南東かん)



2 11号櫛立柱建物跡柱6 (南東かん)



4 11号櫛立柱建物跡柱7 (南東かん)



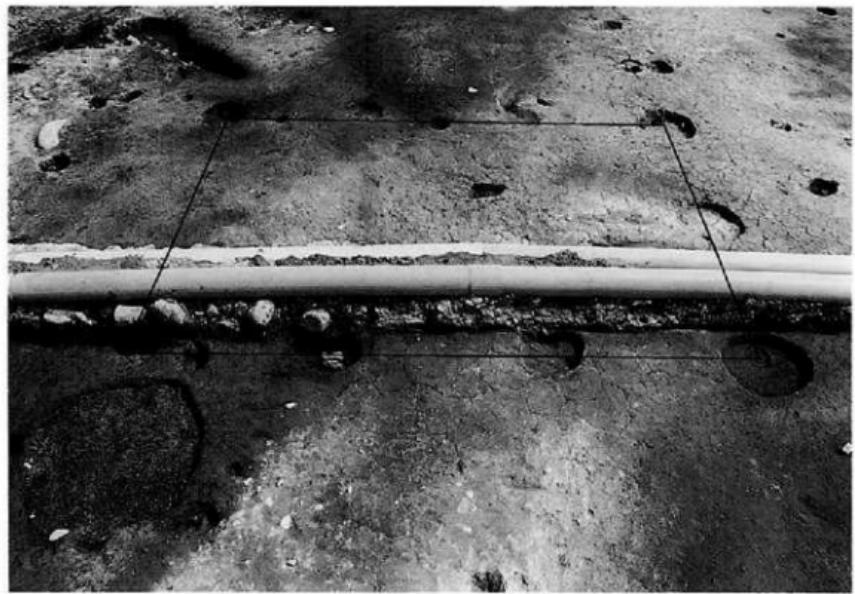
1 12号掘立柱建物跡（北東から）



2 3・4・6・7号壁穴住居跡・13・14号掘立柱建物跡（上空から）



1 15号掘立柱建物跡全景（南西から）



2 16号掘立柱建物跡全景（北西から）



1 17号掘立柱建物跡全貌（南東から）



2 19・20号掘立柱建物跡全貌（南東から）



1 19号掘立柱建物跡柱2（南東から）



2 20号竪穴住居跡・21号掘立柱建物跡全景（北東から）



1 22号掘立柱建物跡（南西から）



2 23号掘立柱建物跡全景（南西から）



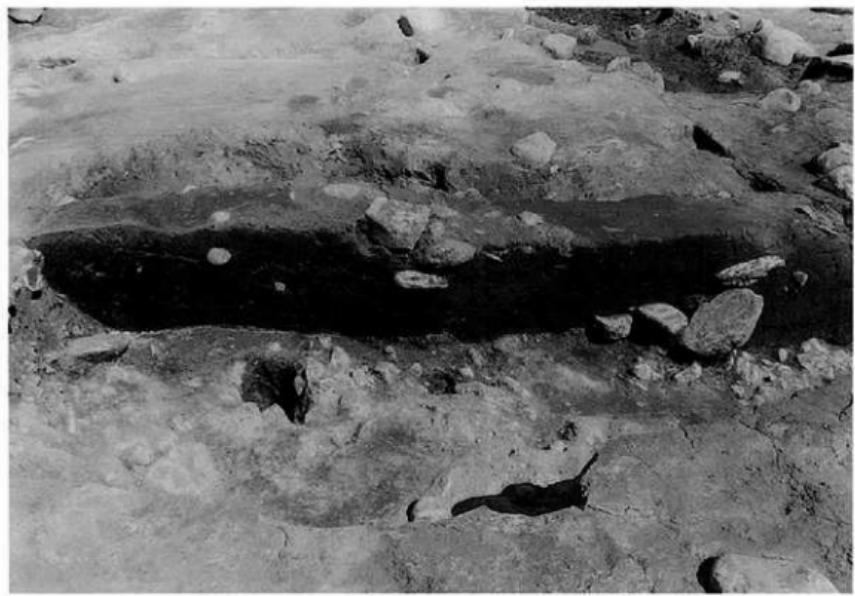
1 23~26号掘立柱建物跡（北東から）



2 23・24号掘立柱建物跡（南西から）



1 瓦質火鉢出土状態（南西から）



2 1号土坑土層断面（北西から）



1 1号溝土層断面・1(北西から)



2 1号溝土層断面・2(北西から)



1 1号溝瓦片出土状態（南から）



2 ピット11 遺物出土状態（北西から）



1 ウツケ畠遺跡2次調査区南壁土層断面（北東から）



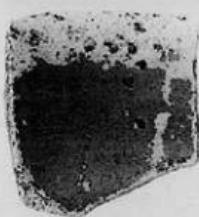
2 ウツケ畠遺跡2次調査作業風景



7住-12



11住-6



6住-1



2次ピット11

摸孔調



ピット72



摸孔調



第30図-1



第30図-3



第30図-5



第30図-6



第29図-2



第29図-3



第29図-6



第30図-2



第26図-1



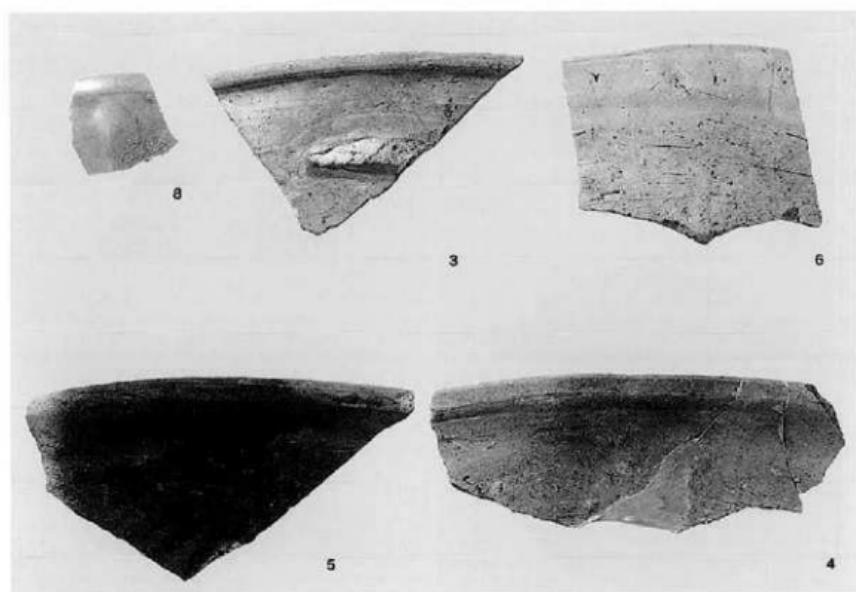
第31図-1



第30図-10



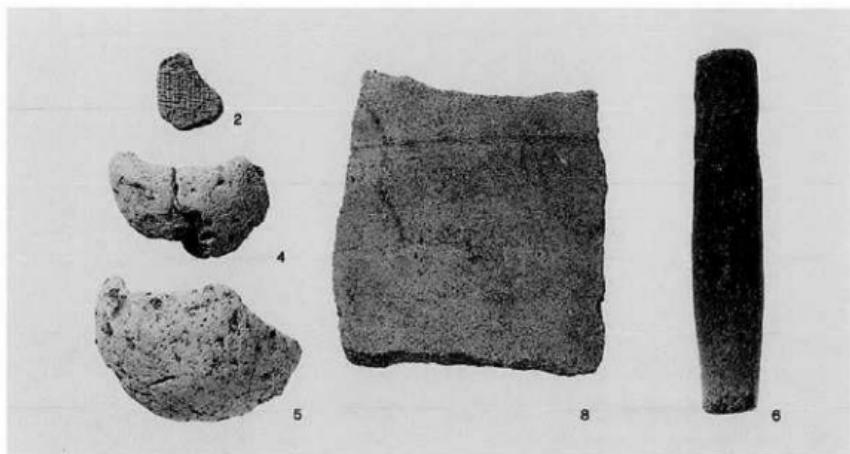
第29図-13



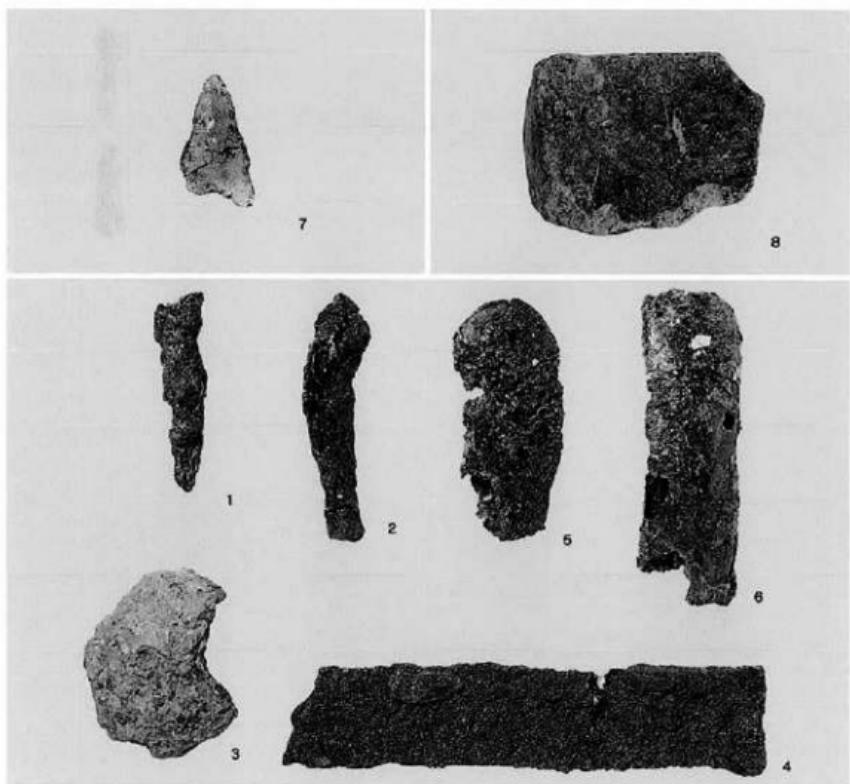
1 1号清出土瓦質土器・青磁片



2 1号清出土軒平瓦片



1 ウツケ畠遺跡出土製塙土器・土錐



2 大池添・ウツケ畠遺跡出土鉄製品・石製器

たけのした
竹ノ下遺跡

1. はじめに

竹ノ下遺跡は篠山郡新吉富村大字垂水字竹ノ下と一部が宇衣袋に位置する。遺跡は友枝川左岸の河岸段丘上に立地し、北西はウツケ畑遺跡に、南東は宇野代遺跡にそれぞれ接する。調査可能な路線用地のうち、現在用水路および農道として使用されている部分を除いて、ほぼ全面の約3,300m²を発掘調査の対象地とした。

平成5年2月1日に重機による表土除去作業を開始し、2月9日に作業員による遺構調査を開始した。遺構を検出し終えたところで3月10日に気球による空中写真撮影を行い、その後掘立柱建物跡の柱掘形の断ち割り調査等を行って3月26日には全ての作業を終了した。

調査作業に従事していただいた方々は以下の通りである。

東 正吉 垂永典生 小川猪佐夫 辻原龍 百束隆利 笠原勝彦 加藤晴彦 末永浩一
桑野早子 三浦ヤスコ 熊谷トシ子 熊谷タツ子 熊谷久子 熊谷房子 木下千代子
垂永一子 小川シゲ子 仲三代子 二木光子 山上キヨ子 黒田トシ子 高木チエ子
久永睦子 秋吉弘子 友松朝子 高橋タケ子 中島ユキ子 高村光子 前田シズヨ
堀ハツミ 筒井サチ子 是石美知子 原田和代 犬塚カツル 木下秀子 横山智保子
友田鈴香 (順不同 敬称略)

2. 遺構と遺物

1) 掘立柱建物跡

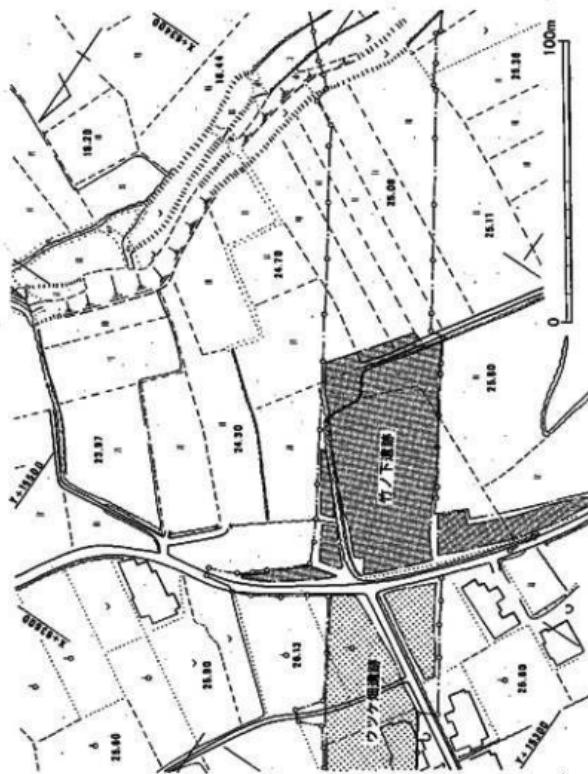
調査区内で合計7棟の掘立柱建物跡を検出した。そのほかにも1×1間の建物になる可能性のある部分が2箇所あるが、ここでは除外した。7棟のうち4棟は総柱建物で、1~3号掘立柱建物跡はやや大雑把ながら並んでいる(図版2、第3図)。

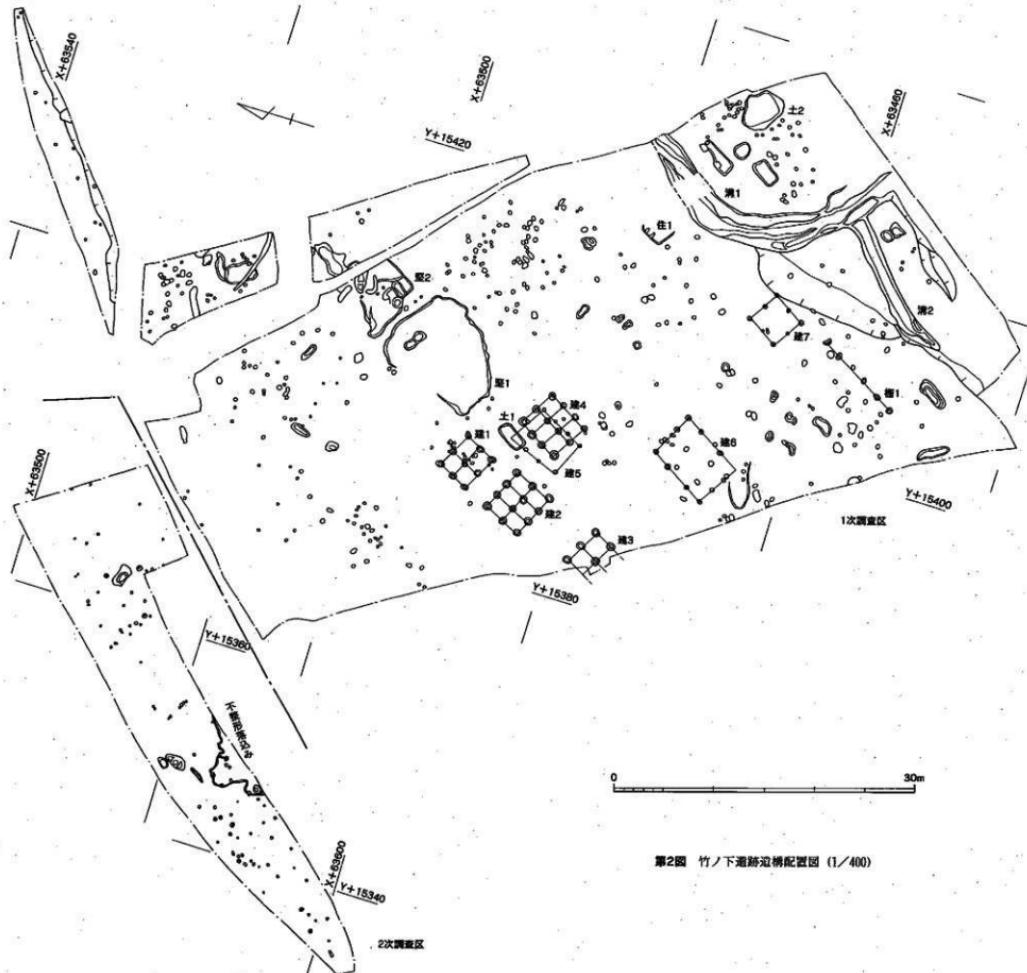
1号掘立柱建物跡(図版2、第4図)

調査区のほぼ中央部の南西寄りの部分で、1~5号の5棟の掘立柱建物跡が密集した状態で検出された。1号掘立柱建物跡はそのなかで最も北側に位置する。

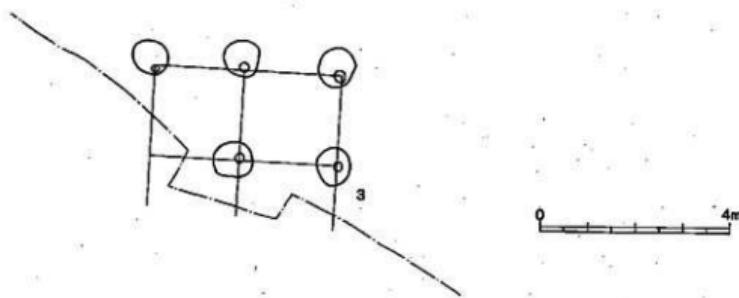
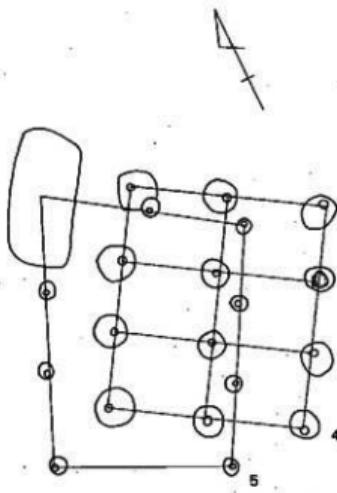
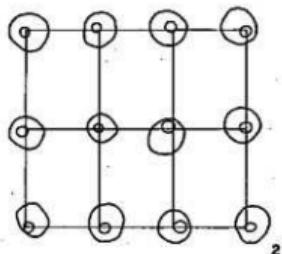
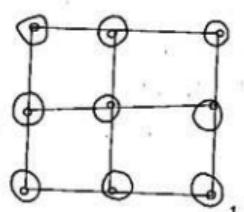
建物は2×2間の総柱建物である。柱掘形はやや歪んだ円形で、直径50~70cm、深さは10~30cmが遺存する。全ての柱掘形で柱の痕跡を確認し、それによると柱の直径は15cm程となる。建物の規模は、柱痕跡の中心で測って北西-南東方向が3.95m、北東-南西方向が3.4mと前者が50cm程長い。2号掘立柱建物跡の方位ともあわせて考えて北西-南東方向を桁方向とすると、柱間は梁行で15~19mとばらつきがある。桁行は全体に南東側の柱間の方が北西側よりも広く、

第14圖 竹ノ下遺跡周辺地形図 (1/1,000)

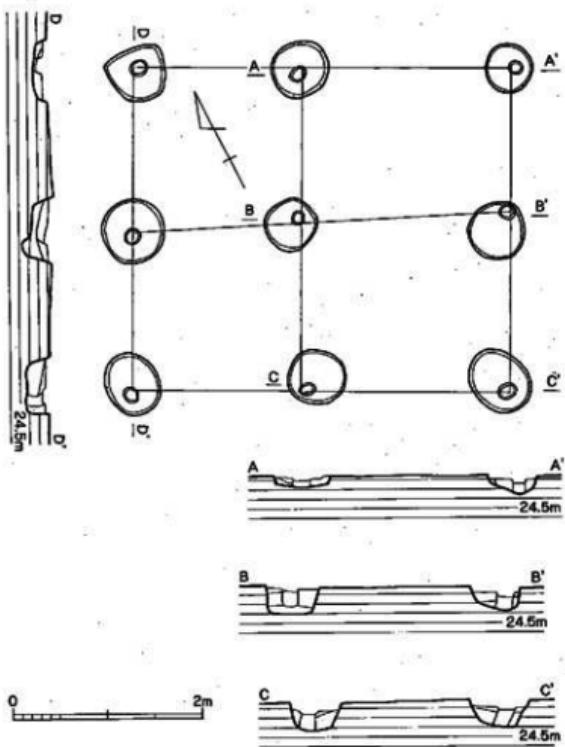




第2図 竹ノ下道路沿構配置図 (1/400)



第3圖 1~5号据建柱建物跡配置図 (1/120)



第4図 1号掘立柱建物跡尖端圖 (1/60)

号掘立柱建物跡よりも規格性が高い。建物の主軸はN-64°-W。

3号掘立柱建物跡 (図版3、第6図)

2号掘立柱建物跡の5.6m南西側にあり、一部は調査区外に延びる。2×2間以上の縦柱建物であろうが、現地では確認し得なかつたものの、1・2号掘立柱建物跡が北西側の柱列の柱筋が通ることを考えると、3号掘立柱建物跡も更に北西側に1間延びて3×2間以上の建物で、3棟の建物の柱筋が通っていた可能性も高いものと思われる。柱頭形は正んだ円形で直径70~80cm、深さ15~40cm、柱痕跡からみた柱直径は20cm程である。一応北西-南東方向を桁方向とする。梁行は19m、桁行は20m等間である。主軸はN-61°-W。

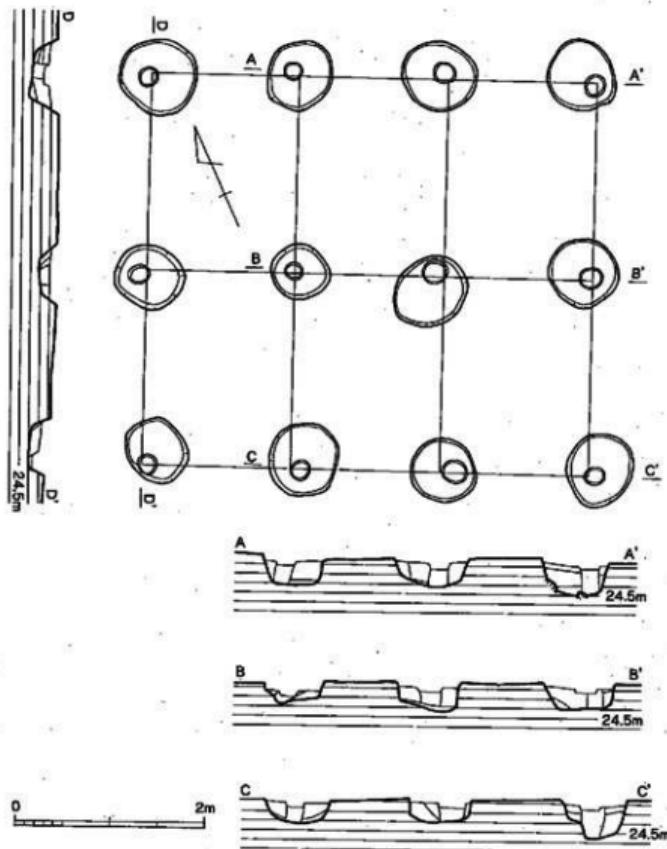
南東側が2.1~2.3m、北西側が1.7~1.9mとなる。建物の主軸はN-63°-W。

2号掘立柱建物跡 (図版3、第5図)

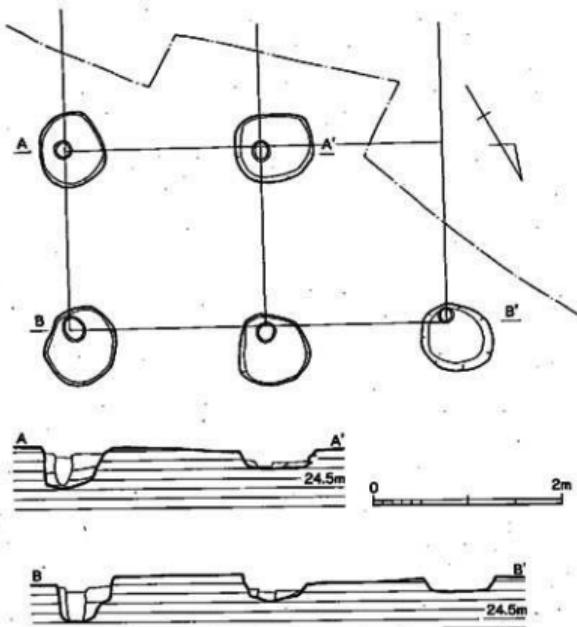
1号掘立柱建物跡の2.8m南西側にある2×3間の縦柱建物で、1号掘立柱建物跡とは北西側の柱筋が通る。柱頭形はやはりやや正んだ円形で、直径60~80cm、深さは20~40cmが遺存する。また、柱痕跡によると柱の直径は20~25cmで1号掘立柱建物跡よりもやや太い。建物の規模は4.1m×4.7mで、柱間は梁行が2.1m等間、桁行は1.5~1.6のほぼ等間と、1

4号掘立柱建物跡 (図版4、第7図)

1・2号掘立柱建物跡の南東側に位置し、5号掘立柱建物跡に切られる。2号掘立柱建物跡との距離は35mで、 2×3 間の総柱建物である。4号掘立柱建物跡にだけ磁盤が使用されていること、柱頭形の埋土が1~3号掘立柱建物跡のものより黒味が強いこと、さらに建物の方位が他の3棟とは若干ずれて桁方向も違っていることから、4号掘立柱建物跡は時期が違うものと考えられる。柱頭形はやはりやや亞んだ円形で、直径も50~85cmと不揃いである。深さは10~40cmが



第5図 2号掘立柱建物跡実測図 (1/60)



第6図 3号掘立柱建物跡実測図 (1/60)

遺存し、柱痕跡をみると柱の直径は15~20cmとなる。礎盤が使用されていることは先述のとおりであるが、全ての柱掘形にあるわけではなく、側柱のうちの4箇所で確認した。礎盤は20~30cmで厚さ5~10cmの扁平な自然石を使用しており、3箇所では小石を詰めて安定を図っている。建物の規模は4.1×4.7mで、柱間は梁行が2.0~2.2m、桁行が1.5~1.6mで、梁行が長い。建物の主軸はN-32°E。

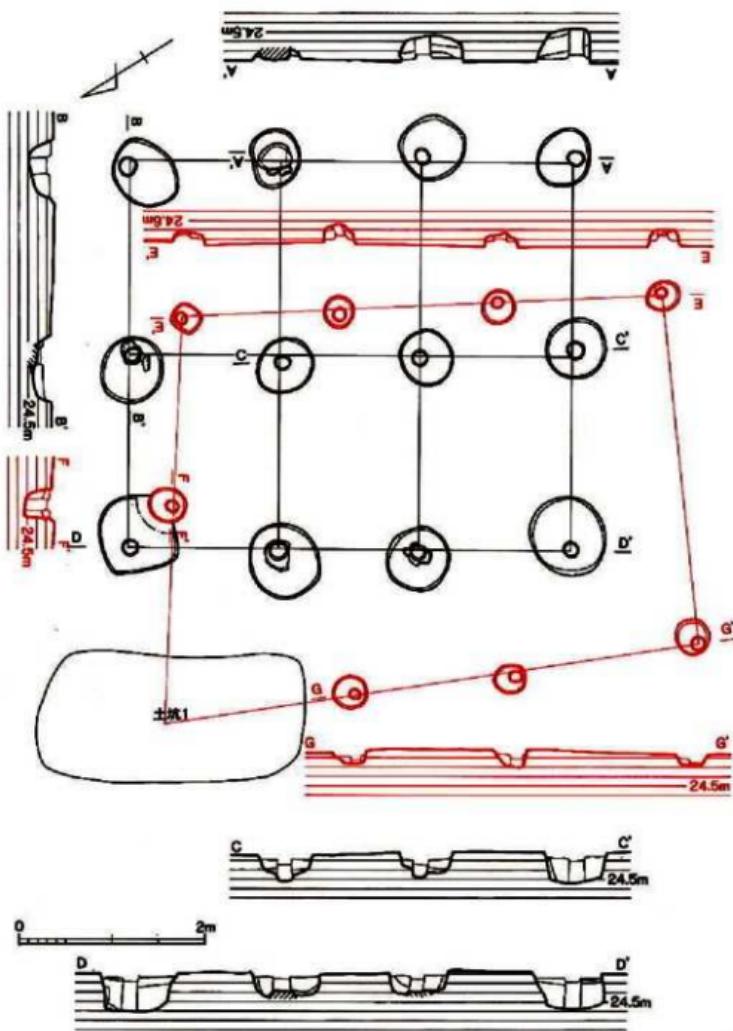
出土遺物

土師器（第13図）

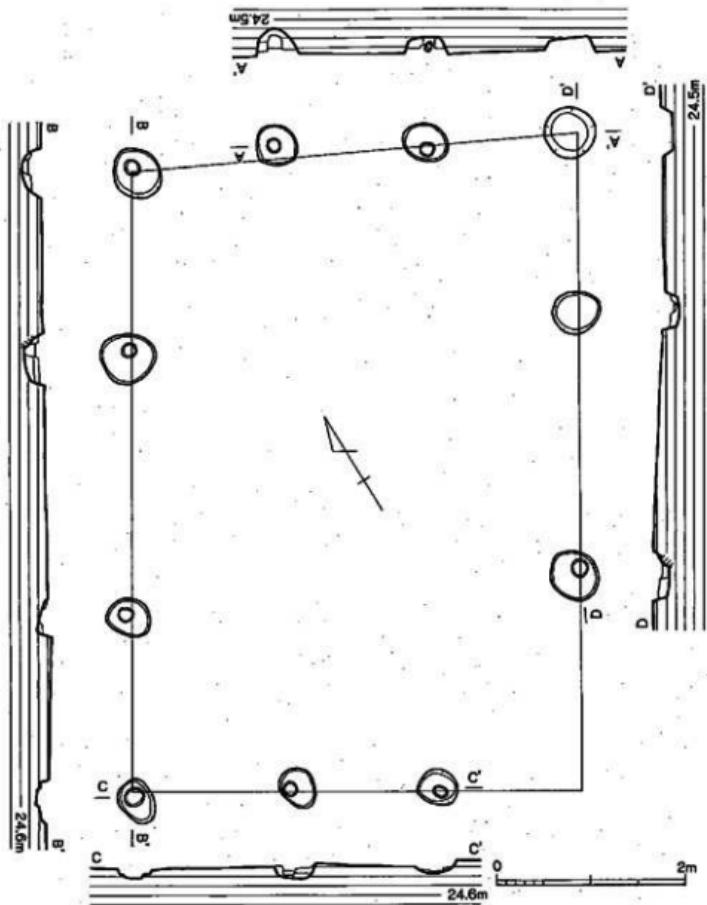
杯（6・7）いずれも細片である。6は口縁部で、薄く仕上げる。7は底部で、外面はヘラ切り。

5号掘立柱建物跡（図版4、第7図）

4号掘立柱建物跡・1号土坑と重複して検出した。切り合い関係は、4号掘立柱建物跡を切って、1号土坑に切られる。建物は梁行2間、桁行3間の規模だが、北隅の柱穴は1号土坑に切られて、南西梁の中央の柱穴は削平のためにそれぞれ失われている。柱掘形は径30~40cmの円形で、深さ10~30cmが遺存する。柱痕跡をみると、柱の直径は10~15cmとなる。柱間は桁行がほぼ1.7m等間だが、西側の1間分だけ1.9mある。梁行は2箇所の柱穴が失われているため計測が困難であるが、南西側は2間分で3.7m、北東側は計測できる1間は2.0m、他の柱穴を延長して北隅の



第7圖 4·5號柱立柱建物跡測圖 (1/60)



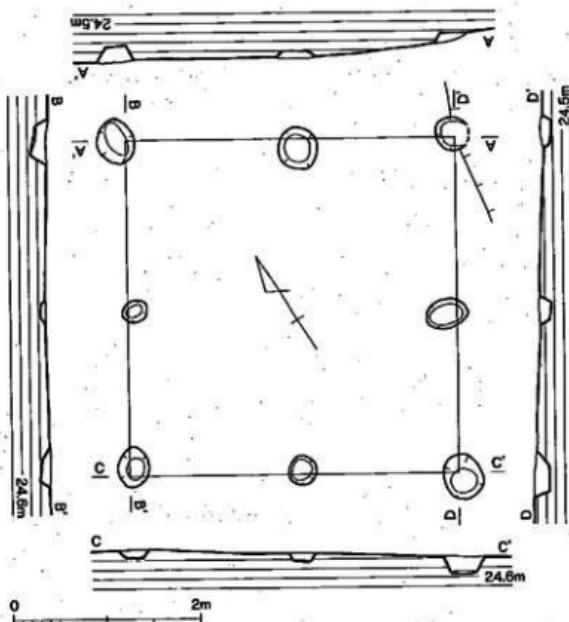
第8図 6号掘立柱建物跡実測図 (1/60)

柱穴を復元すると
2間分で4.3mとな
り、北東側の梁行
が60cm程長いや
やいびつな建物で
ある。主軸はN-28°
-E。

出土遺物

土師器(第13図)

杯(8)底部の
破片である。底部
はヘラ切りで、体
部内外面はヨコナ
ア調整、底部内面
はヨコナアの後ナ
ア調整。



第9図 7号掘立柱建物跡実測図 (1/60)

6号掘立柱建物跡 (図版5、第8図)

1~5号掘立柱建物跡の一群から南東にやや離れた位置に建ち、3号掘立柱建物跡から測ると
南東側9.7mの距離にある。建物は3×3間で、柱掘形は南隅の1箇所は削平され失われているが、
径35~50cmの不整円形の平面形で、深さ10~30cmが遺存する。確認した柱痕跡をみると柱の
直径は15cm内外であろう。建物の規模は4.8×6.7mで、柱間は梁行がほぼ1.6m等間で、桁行は
両側の柱間が1.9mだが中央は2.8mと広くなる。主軸はN-32°-E。

7号掘立柱建物跡 (図版5、第9図)

6号掘立柱建物跡からさらに11m南東側にある。現在地形はこの7号掘立柱建物跡を境にして
東側が70cm程低くなっている。建物は2×2間で、柱掘形は径20~45cmでばらつきがある。柱
痕跡は検出し得なかった。柱間は梁行・桁行の区別がなく1.75m等間で、3.5×3.5mの正方形の
建物である。主軸はN-32°-E (N-58°-W)。

出土遺物

須恵器（第13図）

平瓶（3）平瓶等の口頸部であろう。内外面を回転ヨコナア調整で仕上げ、外面中央部に1条の沈線を巡らす。

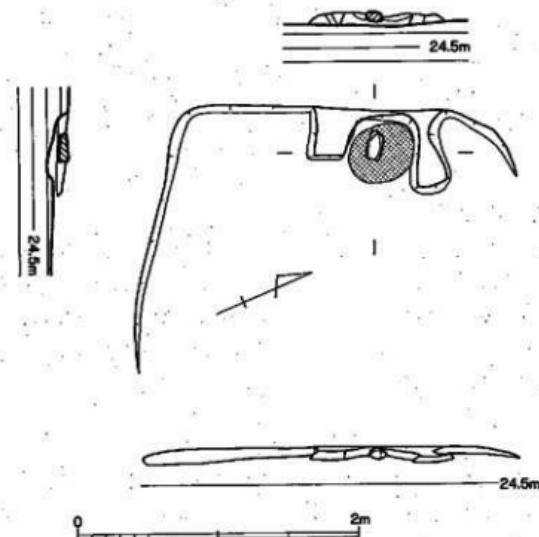
土師器（第13図）

杯（9）口縁部破片である。器壁は薄く、内面に回転ヘラミガキ調整を施す。

2) 棚状遺構

1号棚状遺構（第2図）

7号掘立柱建物跡の南東側で棚状の柱穴列を5間分検出した。柱穴は径40～80cm、深さ15～25cmの不整形で、1.8m等間。7号掘立柱建物とは3.2m離れているが主軸の方向が描い、位置的にも両者は関連がある可能性も考えられる。主軸はN-30°-E。



第10図 1号整穴住居跡実測図 (1/40)

3) 壁穴住居跡

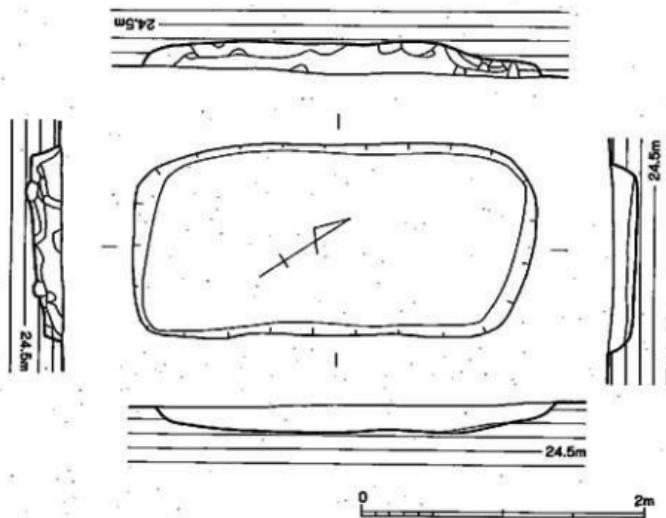
1号壁穴住居跡（図版14、第10回）

調査区南東寄りで壁穴住居跡を1軒検出した。住居跡は東側の半分以上は削平のため既に失われており、西側部分でわずかに高さ5cm程の壁を半うじて確認した。住居の北西辺の壁にはカマドを付設しており、カマドの中央部から住居の南西コーナーまでの距離は1.4mある。カマドは住居壁に直接貼付けており、壁体の両側の袖部は長さ60cm、幅30cm、厚さ5cm程が遺存する。カマド内は40~50cmの範囲が火床として土が橙色に焼けており、支脚として使用されたと考えられる自然石1個が倒れていた。

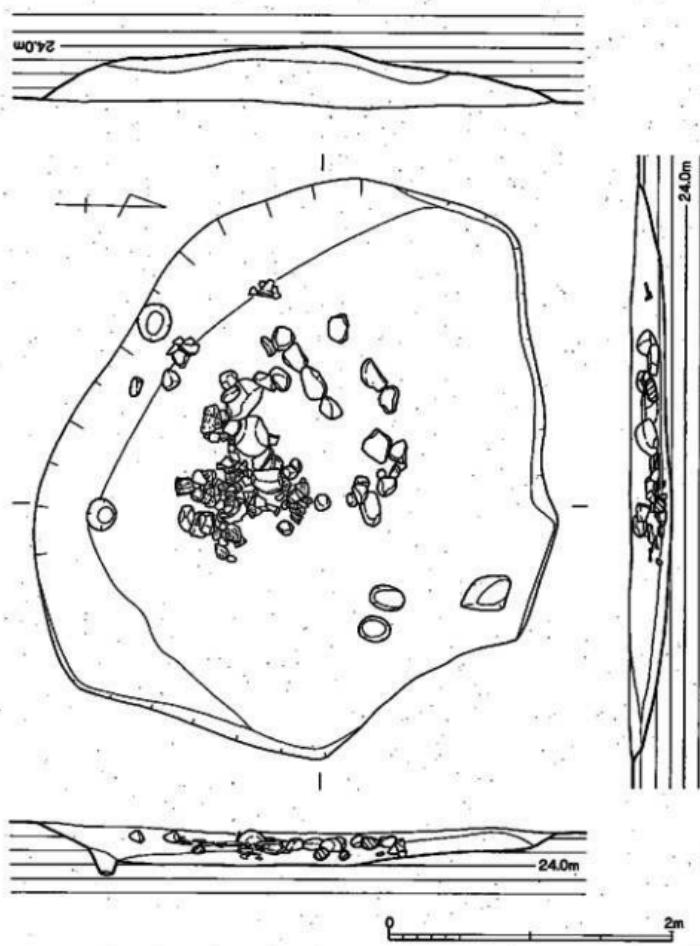
出土遺物

須恵器（第13回）

杯（1）カマド内埋土から出土した。たちあがりは受部より短い。底部外面は回転ヘラ削り調整。復元口径11.0cm、受部径12.6cm、器高3.0cm。



第11図 1号土坑実測図 (1/40)



第12圖 2号土坑尖測圖 (1/40)

4) 土坑

1号土坑（図版15、第11図）

1・2・4号掘立柱建物跡の間、5号掘立柱建物跡と切り合って検出された。5号掘立柱建物跡を切る。上縁で長さ285cm、幅135cm、深さ最大20cmの隅丸長方形の土坑。遺物の出土はない。

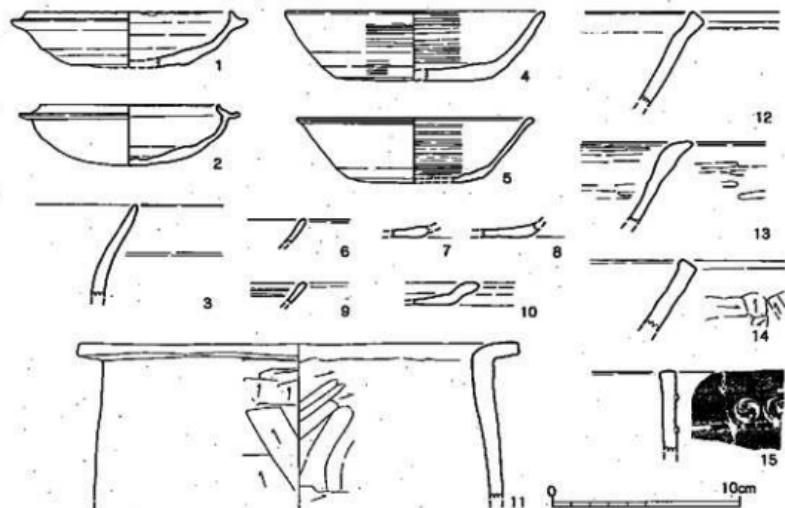
2号土坑（図版15、第12図）

調査区東隅にある。長さ445cm、幅350cmの不整形の土坑で、深さ最大40cmでなだらかに立ち上がる。埋土中から多数の自然石河原石に混じって須恵器が出土した。

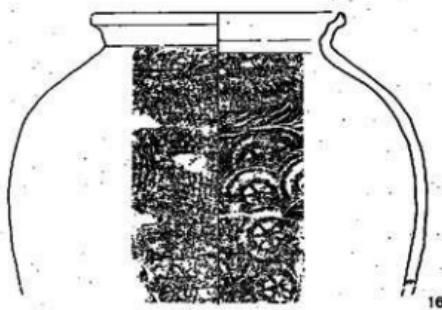
出土遺物

須恵器（図版16、第14図）

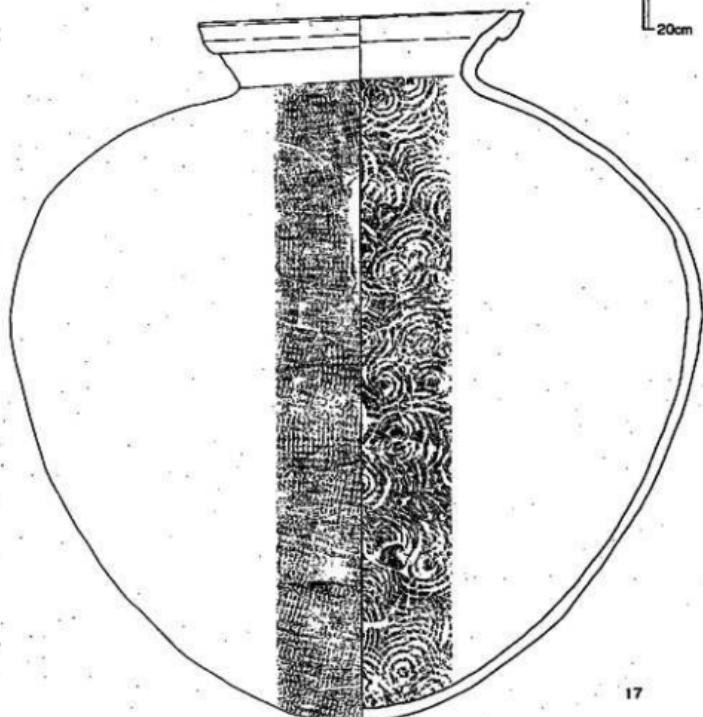
壺（16・17）16は肩部の最大径が上半にあり、口頭部は短く開き端部を上に挿み上げる。肩部内面には車輪形の当具痕が青海波状に、外面は平行叩き文が残る。復元口径182cm、肩部最大径29.8cm。焼成が悪く、器壁が脆いため表面が風化している。17は大形の壺。肩部の最大径はやはり上位にあり、やや肩の張った器形をしている。頸部は比較的小さくしまり、口頭部は短く開き、口縁部は外側を肥厚させる。肩部内面は同心円形の当具痕による青海波文、外面は平行叩き文。口径232cm、器高50.8cm、肩部最大径49.0cm。



第13図 出土土器実測図① (1/3)

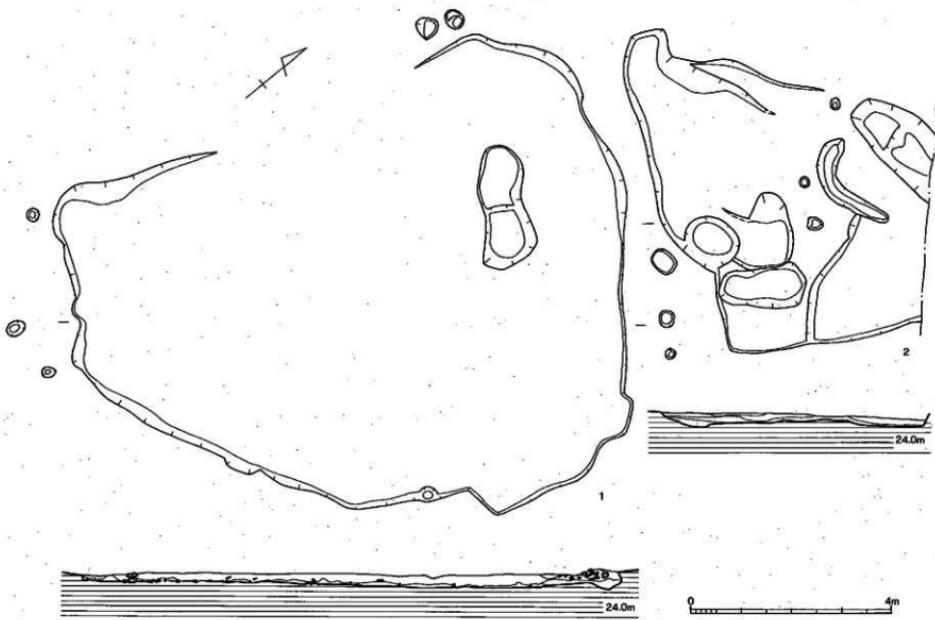


16



17

第14圖 出土土器実測図② (1/4)



第15図 1・2号竪穴状遺構断面図 (1/80)

5) 壊穴状遺構

1・4・5号掘立柱建物跡の北東に隣接して、2基の性格不明な壊穴状遺構を検出した。2基の遺構は幅1~2mの間隔で接する。遺構の形状からみて、間の部分を陸橋状の施設と考えて本来一つのものであった可能性が高いと考えられる。

1号壊穴状遺構（第15図）

2基の壊穴状遺構のうちで南西側にある。長さ11.4m、最大幅9.5mの不整形で、深さは20~30cm。床面は10cm前後の高低差はあるものの、ほぼ平らである。床面の北寄りの部分に長さ245cm、幅100cm程の土坑状の掘り込みがあるが、壊穴状遺構との関連は不明。

出土遺物

土師器（図版16、第13図）

杯（4）体部はわずかに内湾して立ち上がる。内外面に回転ヘラミガキ調整を施す。口径13.7cm、器高3.7cm。

皿（10）低く短い口縁部が外反して開く。

甕（11）口縁部は脣部から直角に屈曲して開き、端部を四角くする。脣部外面は縱方向へのラケズリ、内面は横方向へのラケズリの後縦から斜め方向の粗いミガキを施す。

2号壊穴状遺構（第15図）

1号壊穴状遺構の北東側に1~2mの間隔を開けて隣り合う。遺構の北東側の一部は現在の用水路のための未調査部分にかかり、1m先の調査区では検出されなかつた。このため遺構は長さ6.2m以上7.2m未満、最大幅5.8m、深さは10~20cmとなる。床面は1号壊穴状遺構と比べて凹凸が激しい。

6) 溝状遺構

1号溝状遺構（第2図）

調査区の南東隅部に位置し、溝の両端は調査区外に続く。溝は幅2.0~3.3m、深さ20~50cmで、溝底は水の流れのために複雑な形状を呈する。調査区内で約30m分を確認し、南東側の調査区境から脛を描いて北に延びる。遺構を検出した段階では、2号土坑との位置関係から石室と周溝かと考えたが、出土した遺物の示す溝の年代は中世のものであつた。

出土遺物

瓦質土器（図版16、第13図）

鉢（12・13・15）いずれも破片である。12は口縁部内面に稜をもち、体部と口縁部を分ける。体部外面はヘラケズリ調整、その他はヨコナナデ調整で仕上げる。13は口縁部をわずかに外反させて先端を尖らせる。内外面にミガキの痕跡が残る。15は外面口縁部下に2条の突帯を貼付し、その間に三つ巴文を押印する。15は土師質に焼けている。

瓦（図版16、第16図）

平瓦（3）凹面には布目、凸面には格子目叩き文が残る。

2号溝状遺構（第2図）

調査区南東端部にあり、南西から北東方向に延びて、北東端で1号溝状遺構に接続して流れ込む。幅1.5~1.8m、深さ約20cmで、長さ約15m分を確認した。

出土遺物

瓦質土器（第13図）

鉢（14）口縁端部を四角く仕上げる。体部外面はヘラケズリ調整。

瓦（図版16、第16図）

平瓦（1・2）2点とも凹面には布目、凸面には網目叩き文が残る。

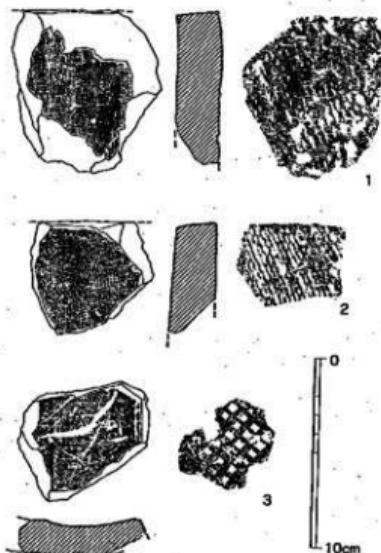
7) その他出土の遺物

須恵器（第13図）

杯（2）たちあがりは内傾し、端部を上方に擗み上げる。焼成が悪く土師質に焼ける。

土師器（図版16、第13図）

杯（5）1号溝状遺構周辺の小穴から出土した。器壁は薄く、口縁部をわずかに外反させる。底部はヘラ切りで、板状圧痕が残る。内面には回転ヘラミガキを施す。



第16図 出土瓦質土器（1/3）

3. おわりに

竹ノ下遺跡では7棟の掘立柱建物跡と1条の柵状造構を検出した。柱頭形から出土した土器はいずれも細片だが、器形や調整、胎土の状態などからほぼ8世紀の中におさまるものと考えられる。

7棟の掘立柱建物跡は主軸の方位から概ね二つのグループに分けることができる。1~3号掘立柱建物跡は建物の主軸がN-61°-W~N-64°-Wで3°程の相違があるが、柱間のズレ等を考えれば誤差の範囲内としてよいであろう。また、5号掘立柱建物跡は主軸の向きが違うが、梁の方向ではN-52°-Wとなるので、このグループに入れておきたい。一方の4・6・7号掘立柱建物跡はN-32°-Eで揃っている。N-30°-Eの1号柵状造構もこれに入れてよかろう。4・5号掘立柱建物跡の切り合い関係から二つのグループは、4・6・7号掘立柱建物跡-1・2・3・5号掘立柱建物跡の二時期に一応位置付けることができる。

2号掘立柱建物跡と4号掘立柱建物跡は、ともに2×3間で41×47mの規模であることから、同種の建物の建て替えと考えて差し支えなかろう。立て替えに際して北に移動するのと同時に、建物（倉庫）の数が増えていることは興味深い。

さて、これらの建物跡の性格であるが、複数の純柱建物を伴うなど一般の集落のものとしては立派すぎるが、かといって官衙的なものとするには5~7号掘立柱建物跡等はいかにも頼りない。建物の配置に規則性がないことも否定的な要素であろう。建物群は南西方向の調査区外にさらに延びているものと考えられ、1・2号竪穴状造構も含めて何らかの施設の一部であろうが、遺構の範囲も確定しない現段階では推測は控えておきたい。

古期と新期に分けた二つの建物群の主軸の方位は桁・梁にこだわらなければ、N-58°-E~N-64°-Eで6°の誤差で収まり、大体では揃っているといつてよい。一方、竹ノ下遺跡から直線距離で約1kmの位置にある垂水庵寺は早くから著名な遺跡であるが、調査の結果推定される寺跡の主軸はN-56°-Wとこれに近似する数値を示す。また、最近調査されて上毛部衙に比定されている大ノ瀬五反田遺跡でもほぼ同様の主軸を取る。両者はともに脇を通る官道にその方位を規制されたと考えられているが、官道からはやや奥まった位置にある竹ノ下遺跡の範囲にも、官道の方向を基準にした条理等の計画線が及んでいたものと考えられる。

2次調査

1. はじめに

2次調査区は調査区北西端に位置しており、調査前は水田であり、遺構面が現表土から浅い位置で検出されたことから、かなり削平されたと思われる。遺構は多数のピットと不定形の凹みが検出されたのみで、明確な遺構は検出されなかつた。

西側の段丘上のウツケ畠遺跡との比高差は約2mあり、本来の地形も急斜面であつただろうが、それを垂直に切つてるので遺構はほとんど残らないであろう。

2. 遺 物

出土遺物

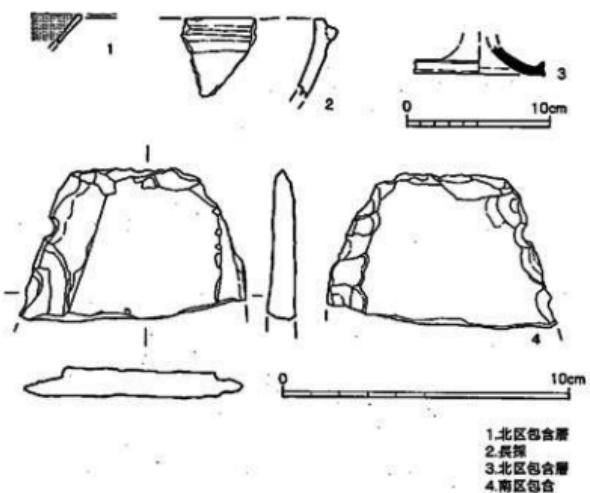
包含層中や不定形の凹みの中からわずかな土器と石器が出土した。いずれも小片で実測に耐えるもののみ掲載する。

土器 (第17図)

1は黒色土器の椀の口縁部片、2は甕の口縁部で、弥生前期から中期のものであろう。2次焼成を受けて赤片している。3は須恵器の高杯脚部。

石器 (第17図4)

打製石斧の基部で、安山岩質の石材と思われる。



第17図 2次調査出土遺物 (1/2・1/4)

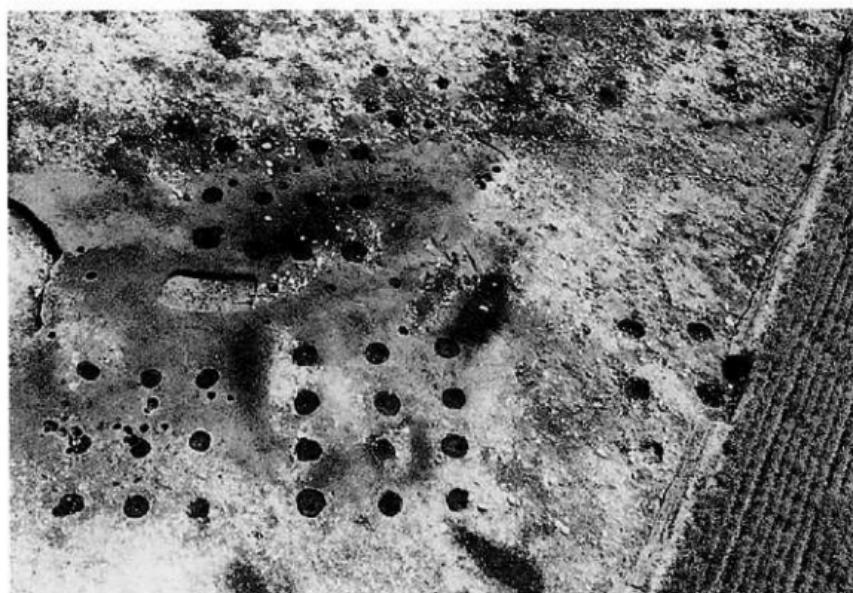
図 版



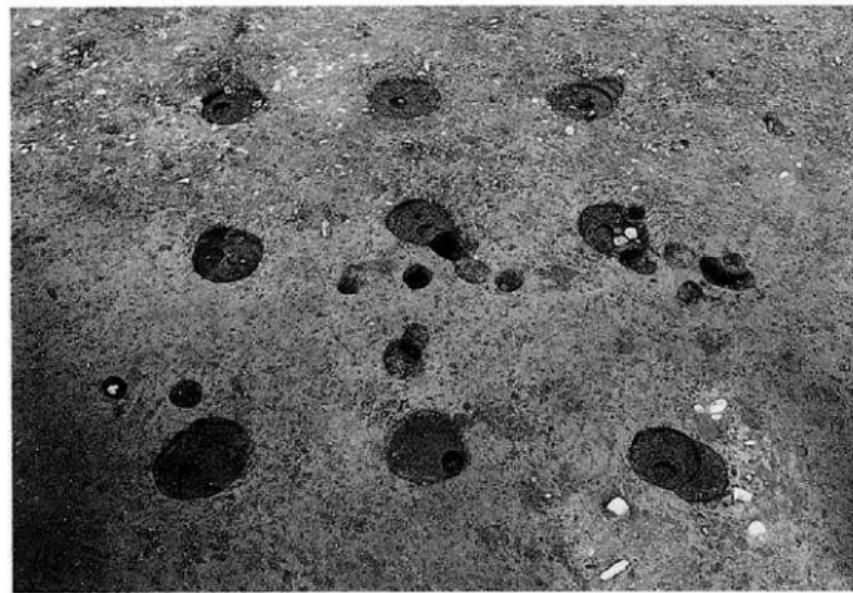
1 竹ノ下道路と豊前バイパス路線（北西から 空中写真）



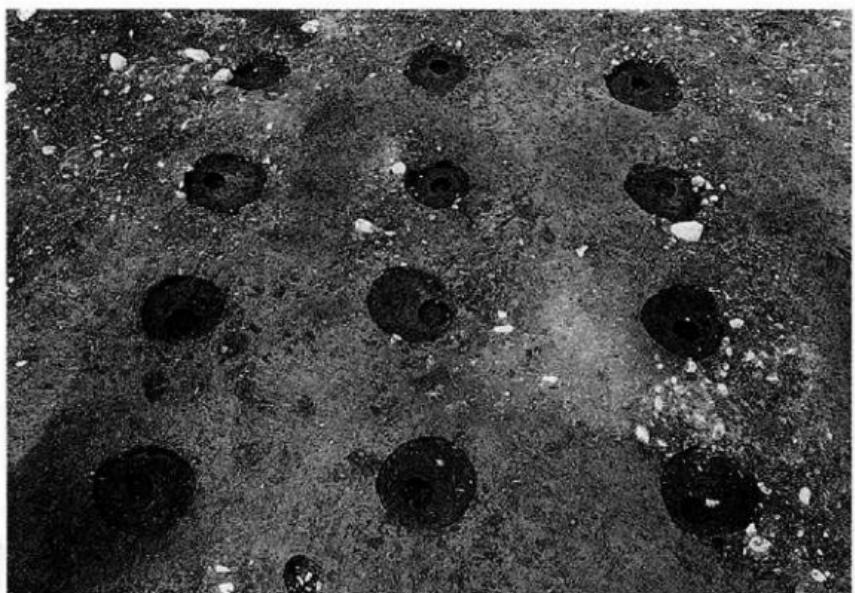
2 竹ノ下道路全景（南西から 空中写真）



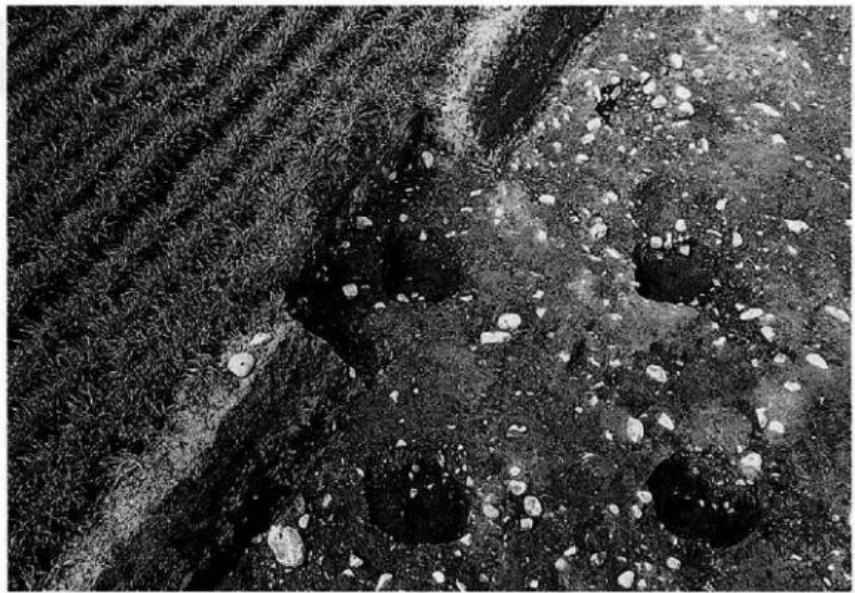
1 1~5号掘立柱建物跡（北西から 空中写真）



2 1号掘立柱建物跡（南東から）



1 2号掘立柱建物跡（南東から）



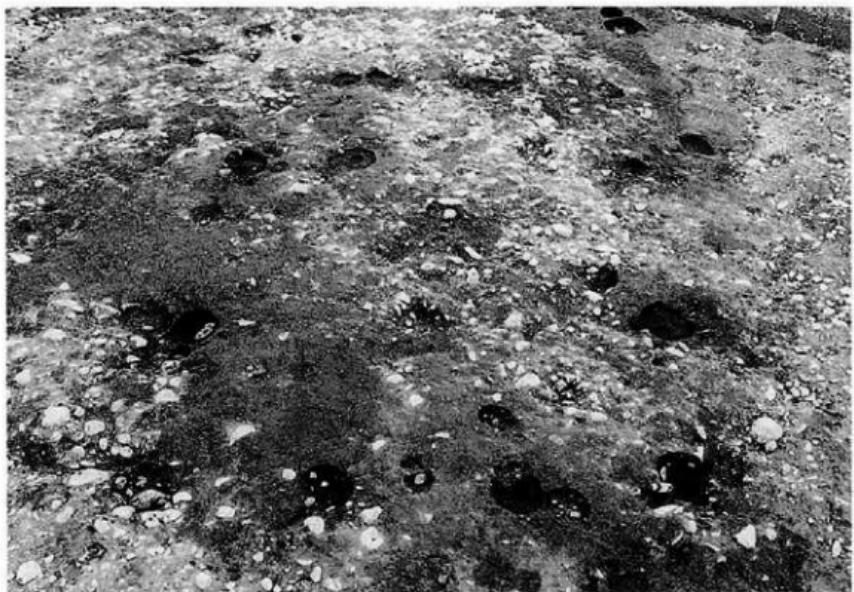
2 3号掘立柱建物跡（南東から）



1 4・5号掘立柱建物跡（発掘前 北東から）



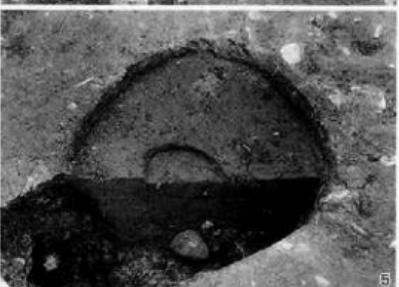
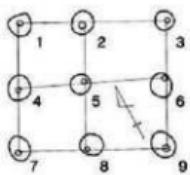
2 4・5号掘立柱建物跡（北東から）



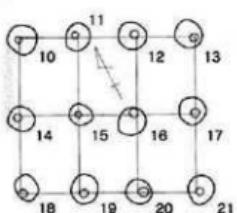
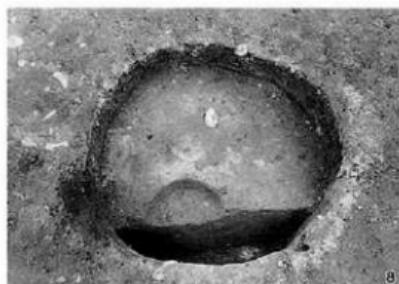
1 6号柱立柱建物跡（北東から）



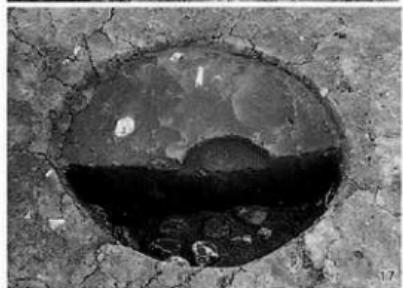
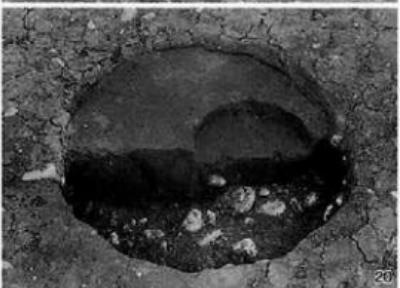
2 7号柱立柱建物跡（南東から）



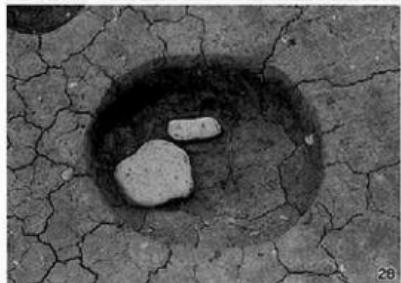
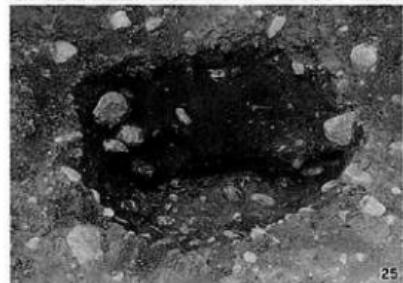
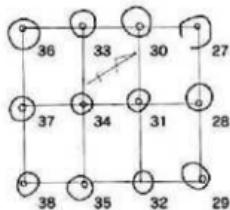
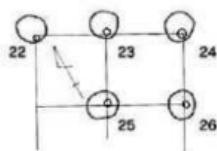
1号縄立柱建物跡柱撮影



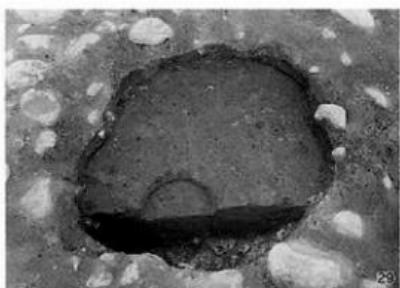
1・2号掘立柱建物跡柱掘形



2号掘立柱建物跡柱掘形



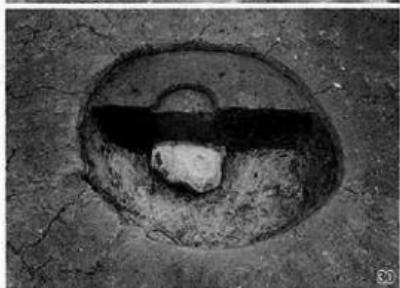
3・4号柱立柱跡柱掘形



29



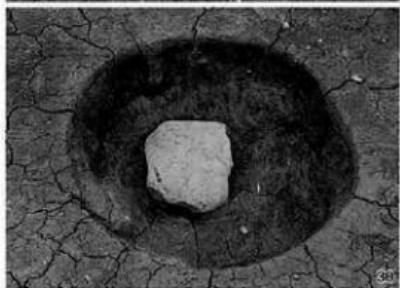
30



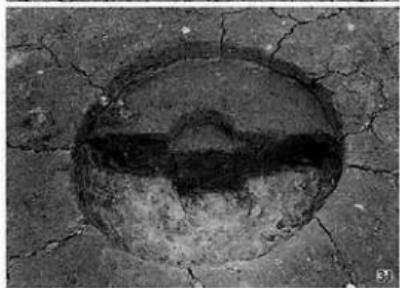
31



32



33

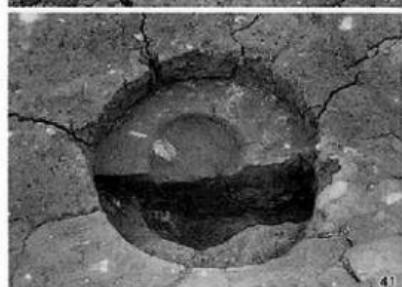
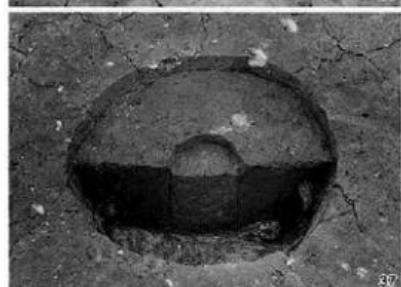
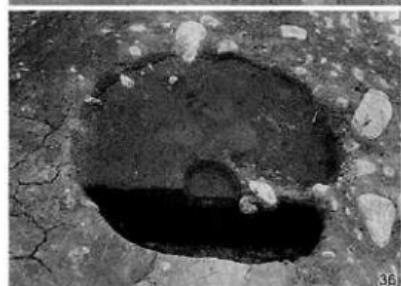
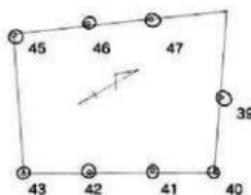
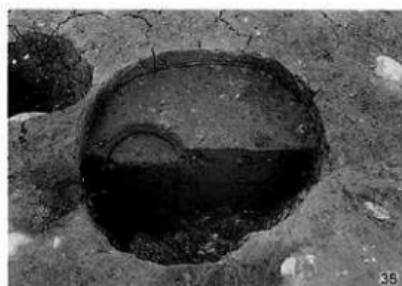


34

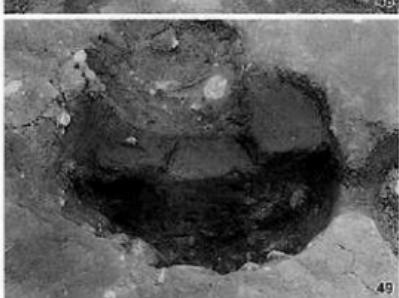
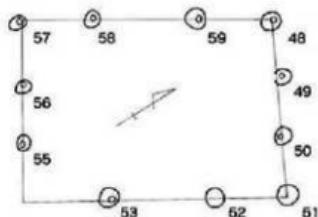
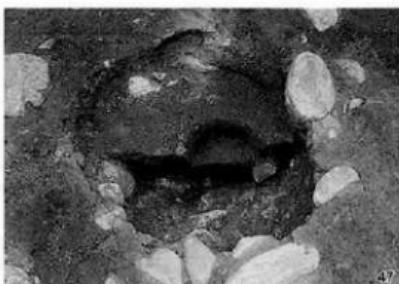


35

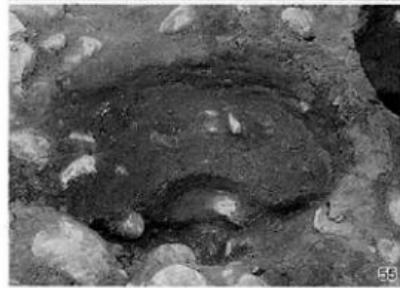
4号孤立柱建物跨柱掘形



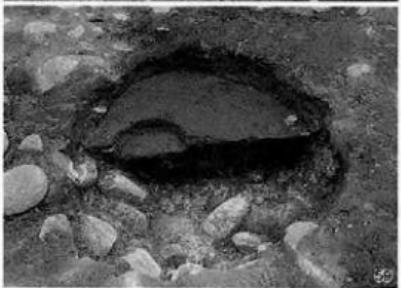
4・5号据立柱建物跡柱掲形



5·6号据立柱建物跡柱图形



6号柱立柱建物跡柱基形





1 1号堅穴住居跡（南東から）



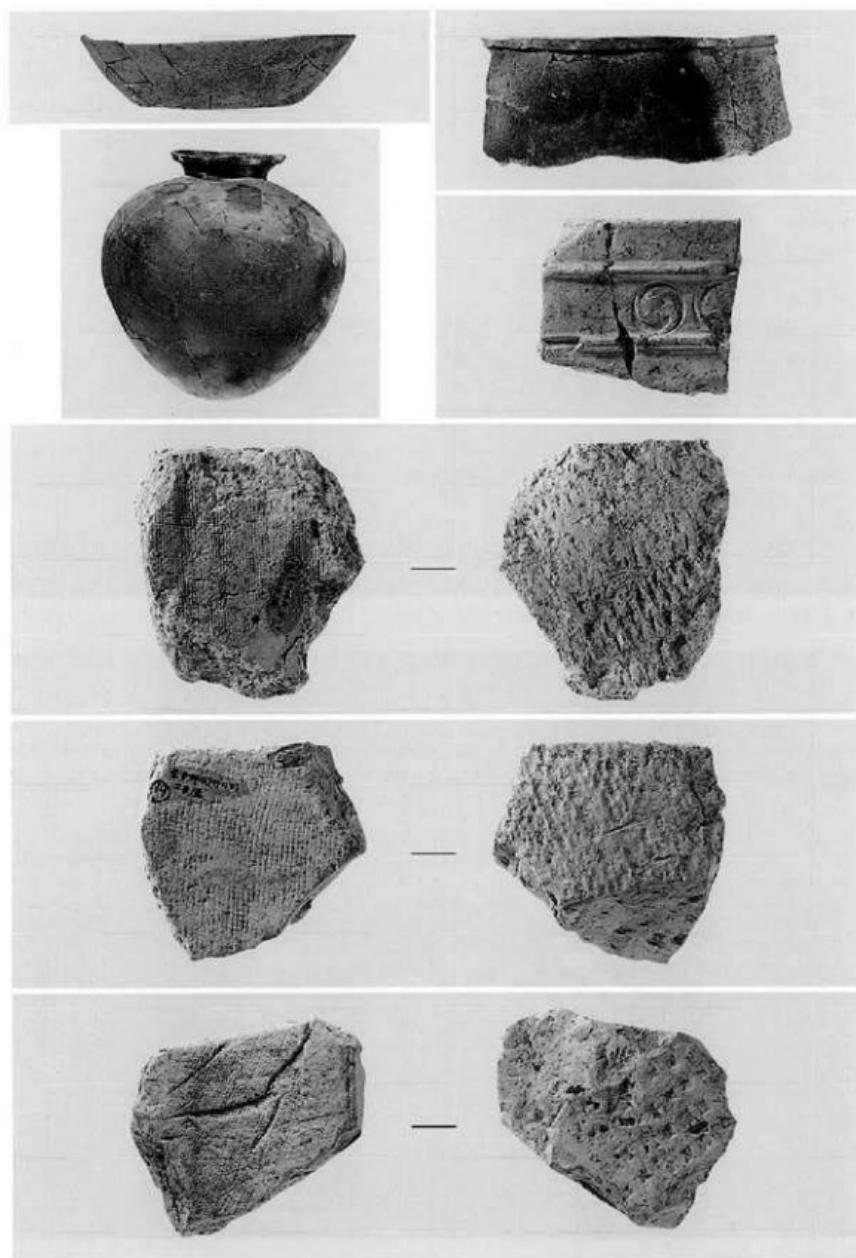
2 1号堅穴住居跡カマド（南東から）



1 1号土坑（南東から）



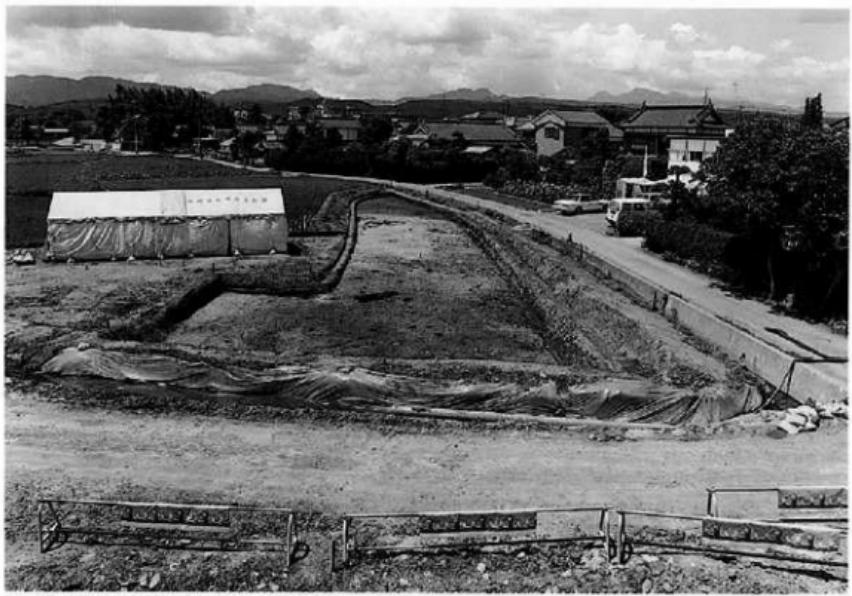
2 2号土坑（南西から）



出土遗物



1 竹ノ下遺跡2次調査区北側全景（南から）



2 竹ノ下遺跡2次調査区南側全景（北から）

報告書抄録

ふりがな 書名	みつみぞいせき・おさだいせき・おがひぞいせき・ウツケばたいせき・たびのくまいせき・うえのくまいせき・こまづらいせき・かわいせき
巻次	三ツ溝遺跡・長田遺跡・大池系遺跡・ウツケ畠遺跡・竹ノ下遺跡・上の熊遺跡・小松原遺跡・桑野遺跡 上巻
シリーズ名	一般国道10号線豊前バイパス関係文化財調査報告
シリーズ番号	第6集
編著者名	池辺元明・飛野博文・小川泰樹・秦憲二・杉原敏之(編集)
編集機関	福岡県教育委員会
所在地	〒812 福岡県福岡市博多区東公園7-7 TEL092-651-1111
発行年月日	西暦1997年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コ ー ド	北緯	東經	調査期間	調査面積	調査原因	
三ツ溝	福岡県朝倉郡新吉富村 大字宇野字三瀬、正ノ坪	40644	970076	33°34'40" 50"	131°9'55" 58"	19920623 ~199208	3,500m ²	バイパス建設
長 田	福岡県朝倉郡新吉富村 大字宇野字長田、一報	"	970083	33°34'30" 55"	131°9' 58"	19930823 ~19940527	6,900m ²	"
大池系ウツケ畠	福岡県朝倉郡新吉富村 大字宇野字大池原、ウツケ畠	"		33°34'20" 58"	131°9' 58"	19940214 ~19940519	4,500m ²	"
竹 ノ 下	福岡県朝倉郡新吉富村 大字宇野字竹ノ下、衣鉢	"	970075	33°34'02" 58"	131°10' 58"	1992021 ~0326	3,500m ²	"
上の熊	福岡県朝倉郡大平村 大字下磨原1658-1他	40645	960181	33°33'40" 58"	131°10' 58"	19910418 ~19910607	4,500m ²	"
小 松 原	福岡県朝倉郡大平村 大字下磨原字上野地	"	960182	33°33'58" 58"	131°10' 58"	19910114 ~19910330	6,300m ²	"
桑 野	福岡県朝倉郡大平村 大字下磨原1296-3他	"	960184	33°34'03" 58"	131°10' 58"	19910611 ~19910907	4,800m ²	"

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
三ツ溝	古墳・奈良	大溝	須恵器		
長 田	集 落	古墳・奈良	竪穴住居2・大溝・溝7・ 掘立柱建物6	土師器・須恵器・ 陶磁器	
大池系ウツケ畠	集 落	古墳・奈良・ 平安後	竪穴住居20・掘立柱 建物26・土坑1	土師器・須恵器・ 縄文陶器	
竹 ノ 下	古墳・奈良		掘立柱建物7・ 土坑1・樋1	須恵器・土師器	
上の熊		旧石器・ 古墳・江戸	掘立柱建物1・ 土坑10・溝6	石 器	
小 松 原		弥生・江戸	掘立柱建物1・ 土坑9・溝8	陶磁器	
桑 野	集 落	弥 生	竪穴住居7・ 土坑17	弥生土器	

*下巻の遺跡分も収録

福岡県行政資料	
分類番号 JH	所属コード 2133051
登録年度 8	登録番号 12

ウツケ畠遺跡

(三溝・長田・大池塗・竹ノ下)

豊前バイパス関係埋蔵文化財調査報告

第6集

1997年(平成9年)3月31日発行

発行 福岡県教育委員会

812 福岡市博多区東公園7-7

電話 (092) 651-1111

印刷 株式会社 三光

810 福岡市中央区大名1丁目2番20号

電話 (092) 731-6271

ウツケ畑遺跡

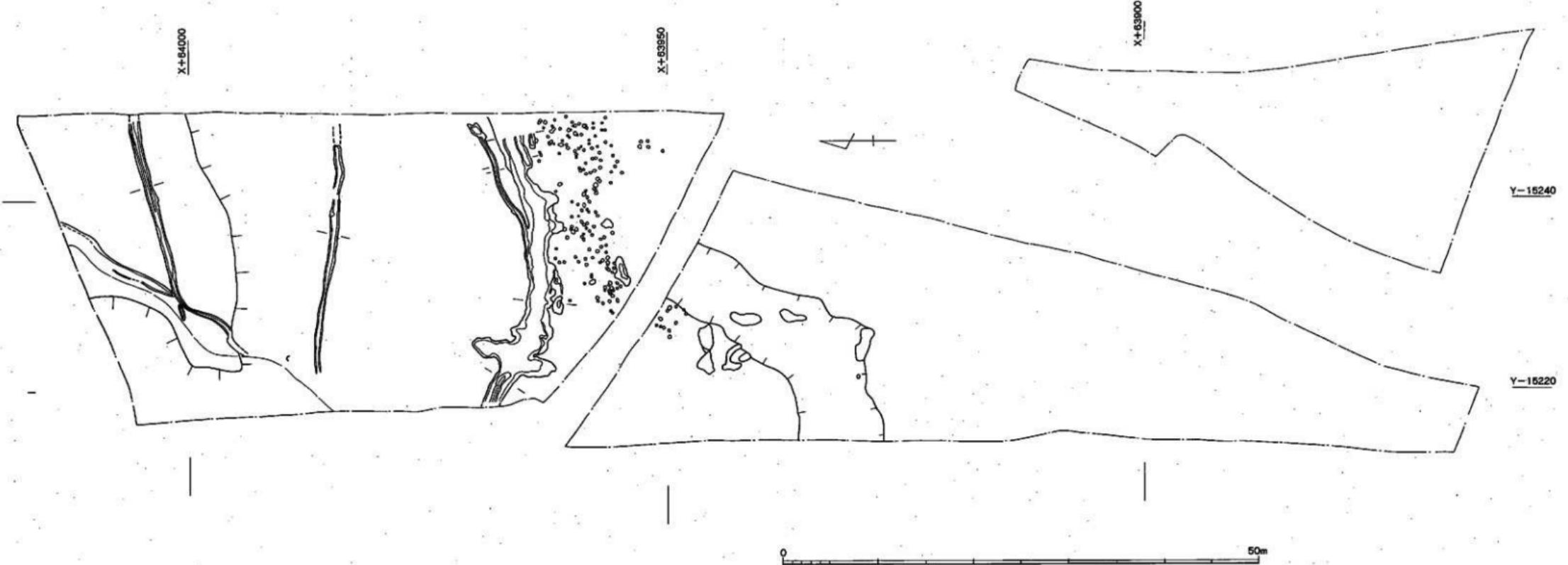
三ツ溝遺跡・長田遺跡
大池添遺跡・竹ノ下遺跡

付 図

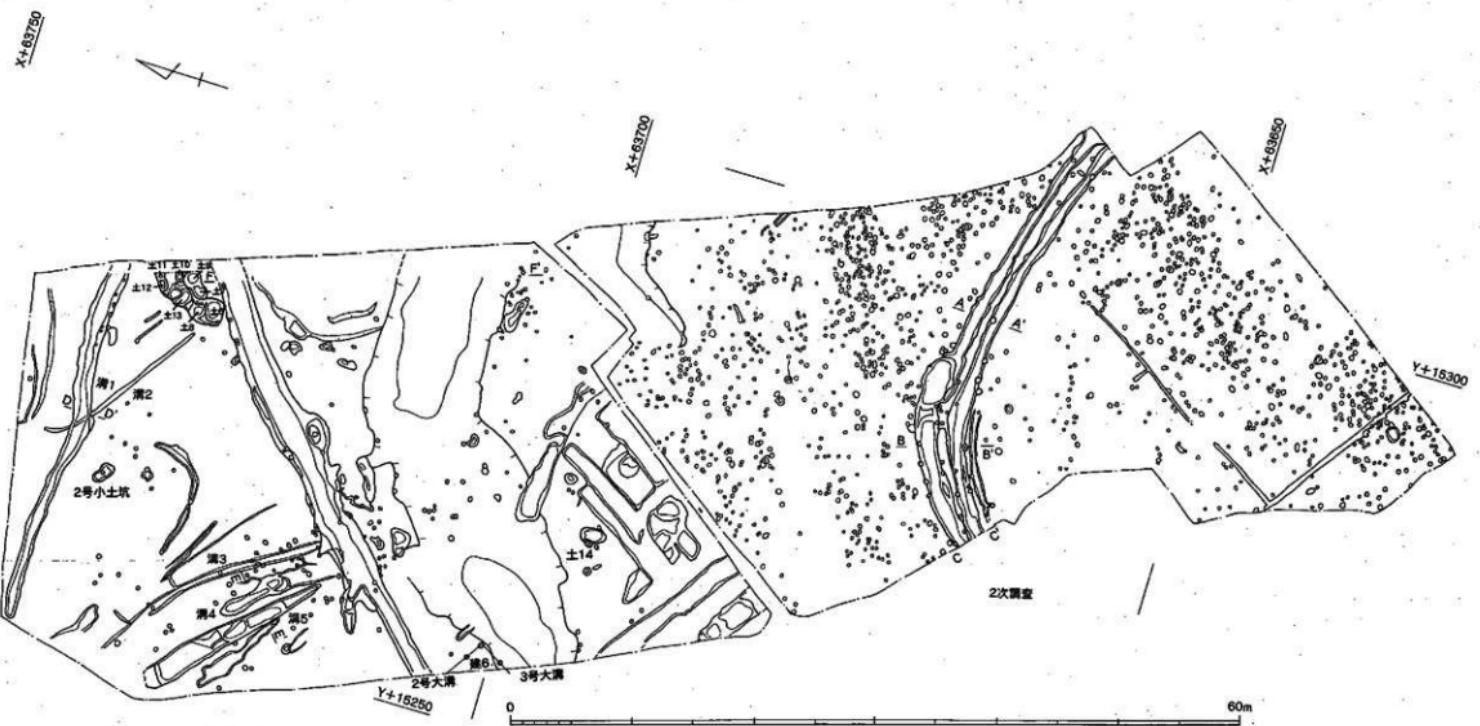
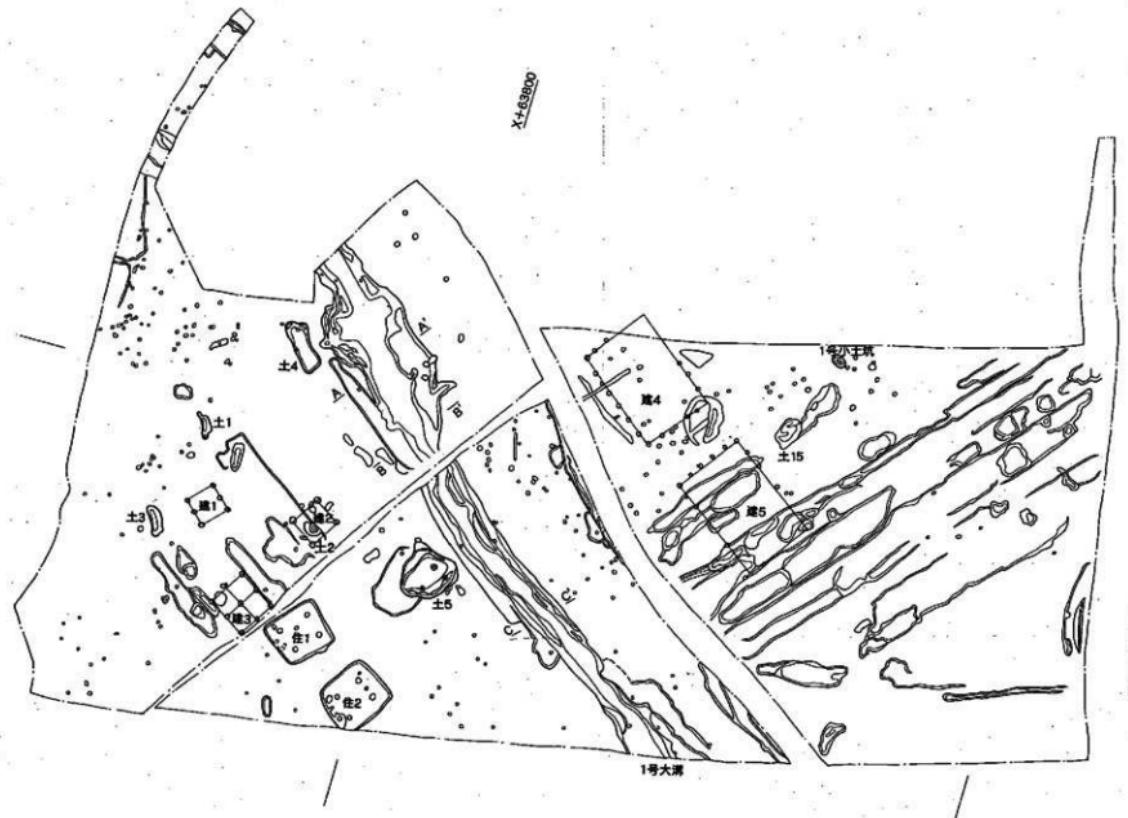
付図1. 三ツ溝遺跡遺構配置図 (1/400)

付図2. 長田遺跡遺構配置図 (1/400)

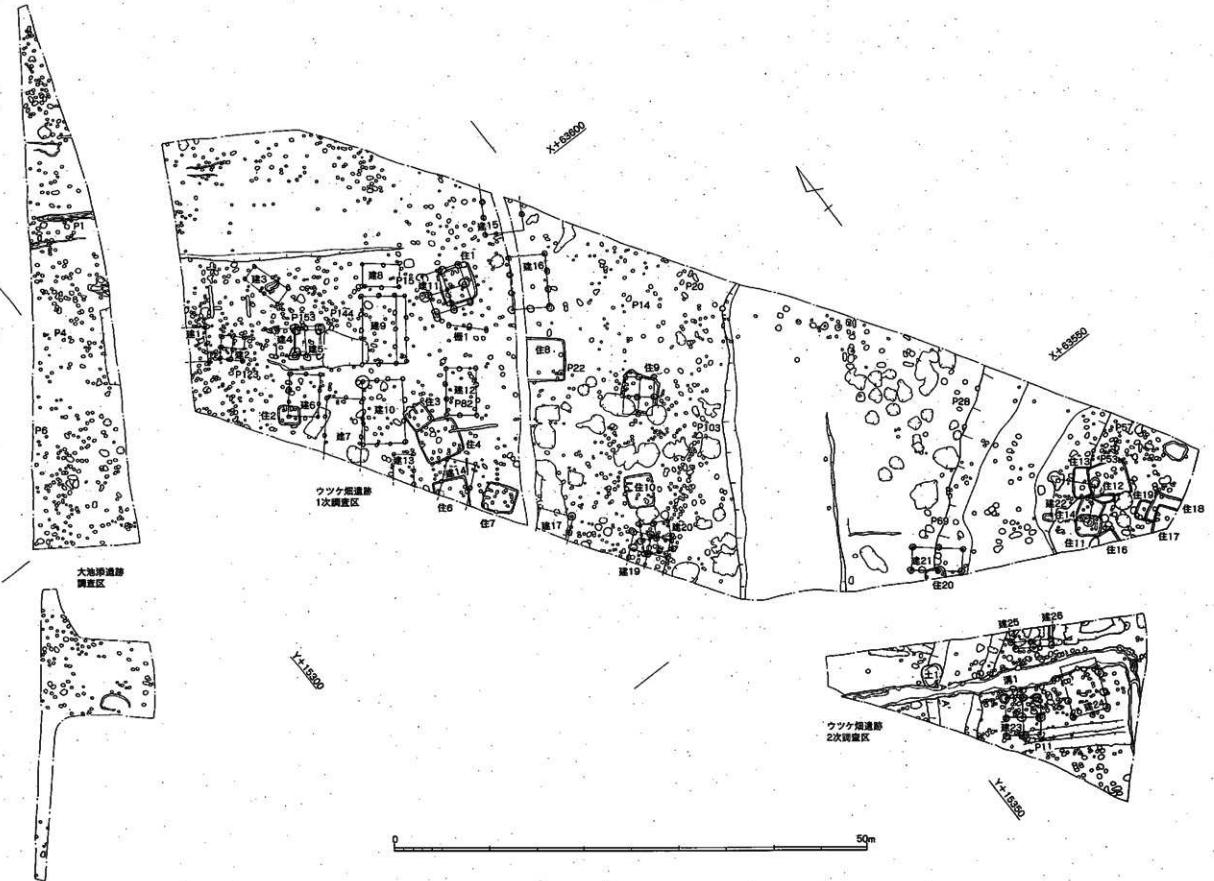
付図3. 大池添・ウツケ畑遺跡遺構配置図 (1/400)



付図1 繁前BP三ツ清遺跡遺構配置図 (1/400)



付図2 豊前B.P.長田遺跡遺構配置図 (1/400)



付図3 豊南BP・大池遺跡・ウツケ街道遺構配置図 (1/400)